

後川・中筋川 埋蔵文化財発掘調査報告書 II

風指遺跡
アゾノ遺跡



1989・3

高知県教育委員会

後川・中筋川
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

風指遺跡
アゾノ遺跡

1989・3

高知県教育委員会



緑釉陶器（風指遺跡）



噴砂及び配石遺構（アゾノ遺跡）

序

高知県教育委員会では、建設省四国地方建設局の委託を受けて、中筋川の河川改修工事に伴う緊急発掘調査を実施しております。

本書は、昨年に続き、貝同中山遺跡群の対岸に位置する、風指・アゾノ遺跡の調査結果を取りまとめたものです。今回の遺跡は、幡多郡下では資料的に空白の時代とされている平安時代から室町時代にかけてのものです。調査の結果古代や中世の集落跡を解明していく上で大切な資料を得ることができました。さらにアゾノ遺跡では、噴砂が発見され南海大地震周期説に影響を与える程の貴重な資料を提供することができました。この報告書が、埋蔵文化財の保護・保存、更には今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

なお発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の深い御理解と、関係者各位の多大なる御協力をいただいたことに深く謝意を表します。

平成元年3月

高知県教育委員会

教育長 西森 久米太郎

例　　言

1. 本書は、中筋川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財－風指遺跡・アゾノ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省四国地方建設局の委託を受け、風指遺跡・アゾノ遺跡・共同中山遺跡群等の試掘調査を、高知県教育委員会が実施した。発掘調査・試掘調査期間は、昭和63年5月10日から昭和63年9月29日まで、出土遺物整理作業及び報告書作成は昭和63年度に実施した。
3. 発掘調査体制は次のとおりである。

調査顧問　岡本健児　（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会会長）

調査員　出原恵三　（高知県教育委員会文化振興課主事）

〃　廣田佳久　（　　〃　　）

〃　松田直則　（　　〃　　）

庶務　祐瀬陽介　（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班長）

4. 発掘調査は、風指遺跡を出原、アゾノ遺跡を松田、共同中山遺跡群の試掘を廣田が主に担当し、整理作業及び報告書作成は、出原・松田が担当した。本書は、第I・II・IV章を松田、III章出原、付編2を松田が執筆している。編集は高知県教育委員会が行なった。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、調査顧問岡本健児教授に御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 本報告書付編1の執筆に関しては、通商産業省工業技術院地質調査所、近畿・中部地域地質センター、寒川旭主任研究官より玉稿をいただいた。尚現地での地震調査についても有益な御指導をいただいた。記して感謝する次第である。
7. 緑釉陶器・黒色土器については、京都市埋蔵文化財研究所の半尾政幸氏に鑑定をお願いした。記して感謝する次第である。
8. 出土遺物の写真図版中の番号については、実測図の番号と一致している。さらにアゾノ遺跡については東区をE、西区をWを付け加えている。
9. 遺構については、掘立柱建物跡をS B、土坑S K、溝S Dで標示している。尚、遺物について從来土師質土器と呼称していたものについては、今回土師器に統一した。
10. 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
11. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、及び中村市教育委員会の御協力をいただいた。また現場作業員並びに整理作業員の皆様の御援助に対し、深く感謝する次第である。
12. 出土遺物、その他の関係資料は、高知県教育委員会において保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 風指遺跡.....	5
1. 調査の方法.....	5
2. 基本層序.....	5
3. 遺構と遺物.....	8
4. 包含層出土の遺物.....	13
5. 考 察.....	15
第Ⅳ章 アゾノ遺跡.....	34
1. 調査の方法.....	34
2. 基本層序.....	34
3. 遺構と遺物.....	36
4. 包含層出土の遺物.....	56
5. 考 察.....	77
付編 1. 南海地震とアゾノ遺跡の地震跡.....	83
2. 噴砂発見と地震の発生時期について	89

挿 図 目 次

- 第1図 周辺の遺跡分布図
風指遺跡
- 第2図 風指遺跡発掘区位置図
- 第3図 セクション位置図
- 第4図 風指遺跡セクション図
- 第5図 古代土坑実測図
- 第6図 S B 1 実測図
- 第7図 中世土坑実測図
- 第8図 S K 11 断面図
- 第9図 遺構出土の遺物
- 第10図 包含層出土の遺物(土師器・杯)
- 第11図 包含層出土の遺物(土師器・杯・皿・小皿)
- 第12図 包含層出土の遺物(土師器・杯・椀底部・甕・羽釜、黒色土器・綠釉陶器)
- 第13図 包含層出土の遺物(土師器・甕・羽釜・瓶・須恵器杯)
- 第14図 包含層出土の遺物(須恵器・杯・皿)
- 第15図 包含層出土の遺物(須恵器)
- 第16図 中世遺物包含層出土の遺物
- 第17図 土師器・須恵器底部・製塙土器拓本
- 第18図 土鍾実測図
- 第19図 「南路志統篇稿草」の「森澤村図」
アゾノ遺跡
- 第20図 アゾノ遺跡発掘区位置図
- 第21図 アゾノ遺跡西区検出遺構全体図
- 第22図 アゾノ遺跡東区検出遺構全体図
- 第23図 アゾノ遺跡セクション図
- 第24図 S B 1・2 実測図(西区)
- 第25図 S B 3・4 実測図(西区)
- 第26図 S B 5・6 実測図(西区)
- 第27図 土坑実測図(西区)
- 第28図 S B 8・10 実測図(東区)
- 第29図 S B 7・11 実測図(東区)
- 第30図 S B 9・12 実測図(東区)
- 第31図 遺構出土の遺物
- 第32図 " "
- 第33図 " "
- 第34図 S D 1・2 平断図
- 第35図 配石遺構出土遺物
- 第36図 包含層出土の遺物(土師器)
- 第37図 " "(")
- 第38図 " (土師器・瓦質土器)
- 第39図 " (瓦器・須恵器)
- 第40図 " (須恵器)
- 第41図 " (須恵器・備前焼)
- 第42図 " (備前焼)
- 第43図 " (瀬戸・美濃系陶器・青磁)
- 第44図 包含層出土の遺物(青磁・白磁)
- 第45図 " (白磁・染付・石製品・鉄製品)
- 第46図 包含層出土の遺物(土鍊)
- 第47図 南海地震および東海地震の発生時期
- 第48図 高知県に被害をもたらせた地震の震度分布
- 第49図 液状化跡の模式図
- 第50図 東区北東部噴砂平面図
- 第51図 噴砂位置図
- 第52図 噴砂断面図
- 第53図 配石遺構平面図・エレベーション

表 目 次

- 第1表 風指遺跡・中世土坑観察表
- 第2表 土師器杯・皿・小皿の構成比率
- 第3表 アゾノ遺跡・土坑観察表
- 第4表 土鍾計測表
- 第5表 南海地震の時期と被害の概要

図 版 目 次

風指遺跡

図版 1 風指遺跡全景（北から）	西区完掘状況（北より）
風指遺跡の低丘陵を望む（南から）	
図版 2 西区遺構完掘状況	図版17 東区遺構出土状況
東区完掘状況	東区Ⅲ層遺物出土状況（備前・茶臼）
図版 3 SK 2	図版18 東区Ⅲ層遺物出土状況（青磁）
SK 3	〃 （白磁）
図版 4 SK 7・8	図版19 東区Ⅲ層遺物出土状況（白磁）
SK 17	〃 （白磁・瓦質土器）
図版 5 ピット 1、床面砥石出土状況	図版20 東区遺物出土状況（白磁・備前）
SK 3 床面土師器杯底部出土状況	東区Ⅲ層遺物出土状況（天目茶碗）
図版 6 VII層遺物出土状況（須恵器Ⅲ）	図版21 東区Ⅲ層遺物出土状況（備前）
同上（土師器杯）	東区 O-26・P38遺物出土状況
図版 7 VII層遺物出土状況（綠釉底部）	図版22 東区配石遺構（西より）
同上（須恵器Ⅲ）	〃 （東より）
図版 8 IV層遺物出土状況	図版23 東区配石遺構（南より）
同上（青磁碗）	O-24区周辺噴砂検出状況（西より）
アゾノ遺跡	図版24 東区東壁セクション（西より）
〃	〃
図版 9 調査前遠景（北より）	図版25 東区 O-24・噴砂北壁セクション
西区遺構検出状況（南より）	東区ピット群完掘状況
図版10 西区西壁セクション（東より）	図版26 東区遺構完掘状況（西より）
西区Ⅲ層遺物出土状況	南側Ⅲ層除去
図版11 SK 6 遺物出土状況	東区遺構完掘状況（西より）
〃	
図版12 SK 13遺物出土状況	図版27 出土遺物 1（風指遺跡）
西区・E-33・P2 遺物出土状況	図版28 〃 2（〃）
図版13 西区・C-35・P10遺物出土状況	図版29 〃 3（〃）
西区・B-37・P1 遺物出土状況	図版30 〃 4（〃）
図版14 SK 12・22（西から）	図版31 〃 5（アゾノ遺跡）
SK 18・SK 11（南から）	図版32 〃 6（〃）
図版15 SK 20・29（東より）	図版33 〃 7（〃）
SK 37・38（西より）	図版34 〃 8（〃）
図版16 SK 31（西より）	図版35 〃 9（〃）
	図版36 〃 10（〃）

図版37 出土遺物11

図版38 " 12

図版39 " 13

図版40 " 14

図版41 " 15

図版42 " 16

図版43 " 17

図版44 " 18

図版45 出土遺物19

図版46 " 20

図版47 " 21

図版48 " 22

図版49 " 23

図版50 " 24

図版51 " 25

付図 1. 風指遺跡古代検出遺構全体図

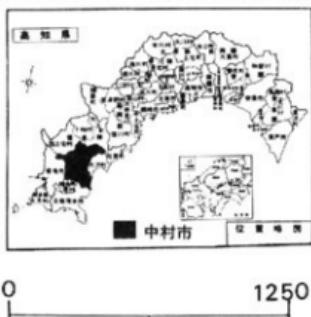
2. 風指遺跡中世検出遺構全体図

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

一級河川中筋川は、出水になると水位が上昇し、付近は県下でも屈指の洪水地帯である。建設省四国地方建設局中村工事事務所は、堤防の造築と護岸の強化を進めるため、昭和60年度から計画的に改修工事を実施してきている。中筋川流域は、埋蔵文化財の宝庫として周知されている所であり、中筋川左岸には、昭和61年度に発掘調査を実施した具同中山遺跡群が所在する。さらに下流右岸には、中世の集落址であったと考えられる具重遺跡が所在している。このように中筋川左・右岸一帯には、埋蔵文化財包蔵地が広がっている。高知県教育委員会は、遺跡保存のための対策を講じなければならず、建設省四国地方建設局中村工事事務所と数度の協議を実施し、風指・アゾノ地区においての遺跡の有無、遺跡が確認された場合はその正確な範囲、性格、時代、深度等のデーターを得るために試掘調査を実施する点などにおいて合意を得た。昭和62年8月2日～27日にかけてアゾノ地区、8月27日～9月9日・11月19日～11月27日にかけて風指地区の試掘調査を実施した。アゾノ地区では、11～15世紀に亘る遺構・遺物を検出し、遺跡の範囲として、3,850m²を確認した。時代は11～15世紀に亘る遺物と、柱穴・土坑等の遺構を検出した。風指地区では、約1,500m²の面積を確認し、中世と古代、更に弥生時代の複合遺跡であることも確認した。以上試掘調査の結果から、工事施行範囲については、記録保存の発掘調査が必要となった。高知県教育委員会は、建設省も含め中村市教育委員会と調査実施に向けての協議を行なった結果、中村市教育委員会は、専門調査員の配置もなく、長期に亘る発掘調査体制を編成することは不可能であるということから、昭和61年度に続き、高知県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。ここに高知県教育委員会は、建設省四国地方建設局中村工事事務所と委託契約を結び今次の発掘調査に至った。調査期間は、昭和63年5月10日から9月29日までである。



- | | |
|------------|-------------|
| 1. 風指遺跡 | 12. ナリカド城跡 |
| 2. アゾノ遺跡 | 13. 扇城跡 |
| 3. 具同中山遺跡群 | 14. 楠島西城跡 |
| 4. 近沢城跡 | 15. 楠島城跡 |
| 5. 具重遺跡 | 16. 大才田城跡 |
| 6. 香山寺跡 | 17. 浅村遺跡 |
| 7. 水田遺跡 | 18. ミヤゾエ遺跡 |
| 8. 五反田遺跡 | 19. コヲヤバタ遺跡 |
| 9. 西和田遺跡 | 20. 森沢城跡 |
| 10. 栗本城跡 | 21. 森沢北ノ城跡 |
| 11. 田黒遺跡 | 22. 船戸遺跡 |



第1図 周辺の遺跡分布図

第II章 遺跡の位置と歴史的環境

中村市は高知県西部の拠点都市であり、幡多地方における政治・文化の中心的役割をはたしている。そして、四国第二の大河四万十川とその支流後川・中筋川が作りなす平野部に立地し、さらに幡多山地とも呼ばれる低丘陵部をも市域内に持つ。風指・アゾノ遺跡は、市街地から宿毛方面に向った具同地区の南西部に位置し、中筋川右岸の河岸段丘上に立地する。風指遺跡は、貝ヶ森・葛籠山の山中より北流する風指川が中筋川と合流する地点を範囲とし、アゾノ遺跡は、さらに中筋川下流に蛇行した屈曲部を範囲とする。

縄文時代を中心川流域で見ていくと、中流域に位置し中筋川左岸の段丘先端部とその直下の低湿地に久保畑遺跡とツグロ橋下遺跡が所在する。いずれも試掘調査が実施されているが詳しい報告はない。両遺跡とも晩期を主体とした時期に位置づけられているが、ツグロ橋下遺跡からは前期の農式II式土器が出土しているという指摘もある。晩期では共に県下屈指の遺跡である。中筋川をさらに下ると国見遺跡が所在する。中期前半と後期中葉の遺物が見られるが、木村剛朗氏は石器の形態から早期中葉の時期も存すると想定している。縄文晚期終末から弥生前期にかけては、四万十川右岸に所在する人田遺跡が有名である。その他中期後半にいたると山上に立地する集落が見られるようになる。アゾノ遺跡対岸の具同中山遺跡群でも若干であるが包含層中より中期中葉から後葉にかけての弥生土器が出土している。

古墳時代に入ると、中筋川水系で宿毛市平田町に所在する平田曾我山古墳・高岡山古墳などの5世紀前半に位置づけられる古墳が造営されている。これらは幡多の古墳文化を語るうえで看過できないものである。さらに対岸に位置する具同中山遺跡群では、5世紀後半から6世紀前半にかけての祭祀遺跡が調査されている。この遺跡群は、古くからの地域基盤を背景に文化流入の門戸として開かれていたと想定できる。また周辺において存在すると考えられる集落は、須恵器導入についても畿内との繋がりの上で中心的役割を果たしていたであろうとみられるし、また遺跡群からは5世紀末から6世紀初頭の時期に在地で生産されたと考えられる須恵器も出土しており、将来当該期の窯もこの地域周辺で発見される可能性が生まれてきた。

古代の幡多についての文献は数少ない。ただ『和名類聚抄』に幡多郡の記載として5郷が傘下にあるとされているのみである。幡多郡における古代の様相は、文献面のみならず考古学面においても不鮮明な時期である。しかし今回の風指遺跡で、平安時代中期の一様相が解明されたことは特記すべきことである。

中世においては、まず幡多庄について若干述べなければならない。幡多庄が莊園として成立した時期は不明であるが、鎌倉初期1206~1237年頃と推定されている。文献で『三長記』によると、土佐は1206年に九条家の領國となっていたようである。『金剛福寺文書』では、アゾノ遺跡の南山麓に位置する香山寺に法橋上人が所領を1237年に寄進したという文書が存在しており、また藤原定家の『明月記』によると幡多は、九条家の支配下に入っており、いずれにして

も九条家から一条家を創立した一条実経に1250年頃幡多庄は譲られているのである。中世において一条氏が応仁の乱をきっかけで1468年、幡多庄中村に下向する時期までの考古学的調査は少ない。あえてあけるとすれば、香山寺の川平山中世墓地群の発掘調査があげられるのみである。香山寺北側登山口の丘陵端部に五輪塔群で墓地を形成している。この調査で墓壙から、備前Ⅲ期の壺、及び和泉型と考えられるⅢ～Ⅳ期にかけての瓦器碗が出土していることから、13世紀後半から14世紀の頃形成されたと考えられる。その他では、アゾノ遺跡から中筋川沿いの下流に位置する貝塚遺跡があげられる。貝塚遺跡は、本格的な調査は実施されておらず13～14世紀にいたる輸入陶磁器が多量に表採されている。

一条氏は、下向以来公家大名として発展し、さらに莊園内の土豪を支配下に組み入れ、莊園領主から武力を背景とした戦国大名へと勢力をのばした。この時期以降になると栗本城跡・中村城跡を中心とした中世山城が爆発的に増加していく。昭和62年に実施した分布調査の段階で中世城跡の占める割合が56%と極めて高い数値を示している。一条時代が終焉し、長宗我部氏・山内氏へと時代は変遷していくが、近世になると中村奉行所の調査も実施され、徐々にではあるが考古学的にこの地域の中・近世の実態が解明されつつある。

第三章 風指遺跡

1. 調査の方法

風指遺跡は、昭和62年度の試掘調査によって、旧地形が上流側から下流側に向って下降しており、遺物包含層や遺構検出面は旧地形の傾斜の上に載っていること、また遺物包含層や遺構検出面が上流側に濃密に存在し、下流側に稀薄であることが明確になされた。従って今次調査においては、遺物・遺構が多く存在する上流側を西区、下流側を東区として発掘区を設定し、中央部には幅2.0mのセクションベルトを残した。

西区は、セクションベルトから調査区西端に突き出す低丘陵の裾まで幅4m・長さ21mのトレンチを設定した。その結果トレンチのほぼ全面に遺構が広がっており、かつ遺構検出面が上層と下層の2面に存在することが明らかとなった。そこで、まず上層においてトレンチを西区全面に拡張し、次いで下層の調査にかかった。東区は、中央セクションベルトに沿って幅4m、長さ19mのトレンチを開けたところ遺物包含層は認められたが、遺構はほとんど存在しなかった。従ってT字状の発掘区を設定し調査を行った。

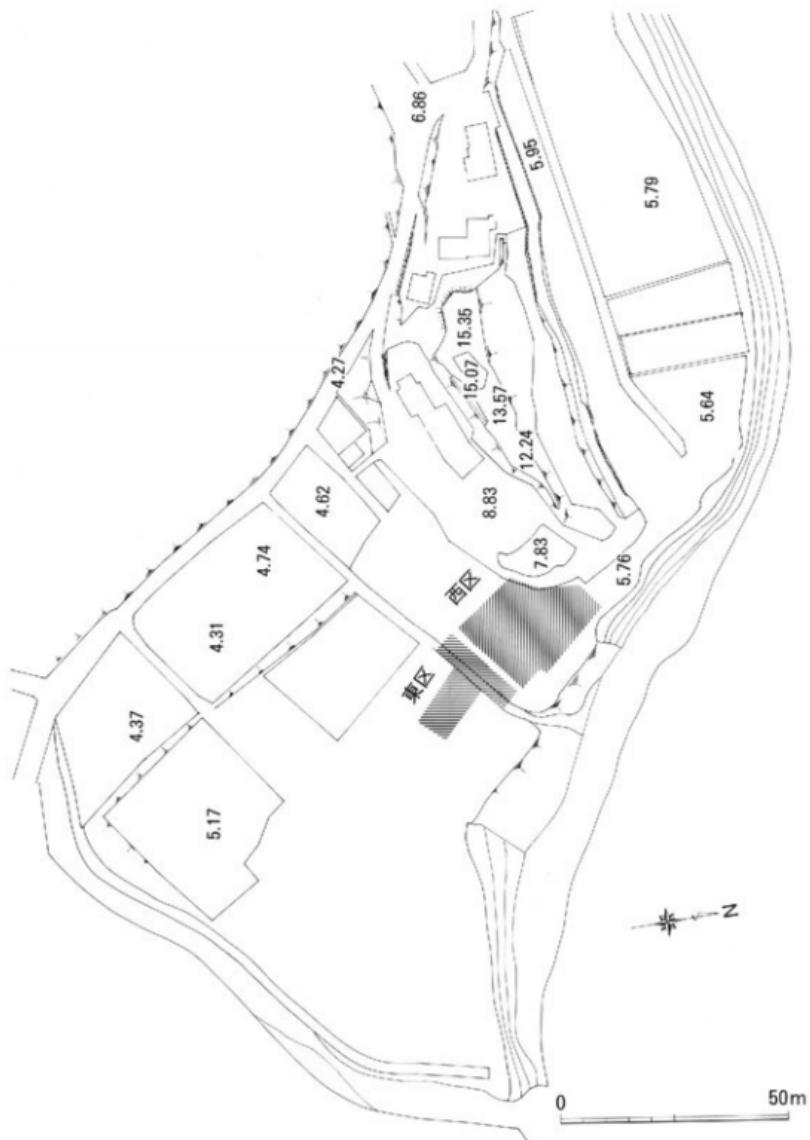
西区の遺物取り上げや検出遺構の実測は、昭和61年度に対岸で実施した具同中山遺跡群発掘調査の際に設けたトラバースポイントを利用し、4m×4m方眼を組んで行った。

2. 基本層序 (第4図)

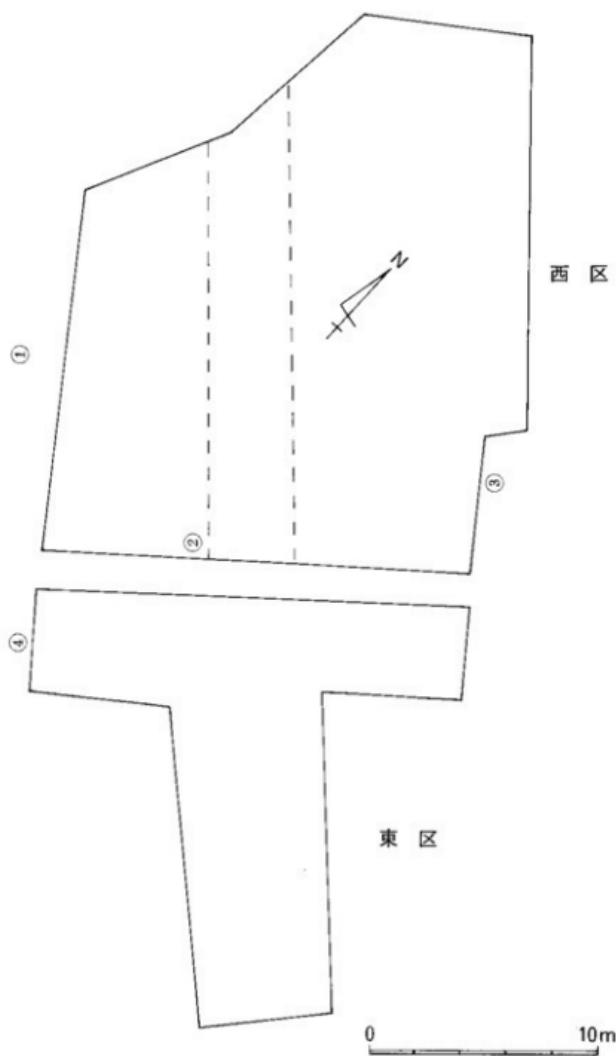
基本層序は、I層からXI層まで分けることができる。各層位名は、I層：客土 II層：旧耕作土 III層：茶色シルト層 IV層：茶褐色粘質土層 V層：黄茶色シルト層 VI層：淡茶色粘質～シルト層 VII層：淡茶灰色粘質土層 VIII層：灰茶色粘質土層 IX層：黄茶色粘質土層 X層：黄褐色シルト層 XI層：明黄褐色粘質土層(地山層)である。西区の西南壁(第4図①)を見ると地層が右側(上流側)、すなわち低丘陵に向って上昇していることが良くわかる。I～IV層が右端で切れているのは、現代の削平による。西区の3つの壁面(第4図①、②、③)のうちI～IV、VIは各面に認められるが、V層は、中筋川に最も近い東北壁(第4図③)にのみ見られ、VII～X層は、丘陵下の西南壁(第4図①)にしか見ることができない。従って後者は、丘陵からの斜面堆積によるものと考えられる。このことは、VII・IX層が丘陵を中心にして扇状に平面分布をしていることからも明らかである。

次に各層の形成時期についてであるが、包含層遺物から考えてIV層が中世(14～16世紀)、VII・IX層が古代(9～10世紀)比定することができる。III・V・VI・IX層は無遺物層であり、これらは中筋川増水時に沈没堆積したものと考えられる。中世の遺構は、V・VII層あるいは一部IX層を基盤として掘り込まれ、古代の遺構は、X・XI層に掘り込まれている。

本調査区の旧地形は、現地表面との比高差3mを測る低丘陵が、中筋川及び風指川に向って下降していたと考えられるが、長い年月の中で増水による沈没を繰り返し、丘陵の裾部がせば



第2図 風指遺跡発掘区位置図



第3図 セクション位置図

まり平坦面が形成され、古代・中世には人々の生活の場を提供することになったものと考えられる。

3. 遺構と遺物

検出遺構と遺物は、先述のように層位的に古代と中世に分けることができる。遺構は、西区にのみ存在し、東区では検出することができなかった。ここでは、遺構と遺構出土の遺物について述べる。包含層出土の遺物については、後述する考察で述べることにする。

(1) 古代の遺構と遺物

S K 2 (第5図)

調査区中央部より南に位置する。 $1.2 \times 1.06\text{m}$ の方形プランをなし、深さ48cmを測る。断面形は逆台形である。埋土は2層(I層:淡黄茶色粘質土 II層:炭化物を多量に含む茶色粘質土)からなり、各層より多くの土器が出土した。図示したものは、土師器杯(1、2)、須恵器甕(20)土鉢(24)であるが、この他にも土師器杯底部24点等細片150点、須恵器片7点が出土している。1は、内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。2は、杯I類に属するもので内底がベタ高台内に落ち込む、外底は、ヘラ切りである。20は、口縁部が強く外反し、端部を上下に肥厚させ、口唇部の強い横ナデによって凹状をなす。

S K 3 (第5図)

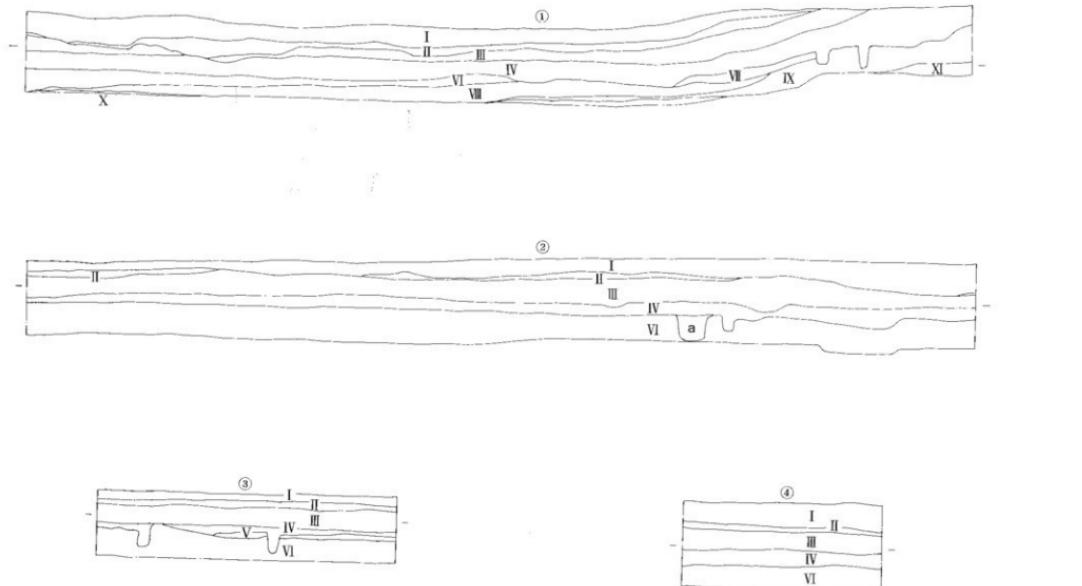
S K 2 の1m南に位置する。 $1.02 \times 0.86\text{m}$ の方形プランをなし、深さ24cmを測る。断面形は逆台形である。埋土は、S K 2 と同じように2層(I層:淡黄茶色粘質土 II層:茶色粘質土)からなっている。土師器杯(3)は、床面より出土している。杯II類に属するもので、やや厚手の底部から直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。内外面とも剥離が激しく調整の観察ができないが、外底はヘラ切りであり粘土紐の接合部がわずかに見られる。この他埋土中より土師器細片40点、須恵器細片5点が出土しているが、土師器底部はすべてヘラ切りである。

S K 4 (第5図)

S K 3 の4m東に位置する。 $1.04 \times 0.8\text{m}$ の不整形プランをなし、深さ29cmを測る。断面形は、逆台形をなす。埋土は灰茶褐色單純一層である。埋土中より土師器小皿(4)が出土している。小皿I-A類に属するもので、底部から丸味をもって立ち上がり、わずかに外反しながら口縁部に至る。内外面横ナデ調整で、底部はヘラ切りである。この他土師器底部等細片10点、須恵器細片4点が出土している。土師器底部はすべてヘラ切りである。

S K 8 (第5図)

調査区の東南隅に位置する。 $1.56 \times 1.49\text{m}$ の不整形プランをなし、深さ24cmを測るが、東側半分を中世のS K 7に切られている。断面形は船底状を呈し、埋土は淡茶褐色粘質土單純一層である。埋土中より土師器杯(5)が出土している。杯V類に属するもので、体部内面にロク

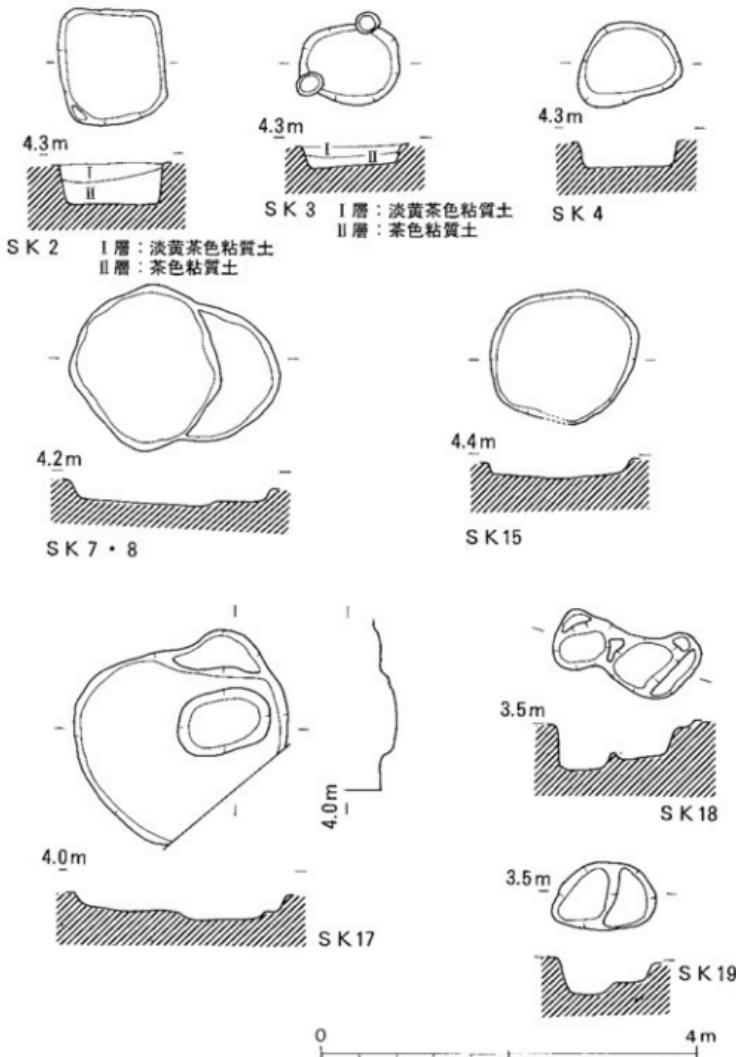


第4図 風指遺跡セクション図

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| I層：客土 | V層：黄茶色シルト層 |
| II層：旧耕作土 | VI層：淡茶色粘質～シルト層 |
| III層：茶色シルト層 | VII層：淡茶色粘質土層 |
| IV層：茶褐色粘質土層
(中世遺物包含層) | VIII層：灰茶色粘質土層 (古代遺物包含層) |
| | IX層：黄茶色粘質土層 ("") |

X層：黄褐色シルト層
XI層：明黄褐色粘質土層 (地山)
a層：SK 11埋土

0 4m



第5図 古代土坑実測図

口目が残り、底部は磨耗しているがヘラ切りであろう。この他S K 2出上の須恵器甕(20)と同様の口縁細片や、土師器椀底部・杯I類等30点近い土師器・須恵器片が出土している。

S K15 (第5図)

S K 3より1.2m南に位置する。1.52×1.4mの不整形プランを呈し、深さ24cmを測る。断面形は、船底状を呈するが、南壁の上部は攪乱を受けている。埋土は灰茶色粘質土単純一層である。床面より土師器杯(7)が出土している。V類に属するもので、底部から直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。器面の荒れがひどく調整は不明であるが、外底はヘラ切りで、粘土紐(幅1cm)の接合部が見える。この他埋土中から、土師器杯・皿・長胴甕の口縁部細片等が出土しており、杯底部にはヘラ切り・糸切りの両者が見られる。また中世遺物も少量含まれるところから、時期決定が難しいが検出面から一応古代の遺構として把握し、中世遺物や糸切りは攪乱時の混入と考えたい。

S K17 (第5図)

調査区の東端に位置する。一部が中央セクションベルト内に入り込んでいるため全体の形状を知ることが出来ないが、2.36×1.9mの不整形プランをなすものと考えられる。深さは20cmを測るが、床面東側に深さ8cmの小土坑状の落ち込みがある。埋土は灰茶色粘質土単純一層であり、床面・埋土中より多くの遺物が出土している。土師器杯(14)、須恵器甕(21)は床面出土である。前者は杯III-Cに属するもので、外面立ち上り付近に強い横ナデが加わり、口縁部はわずかに外反する。体部内外は横ナデ調整で、外底はヘラ切り後ナデている。後者は、外面は格子目の粗い叩き、内面は青海波文をナデ消している。

埋土中からは、土師器杯(6・10)、土師器皿(9)、土師器椀(8)、須恵器杯(15・16)、須恵器甕(17)、土錘(25・26)が出土している。6は杯I類に、10はIII-C類に属する。9は皿I-B-①類で、底部から丸味をもって立ち上がり口縁部は外反する。15は高台を有し、16は無高台の底部から直線的に立ち上がり口縁部をわずかに肥厚させ丸くおさめている。内外面にロクロ目が残り、外底はヘラ切り後ナデしている。17は、ゆるやかに弧状を描くタイプで口縁端部をわずかに下方につまみ出し、口唇部を面取っている。全面横ナデ調整である。図示したもの以外にも杯・椀・皿等の細片が100点近く出土している。

S K18 (第5図)

S K15の北西に位置する。不整形のプランで、中央部が括れ東・西が広がっている。長さ1.46m、幅は西で70cm、東で64cm、深さは西で37.3cm・東で47.3cmを測る。埋土は灰茶色粘質土単純一層である。土師器杯(13)と須恵器杯(18)が埋土中より出土している。前者はII類に属し、断面逆台形状の厚い高台でヘラ切りである。後者は直線的に立ち上がり口唇部は丸くおさめる。体部内外面横ナデ調整、外底はヘラ切り後ナデしている。

S K19 (第5図)

S K18の西隣に位置する。1.0×0.7mの不整形プランをなし、床面は段状に掘り込まれ、深

さは南側が4.0cm・北側が18.0cmを測る。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は、埋土中より土師器・須恵器の細片が数点出土している。

ピット（付図1）

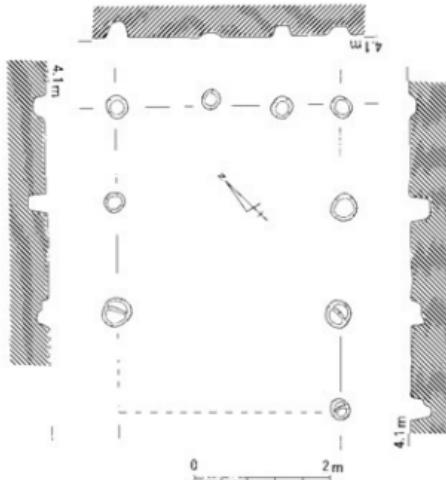
P 1～P 3 から図示可能な遺物が出土している。P 1は、径30cm、深さ5cmを測る。埋土中より砾石（27）が出土している。長さ5.7cm、幅3.1cm、厚さ0.2～0.4cmで、使用面は二面でかなり使い込まれている。P 2は、径30.0cm前後、深さ34.0cmを測る。埋土中より須恵器杯底部（19）が出土している。底部外縁端に高台を貼付し、高台底は凹状をなす。外底はヘラ切り後弱い削りを施し更にその上をナデている。体部内外面は横方向のナデ調整である。P 3は、径40cm、深さ18cmを測る。埋土中より土師器小皿（11）と土師器杯（12）が出土している。11は小皿II-C類に属するもので、底部が上げ底状になっている。12は口縁部が外反し端部は丸くおさめている。両者共に磨耗が激しく調整は観察できないが、内外面横ナデであろう。

以上のピット埋土は、すべて灰茶色粘質土である。

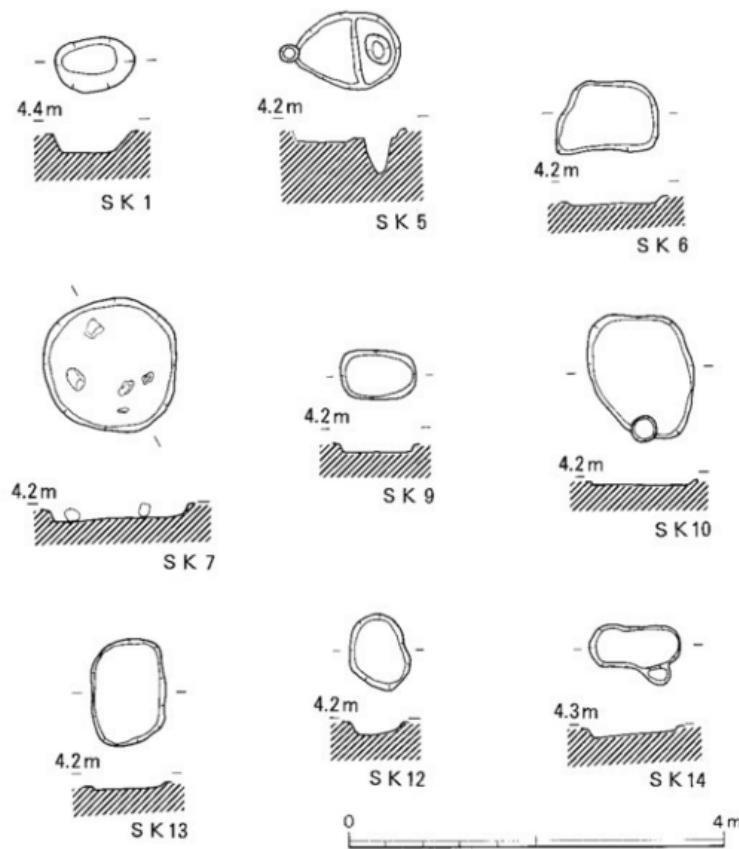
この他Ⅷ・Ⅸ層からは、多量の土器と土錐が出土しているが、これらについては後述する。

(2) 中世の遺構と遺物

中世遺構は、掘立柱建物1棟・土坑10基・ピット多数を検出した。ここでは、掘立柱建物と遺物が比較的良好な状態で出土した土坑について説明を加え、他の土坑については一覧に譲る。



第6図 SBI 実測図



第7図 中世土坑実測図

S B 1 (第6図)

S B 1は3間×3間(4.8×3.6m)で、棟方向はN-50°-Wを指す。各柱穴は、おおむね円形で径25~45cm、深さ10~33cmを測る。柱穴間の距離は、桁方向が0.9~1.45m、棟方向が1.45~1.6mを測る。柱穴埋土は黒褐色で、各柱穴より中世の土師器細片が少量出土している。

S K 7 (第7図)

中央セクションベルト寄りに位置する。1.6×1.47mの隅丸方形プランをなし、深さ14.1cmを測る。埋土は灰褐色である。壁は斜めに立ち上がり、床面は水平である。遺物は、床面から10~20cm大の河原石5個が出土し、埋土中より青磁細蓮弁文・土師器細片・鐵滓が出土している。

S K 11 (第8図)

S K 11は、平面で確認することができず中央セクションベルトの壁面で断面を検出した。幅70cm、深さ50cmを測る。床面はほぼ平坦であるが中央部が最も深く、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は、淡黄茶色シルト層で他の土坑のものとは異っている。

埋土中より遺物は出土していないが、検出面直上からほぼ完形の青磁碗(28)が伏せた状態で出土している。また28の高台に接するように土師器皿(29)が出土している。28は、厚い底部から丸いカーブを描いて立ち上がった後、直線的に伸び口縁部に至る。口縁部は、わずかに肥厚し丸くおさめている。高台は外方に張り出し、疊付は内傾する面をなす。外底は粗く削り中央に兜幅を有し、3箇所に目あとが認められる。体部外面は線描きによる蓮弁・見込みには花文を彫っている。釉は褪せた緑色を呈し、高台内面の一部にまで及ぶ。胎土は、灰色で粗い。29は、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。

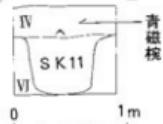
以上2点の遺物は、S K 11の埋土内から出土したものではないが、出土状況から判断して、S K 11と密接な関係があると考えられるところからS K 11に伴うものとして扱った。S K 11の埋土は、シルトであり他の遺構埋土とは全く異なる。したがってS K 11は、第VI層を掘削して土坑とした後、何らかの理由で直ぐに埋め戻

され、その直後に28と29が置かれたものである。

4. 包含層出土の遺物

第IV層から土師器・須恵器・青磁・白磁・備前焼が出土地してある。

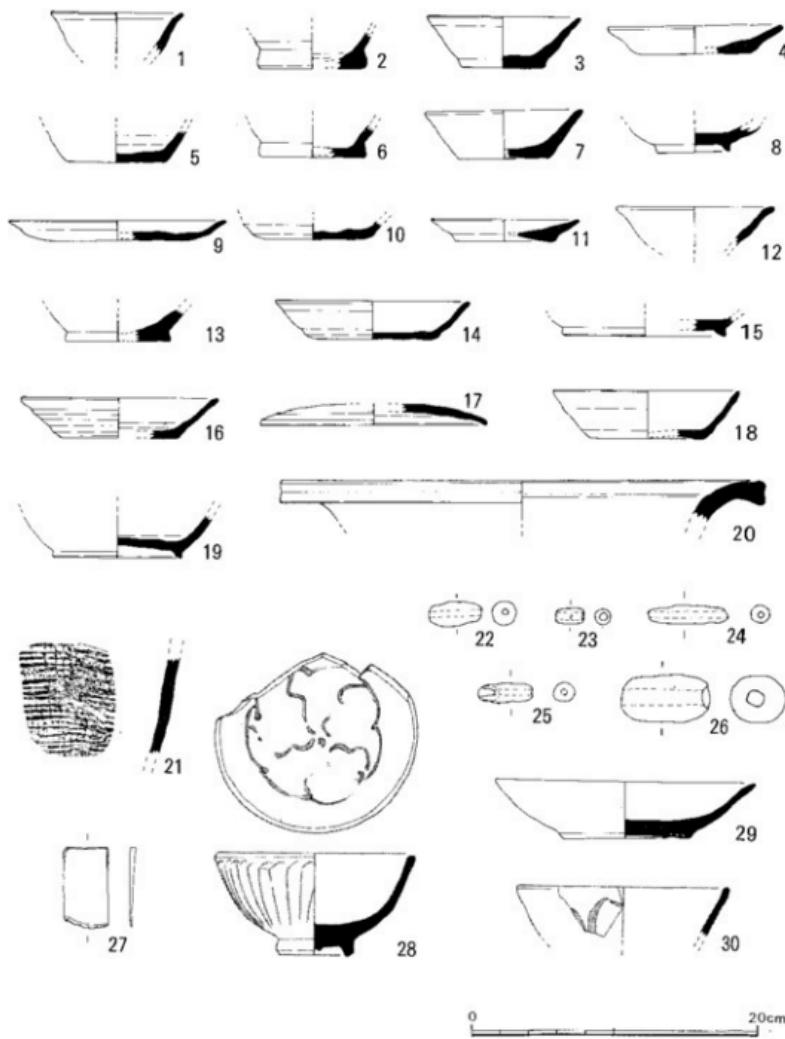
土師器で図示し得たものは、土鍋(239・240)と提鉢(241)である。239と240は口縁下に断面三角形の突帯を巡らし、体部外面に



第8図 S K 11断面図

第1表 風指遺跡・中世土坑観察表

土坑 No.	平 面 形	幅 (m) × 奥行き (m) × 深さ (m)	埋 土	遺 物
S K 1	矩形	0.8×0.53×0.34	黒褐色粘土土	土師器細片
S K 5	一	1.15×0.8×0.29	—	土師器・青磁碗
S K 6	不整形	1.0×0.71×0.1	—	土師器細片
S K 7	隅丸方形	1.6×0.47×0.14	灰褐色粘土土	土器底・青磁碗
S K 9	一	0.8×0.5×0.9	黒褐色粘土土	土師器・須恵器細片
S K 10	不整形	1.3×0.1×0.07	—	—
S K 12	一	0.8×0.6×0.11	—	なし
S K 13	隅丸方形	1.1×0.76×0.05	—	—
S K 14	不整形	0.9×0.6×0.1	—	—



第9図 遺構出土の遺物

右上りの叩きを施すものである。241は、捏鉢の口縁部で直線的に外方に立ち上がり、端部をわずかに肥厚させ、内外面にハケ調整を施している。

青磁は、椀と皿が出土している。224・225は、椀底部で共に部厚い底部から腰が張らずに立ちあがるタイプで、高台は面取りが施され疊付は内傾する面をなす。体部外面は、共に細蓮弁を施すが、224は丸形、225は片切形による。施釉方法は、前者が外底までかかり削り取らないのに対して、後者は外底の釉を削り取っている。226～230は、口縁部であり227が鏽蓮弁、228・230がヘラ描きによる細蓮弁、228は、細線と刺頭とが蓮弁としての単位を意識して施されている。232は、皿である。丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。高台は面取られる。疊付以下、外底と見込みは露胎である。釉は淡緑濁色で貫入が入り、胎土は淡灰白でやや精緻さに欠ける。

白磁は、椀と皿が出土している。231は椀底部で、削り出しが浅く輪の広い高台を有し、底部内面に沈線状の段を有す。口縁部は不明であるが大き目の玉線を有するものであろう。胎土は灰白色精緻で、釉はやや灰色味を帯びる。外面露胎部は左方向のヘラ削りが認められる。また見込みに山形の彫り込みがある。238は椀口縁部で、内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。胎土は黄白色でやや粗く、白色透明で貫入が入る。233～236は小皿であり、233は口縁部外反、他は内湾する。237は、いわゆる八角皿である。

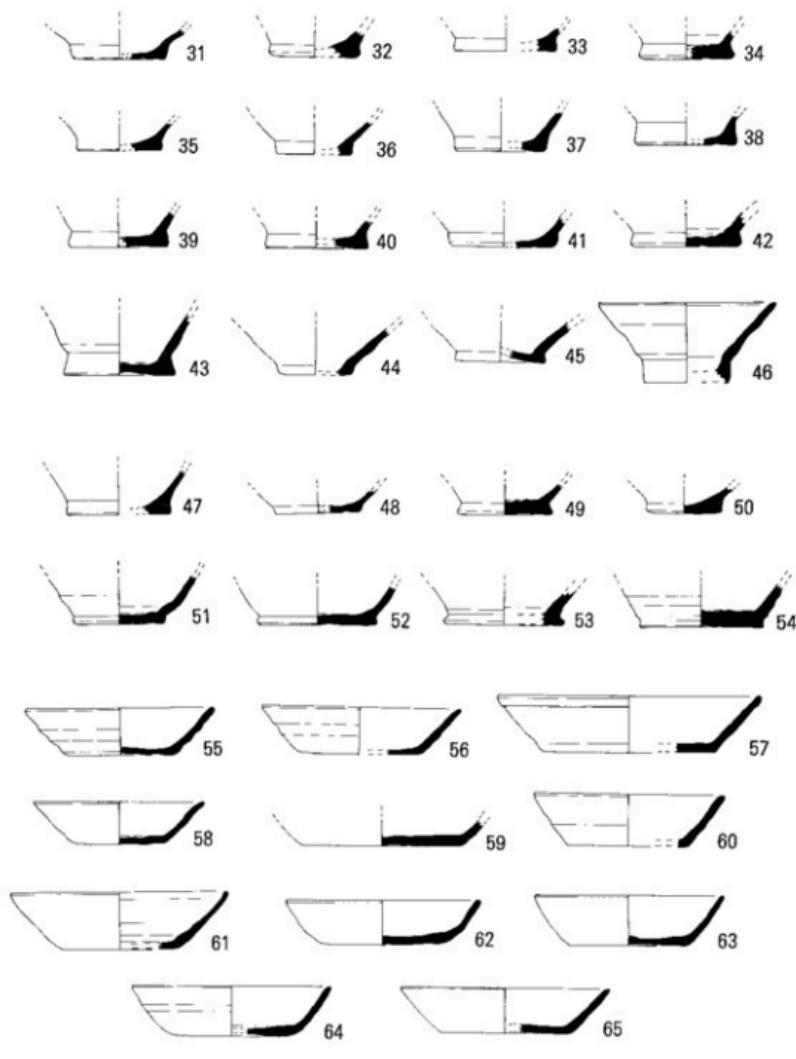
須恵器は、捏鉢の口縁部が2点出土しており、共に東播系須恵器と呼ばれているものである。242は、下縁状をなし、243は垂直に立ち上がり断面三角形を呈す。共に外面口縁下に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。胎土は、粗く灰色に発色する。

備前焼は、245の播鉢が1点出土している。直線的に外方に立ち上った体部に強く内側に屈曲する口縁部を有し、口縁部外面は幅広い面をなす。体部内面には右下りの条痕があり、内面の磨耗はほとんど認められない。胎土には、1～2mmの砂粒を含み外面は橙色、内面は赤褐色に発色する。

4. 考 察

(1) 遺物

今次調査で出土した遺物は、SK7の鉄津とP1出土の砾石以外はすべて土器であり、総点数は約9000万点を数える。その出土状況は、古代の遺物包含層であるVIII・IX層のものが全体の9割近くを占めている。したがってここでは、遺構出土のものも含めて最も出土量の多かった古代の土器について若干の考察を行ないたいと思う。土器研究の第一義的課題は、各器種別の変化と共伴関係をもとにして、各時期における土器様式を設定することにあるが、上述のような出土状況にあっては、かかる視点からの分析に十分耐え得る資料とは言い難い。しかしながら、VIII・IX層出土の土器は、古代の中にあって1～2世紀間あるいはそれ以上の年代幅を持っているものではなく、幅広く見ても100年の間にわたるものである。また、当地域における



第10図 包含層出土の遺物

古代の土器研究が畿内各地のように30年を単位とするような詳細な編年を組むまでには至っていないという現状においては、Ⅷ・Ⅸ層に堆積した土器の検討が、今後の土器研究を進めるにあたっての一つの指標と問題点を提供するという点において有効であろうと考える。

古代に属する土器を種類別に見ると、土師器・須恵器・黒色土器・綠釉陶器を挙げることができる。この内土師器が最も多く8割近くを占め、須恵器が約2割、黒色土器・綠釉陶器は共に1%にも満たない。ここでは、最も出土量が多かった土師器を中心にして、各器種毎に型式分類とそれに基づく分析を行い、諸特徴を抽出したい。その方法としては、各器種別の個体数を算出することが前提となるが、完形あるいはそれに近い形での出土は僅少である。したがって今回、主として土器底部及びその破片をもとに個体識別を行い個体数を算出した。破損の程度による誤差は否めないが、土器組成の傾向を知るために有効であり得る。

① 土師器

器種別に見ると供膳形態では、杯・皿・小皿・碗があり、煮沸形態では甌と羽釜がある。これらの器種は、細部の諸特徴によっていくつかの型式に分類することができる。

a 杯

I 類 (2・6・31~46)

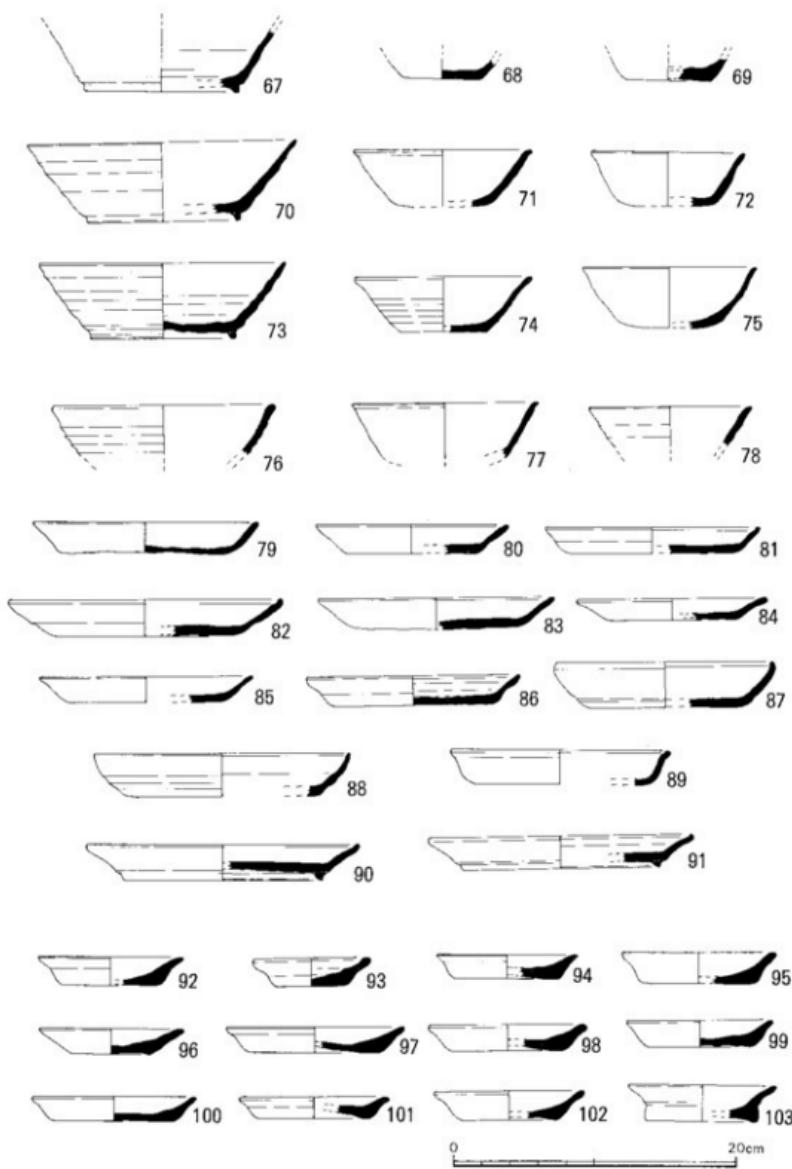
いわゆるベタ高台を有するもので、底部の断面形態を見ると内底が高台内に深く落ち込むものである。胎土は総じて砂粒をほとんど含まず、淡黄色に発色し、焼成は極めて軟質である。口縁部の形状まで把握できるものは、1点(46)のみであるが、すべてロクロナデ成形で底部はヘラ切りである。底径は、5.2cmから7.6cmまであり、かなりばらつきがあるが、6.0cm~7.0cmのものが63%を占めている。

II 類 (3・13・47~54)

I 類と同様にベタ高台を有するが、内底が高台内に落ち込まない。胎土・色調・成形共にI類と同じである。全体の形態の把握できるものは1例(3)のみである。底径は、5.4cmから8.6cmまで認められ、I類以上に規格性に乏しい。

III 類 (A:34・56~61・63・65・66 B:62・64 C:10・14・55)

無高台で、口径・器高共にI・II類と雖との中間的なタイプである。器高は3.0cmから4.0cm、口径は11.8cmから18.3cm、器高指数は20代(21.8~26.7)である。すべてロクロ成形・ヘラ切りであり外底に粘土紐の接合部が認められるものがある。胎土・色調・焼成には二者ある。すなわちI・II類と似て淡黄色に発色するが、砂粒を多く含んで堅く焼き締まるものと、砂粒を含まずに赤く発色し極めて軟質なものである。前者が多く、後者は1例(61)のみである。前者の中には、55・56のように須恵器と見紛うようなものもある。III類は、底部から立ち上がり形態によって、更に3つに分けることができる。A:底部から屈曲して直線的に立ち上がる。B:底部から丸味を帯びて立ち上がる。C:立ち上がり付近が、強い横ナデによって四状を呈す。



第11図 包含層出土の遺物

IV類 (67・70・73)

III類に高台を貼付したタイプであるが、体部がIII類よりも大振りである。高台は、逆台形状を呈し底部外縁端に貼付するが、高台外脇を面取りするもの(67)もある。すべてロクロ成形・ヘラ切りで、底部外面には粘土紐の接合部が認められるものが多い。胎土・色調・焼成はIII類の前者と同様である。

V類 (7・68・69・71・72・74・75)

無高台の杯で体部の形態はI・II類と同じである。全体形のわかるものは1例(7)のみであるが、口径は10.8cmから13cm、底径は5.4cmから7.0cmまで認められ規格性に乏しい。すべてロクロ成形、ヘラ切りで、外底には粘土紐の接合部の見えるものが多い。胎土・色調・焼成共にI・II類と同様であるが、68のみ赤く発色する。

b 皿

I類： (A-①: 79 B-①: 9・83-85 B-②: 80-82・86 C-①: 87・88 D-③: 88)

高台の付かないものである。すべてロクロナデ成形、底部はヘラ切りであり、ヘラ削りやヘラ磨きを施すものはない。胎土は、砂粒を含まないものが多いため、少量の風化した赤色チャートを含むものもある。色調は、淡黄色・赤褐色・黄灰色などバラエティーに富む。焼成は極めて軟質なものもあるが、須恵器のように堅く練ったものもある。法量は、口径が13.1cmから19.0cm器高が1.5cmから3.2cmまで、器高指数は11.5から21.2まで認められ、規格性には乏しい。I類は、細部の諸特徴によって細分することができる。先ず立ち上がりの形態によって、A：直線的に立ち上がるるもの。B：体部下位に、強い横ナデを施すために凹状をなして外反気味に立ち上がるるもの。C：内湾気味に立ち上がるもの。D：立ち上がりの角度が強いもの。更に口縁端部の形態によって、①：端部を丸くおさめる。②：端部をつまみ上げる。③：内側に沈線を施す。

II類： (90・91)

高台を貼付するもので、口縁部は強く外反し、端部をつまみ上げる。ロクロナデ成形で、ヘラ切りである。精選された胎土であるが、風化した赤色チャートをわずかに含む。赤褐色に発色し、焼成は極めて軟質である。90の外底には、粘土紐の接合部が明瞭に認められる。

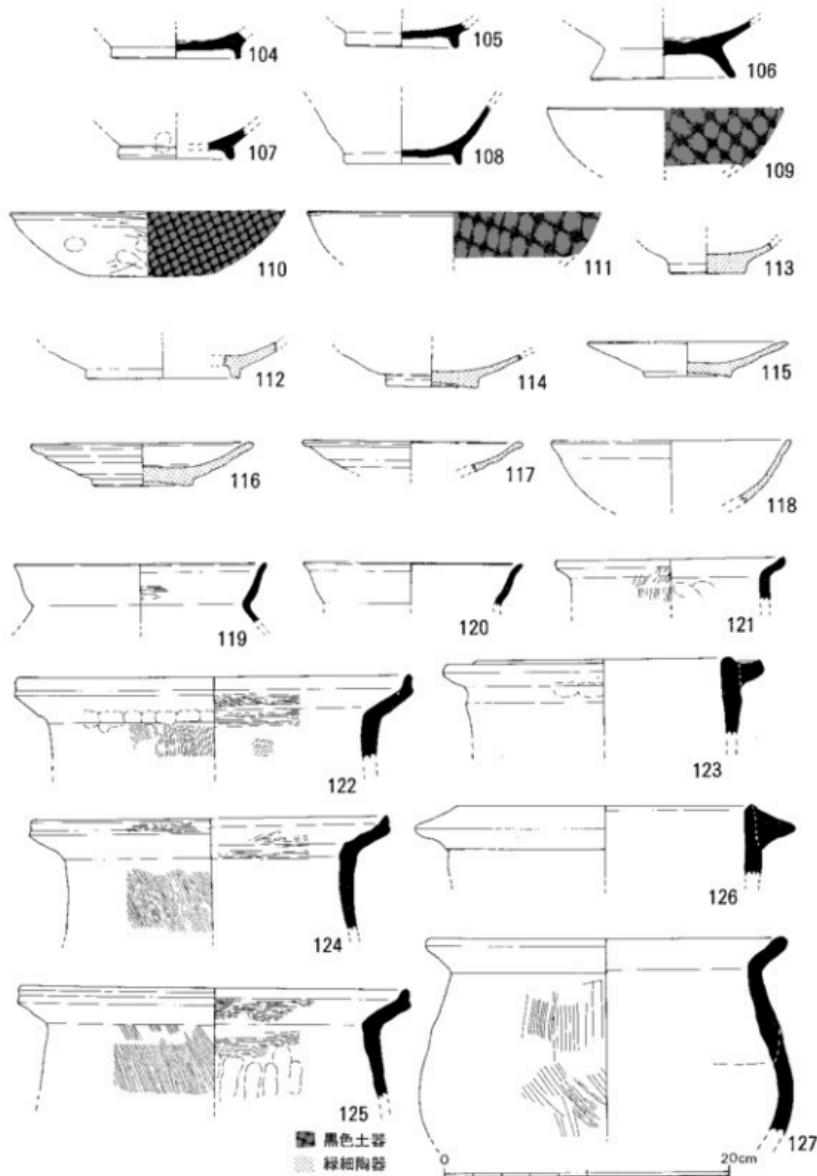
C 小皿

I類： (11・92-102)

高台を有しない。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。すべてロクロナデ成形・ヘラ切りである。胎土・色調・焼成は、杯I・II類と同様である。法量は、口径が7.3cmから12.6cm、器高が1.5cmから2.6cm、器高指数は14.3から25.6まで認められ、規格性は認められない。

II類 (103)

I類にベタ高台を有するもの。



第12図 包含層出土の遺物

a 瓢

I類：(A : 122・124・125・130 B : 127 C : 128)

口縁部が直線的に外方に立ち上がり、II・III類に比して大型である。胎土には粗い砂粒を多く含み、チョコレート色に発色。外面は木理の粗いハケで仕上げる。口縁端部の形態によって3つに分けることができる。A：口縁端部をつまみ上げ、強い横ナデを施す。B：口縁端部を丸く仕上げる。C：口縁端部が水平な面を呈する。

II類：(121)

I類よりも小振りで、胎土も異なり淡黄色に発色する。

III類：(119・120)

口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部付近で外反する。器壁がうすく、胎土中には多量の金雲母を含んでいる。

e 羽釜

I類：(126)

口縁部に断面三角形の直立する鉤を付ける。胎土・色調は、甕I類と同様である。

II類：(123・129)

口縁部のやや下に断面長方形の鉤を付ける。胎土・色調は、I類と同様である。

f 甕 (131)

1点出土している。胴部中位から直口するタイプで、外面ハケ調整、胎土には風化した赤色チャートを多量に含み、橙色に発色する。

g 製塩土器 (246、247)

全体の形は不明であるが、丸底で鉢形を呈するものと考えられる。内面には布目が見られ、外面は無調整で粗雑なつくりである。

② 黒色土器 (109~111)

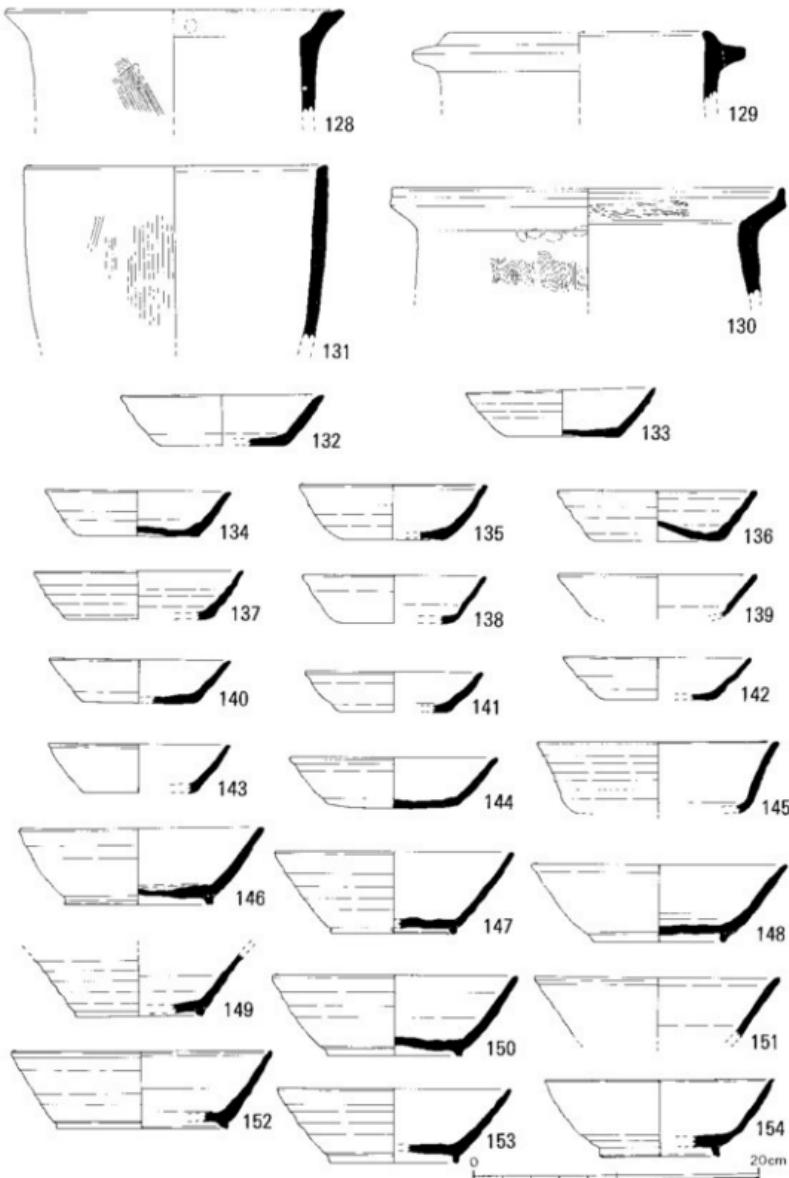
図化し得たものは3点であるが、この他に口縁部細片が数点出土している。器種はすべて楕であり、内面に炭素を吸着させるA類に属する。110は、全体形を復元できる唯一の例で、平底の広い底部から内湾して立ち上がり口縁部がわずかに外反する。¹¹¹外面には不定方向のヘラ削りが施され、ところどころ指頭圧痕が認められる。胎土は、上述の土師器供給形態とは全く異なり、金雲母を多く含みチョコレート色に発色する。

③ 緑釉陶器

碗・皿・耳皿が出土しており、図示したもの以外にも細片が数点出土している。

碗 (112・118)

112は、削り出し高台を有するもので、素地胎土は砂粒を含まず淡褐色に発色、釉は緑褐色を呈す。118は、体部で内湾して立ち上がり口縁部がわずかに外反する。素地胎土は砂粒を含まず淡黄色に発色、釉は薄緑色を呈する。



第13図 包含層出土の遺物

皿 (114~117)

すべて削り出し高台であるが、2つのタイプがある。114は、蛇目状に削り出し、115・116はベタ高台で外底を凹状に削っている。両者共に高台の切り出しには粗雑さが認められる。114の素地胎土は白色堅織、釉は緑色を呈す。115・116の素地胎土は、淡茶色でやや軟質、釉は薄緑色を呈す。115・116の内底には重ね焼きの痕跡が認められ、116の外底には×のヘラ記号がある。117は外反する口縁部を有し、須恵器に施釉したものである。

耳皿 (113)

外底には、糸切りをそのまま残す。胎土・釉調は皿114と同様である。

④ 須恵器

供膳形態では、杯・皿・蓋・鉢があり、貯藏形態で壺・甕がある。出土量は、土師器の2割にも満たないが、器種によっては土師器よりも多く図化し得たものがある。

a 杯

I類 (16・18・131~145)

全体のプロポーションは、土師器杯III類に似ている。体部は、直線的に外方に立ち上がり端部を丸くおさめるものがほとんどであるが、中には内湾気味に立ち上がるもの(135・141・144)もある。すべてロクロ成形、ヘラ切りで、外底はヘラ切り後ナデ調整をするものが多いが、切り放しのものもある。18・133・136・137・144には火擗が見られる。また外底に、粘土紐の接合部が認められるものが多い。法量は口径12.5cmから16.7cm、器高は2.8cmから5.0cm、器高指数は21.0から29.9まで認められる。

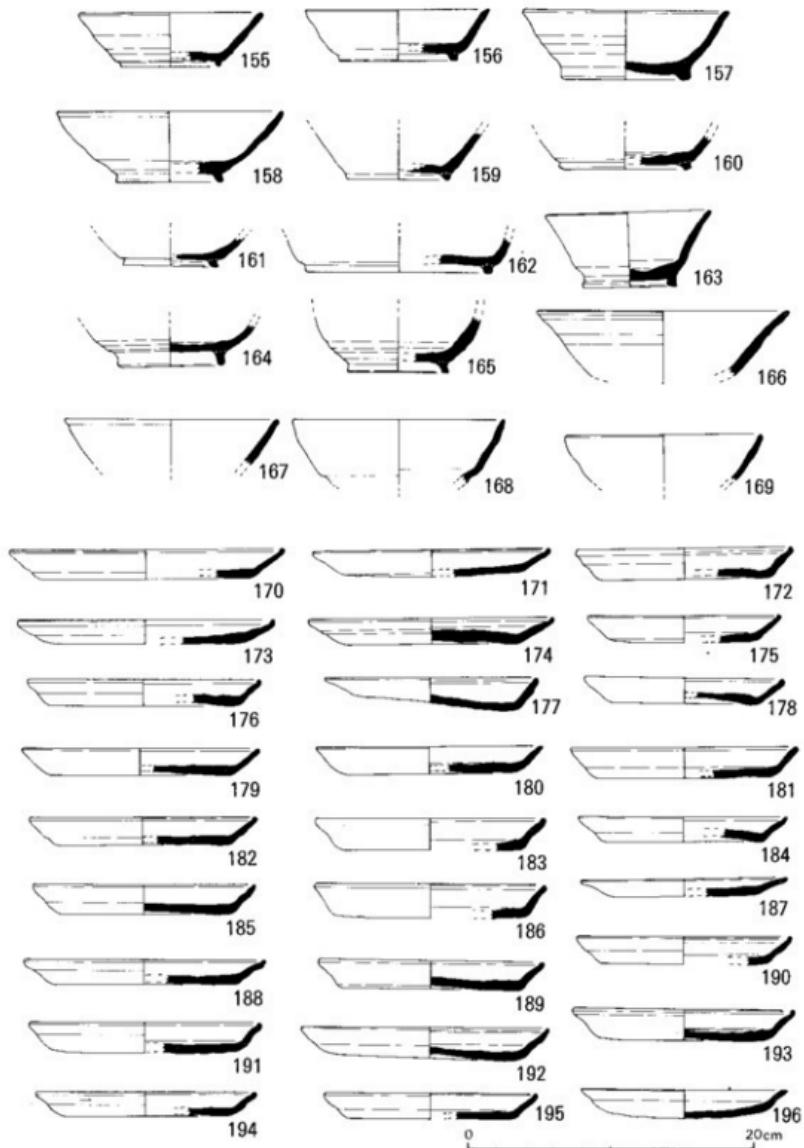
II類 (A:146~153・155~157・159・162 B:163 C:154・158・164・165)

底部外縁端に高台を貼付するもので、型態によって3つに分けることができる。A:全体のプロポーションは、土師器杯IV類に似ている。ロクロ成形で、直線的に立ち上がる体部外面にはロクロ目を顯著に残している。外底は、ヘラ切り→弱いヘラ削り→高台貼付→横ナデの順に仕上げている。B:小振りのもの。体部立ち上がり付近でわずかに屈曲し、外反気味に伸び口縁部に至る。外面にはロクロ目を残さない。C:体部が内湾気味に立ち上がり椀状を呈するもの。底部が厚く、丁寧な横ナデを施し内外面にロクロ目をほとんど残さないもの(154・158)とロクロ目が顯著に残るもの(164・165)がある。

b 皿

I類 (A:170~175・177~182 B:176・183~197)

高台を有しないもので、すべてロクロ成形。外底はヘラ切り後ナデ調整するが、外底には粘土紐の接合が見られるものが多い。181・193に火擗が認められる。I類の法量は、口径が13.8cmから19.2cm、器高が1.6cmから2.4cm、器高指数は8.5から16.1まで認められる。I類は、細部の特徴によって2つに分けることができる。A:底部から直線的に立ち上がり、口縁端部をつまみ上げる。B:強い横ナデによって外反して立ち上がる。口縁端部をつまみ上げるものと



第14図 包含層出土の遺物

そのまま丸くおさめるものとがある。

II類 (198)

底部外縁端部に太い高台を貼付する。体部は、強く外反し口縁部をつまみ上げる。ロクロナテ成形で、外底はヘラ切り後ナデ調整を施す。

c 蓋 (17・199~208)

平坦な天井部から口縁部にかけてゆるやかに下降するものがほとんどであるが、ドーム状の天井部を呈するもの(17)もある。口縁端部はすべて下方につまみ出す。鉢みは、扁平なものと断面三角形のものがある。

d 鉢 (223)

内湾気味に立ち上がり、口縁部を肥厚させ端部は丸くおさめる。外面には、ロクロ目が顕著に見られる。

e 壺 (209~217)

ハ字状に強く張り出す高台から、下胴部は外方に向って内湾気味に立ち上がり、上胴部で強く内湾する。口縁部は、やや長目の頭部からゆるやかに外反し、端部はつまみ上げている。口唇部は外傾する面をなす。ロクロ成形で外底にはヘラ削りが見られる。

f 壺 (219~222)

口縁部が短く「く」字状に外反するもの(219・220)と、屈曲部内面に強い棱をなして強く外反し、長く伸びるもの(221・222)がある。後者は、口縁端部を下垂させ口唇部は凹状を呈す。両者共に体部外面には荒い叩きを施す。

⑤ 土鍤 (248~280)

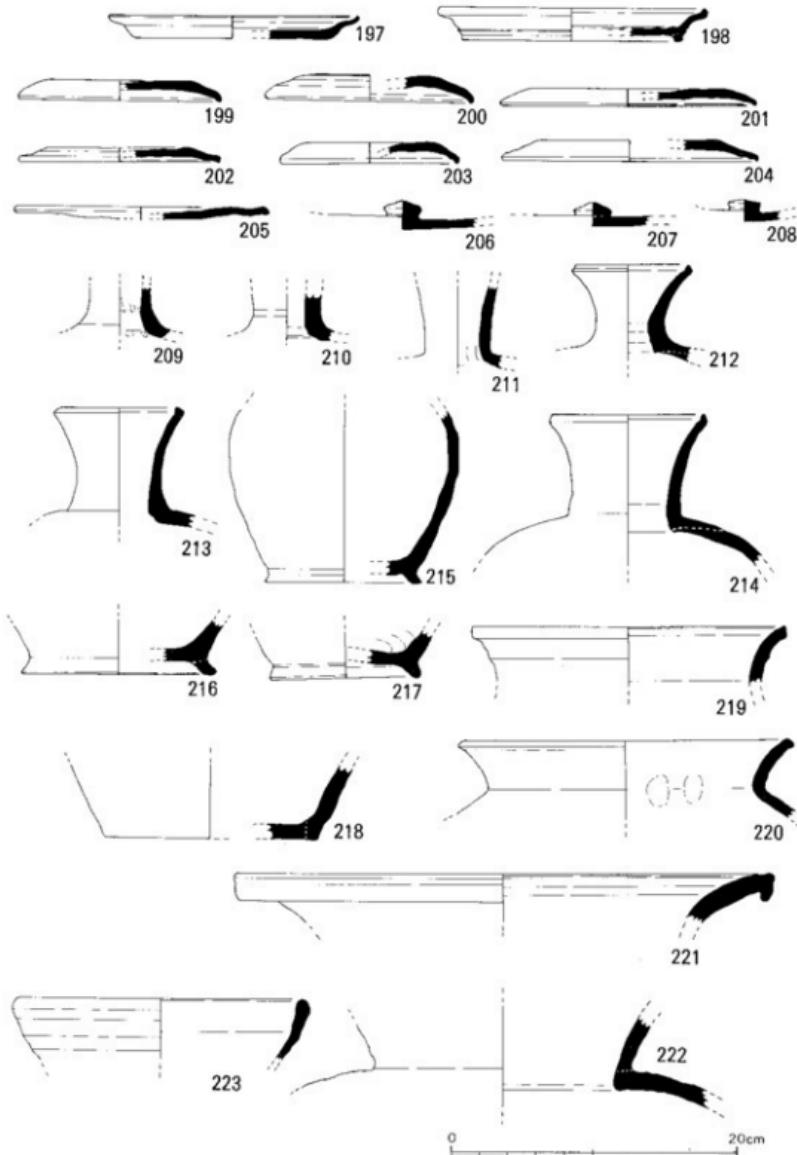
図示したものも含めて100点近く出土している。小形(248~255)と大形(256~280)があり、前者5~10g、後者は20~60gを測る。

以上VIII・IX層出土の土器について、種類別・器種別に分類を試みた。これをもとに、他遺跡出土の類似資料との比較検討や畿内で詳細な編年が組まれてある縄釉陶器や黒色土器を指標として、VIII・IX層出土の土器の時期比定を行い、土器様式の特徴と生産の問題について若干の考察を述べたい。

出土土器の中で最も多かった土師器の器種及び土器型式の構成比は、第2表のとおりである。杯が74.8% (659点) で、土師器の主流をなし、次いで小皿14.1% (124点) 、皿11.1% (98点) となっている。杯は、7型式に分類し得たが、この中で多くを占めているI・II・V類について、類似例を求めるところでは香我美町十万

第2表 土師器杯・皿・小皿の構成比率

器種	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	合計	器種別合計
I	2	6	31~40							291	310
II	3	13	47~54							128	143
III	A	24	58~61	63	60	66				21	31
III	B	62	64							13	15
III	C	10	16	53						13	16
IV		61	70	23						17	20
V		68	69	71	72	74	75			118	124
I-A-(2)	79										
I-B-(2)	9	83~85									
II	I-B-(2)	80~82	86							82	90
I-C-(2)	87	88									(11.3%)
I-D-(2)	80										
I-B-(2)	90	91								13	15
小皿	I	11	82~102							90	120
	II	103								14	15
合計										881(88%)	



第15図 包含層出土の遺物

遺跡の S D 2 を挙げることができる。S D 2 は10世紀代に比定される溝で糸切りの土師器底部⁽²⁾ (III・V類)や甕 I - A類・羽釜II類・灰釉陶器と共に出土している。当遺跡のVIII・IX層出土の土師器には、一例の糸切りも見られないところから、S D 2 に先行することが考えられる。県外の例では、愛媛県の石井幼稚園遺跡や福山市サブ遺跡下区No.3土坑出土⁽³⁾の例を挙げることができる。両者共に9~10世紀に位置付けられている。

杯 I・II・V類は、11世紀に至ると確実にヘラ切りから糸切りに変化するが、ロクロ成形手法とその形態的特徴は、当該期以降中世全般にわたっての土師器の主流となるものである。今次出土の杯は、その初現として位置付けることのできるものである。

小皿は、現段階において管見の限りでは比較すべき資料が見当たらない。時期的には少し降るが田村遺跡群で分類されている無高台の小皿A-I・II、ベタ高台の小皿A-IIIがある。両者共に糸切りであるが、I類が前者に、II類が後者に系譜的に連続していくものであろう。すなわち小皿も中世土器構成の基本的要素となるものであり、上述の杯と同様の位置付けをすることができる。

皿は、無高台のI類と高台を有するII類とに大別し、I類は立ち上がりの形態からいくつかの型式の存在することが明らかとなったが、口縁部のつまみ上げなどに見られるように、8世紀前半に成立したいわゆる「律令的土器様式」に連なる土器であることは明白である。しかしながら先に観たように、すでに一器種としての規格性は喪失しており、法量によるまとまりも全く認められない。また一部を除いてすべてロクロヨコナデ調整であり、ヘラ磨きやヘラ削りは認められない。皿は、土師器の構成比の中で最も少ないものであり、10世紀中には消滅し中世には残らない。杯・小皿とは対象的な歴史的位置付けを有する。

煮沸形態では、甕・羽釜が出土している。羽釜I類は県下に類例を見ないが、II類は浜津型⁽⁴⁾と呼ばれるもので10世紀に出現するとされている。県下では、先に挙げた十万遺跡や曾我遺跡⁽⁵⁾等から甕 I類と共に出土している。甕 I・III類や羽釜は、胎土やその形態的特徴からして、畿内から搬入されたものである。

黒色土器は、緑釉陶器と共に時期決定の有効な資料となりうる。全体形のわかるものはー例(110)のみであるが、他のものもおそらく同じ器種と考えることができる。110は、高台の付かない椀であり平安京などの例によると「初期の黒色土器の主製品」に属するもので、9世紀後半頃まで見られるものである。

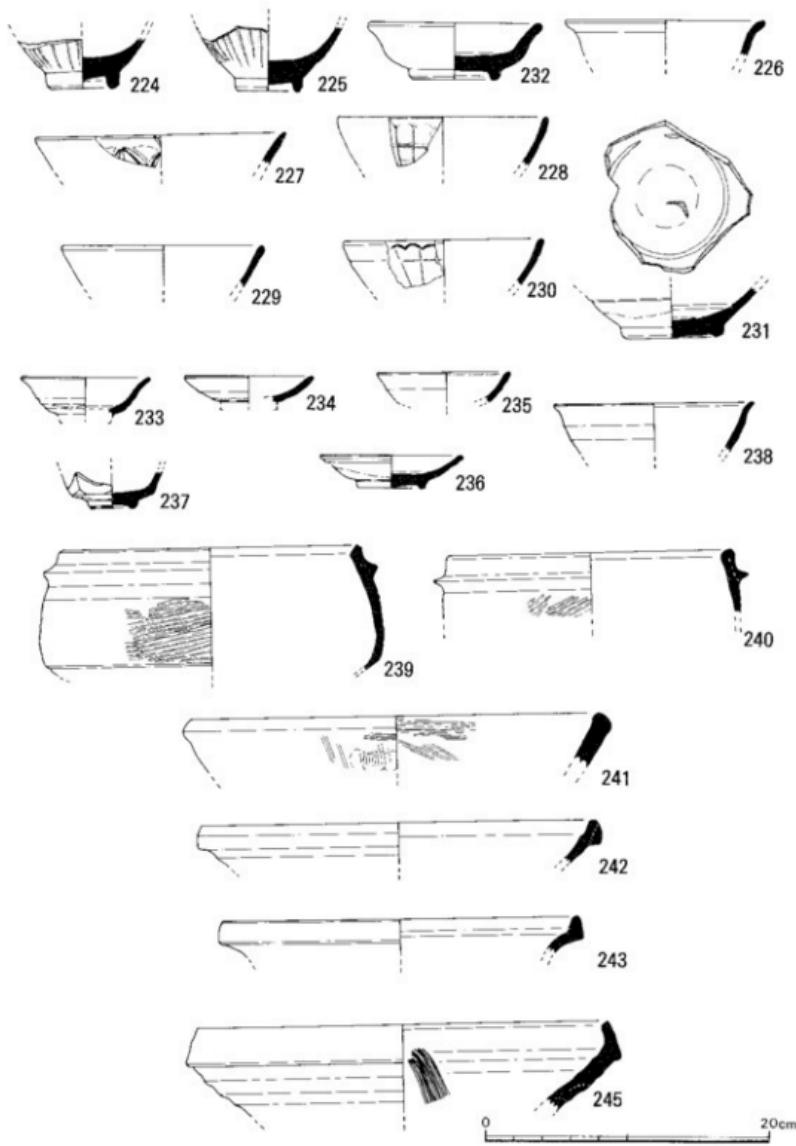
緑釉陶器では、112の輪高台を有する底部と114~116の皿である。前者は、その形態から9世紀末から10世紀初に京都洛西の窯で焼かれたものである。後者は、いわゆる晚唐越州系磁器の影響による(磁器形)⁽⁶⁾の皿であり、削り出し高台の特徴などから9世紀中葉に洛北の窯で焼かれたものである。これらの緑釉陶器は、黒色土器と共に畿内からの搬入品である。

須恵器の供膳形態は杯・皿・鉢があり、杯と皿は土師器のそれと形態的に類似している。すなわち杯 I が土師器の杯 III類に、杯 II類が土師器の杯 VI類に、皿もそれぞれ土師器の皿 I・II

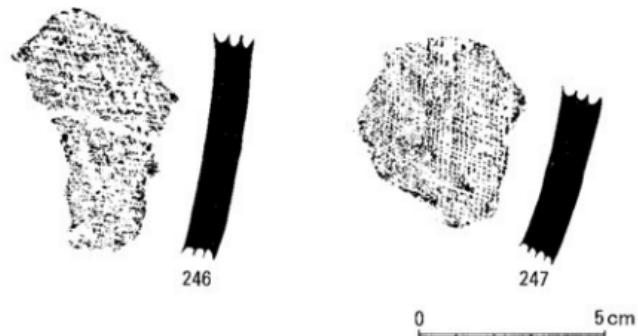
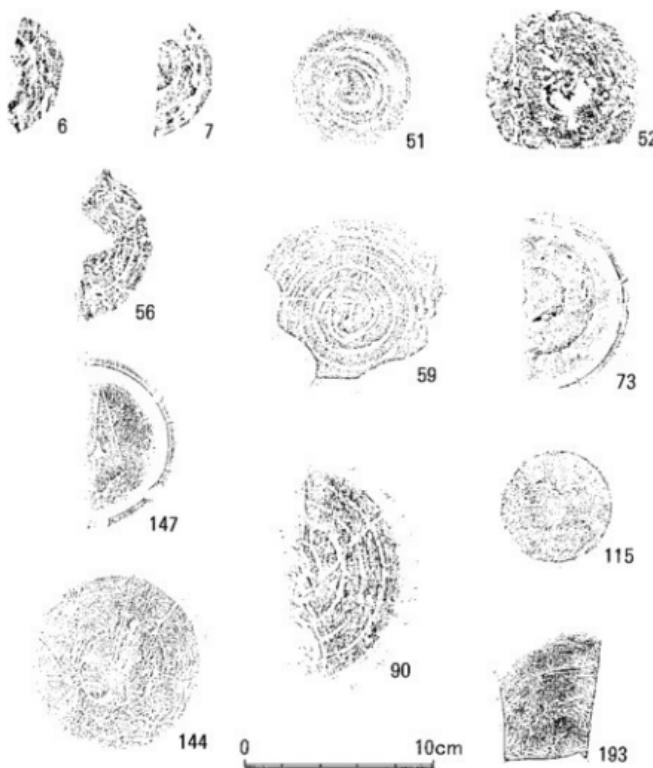
類に対応するものであり、形態的な互換性を有している。これらの杯・皿は、8世紀代の杯A・B・皿A・Bの形態を踏襲したものであり、伝統的な土器様式と言うことができる。しかし律令的土器様式の定義の一つである法量の規格性は、全く認めることができない。そして土師器皿と同様に10世紀代に至ると消滅するものである。ただ杯II-B類の163と杯II-C類の楕形とは、伝統的な系譜には連ならない後者は磁器指向型である。

以上各種類別に器種構成や形態的特徴について見て来たが、VII・VIII層出土の土器は、9世紀中葉から10世紀初めに時間的な位置付けを求める事ができる。そして、当該期の供膳形態の特徴としては、①須恵器の激減を挙げることができる。すなわち十万遺跡の8世紀の土坑SK50では、須恵器：土師器が3：2であったが、ここでは1：5となっている。当該期における全国的趨勢と軌を一にしている。②土師器は、杯・小皿・皿が基本的構成であるが、杯と小皿は伝統的な形態を否定したところに成立したものであり、成形手法の特徴としてロクロナデを挙げができる。「律令的土器様式」の本質的な特徴であった嚴格性は崩壊し、皿や杯の一部に土師器と須恵器の互換性が現象として見られる。④従って当該期は、古代から中世への土器様式の転換期として位置付けることが可能であり、中世土器様式の出発点であり、しかも以後の土器展開のあり方を規定するという歴史的意義を有する。

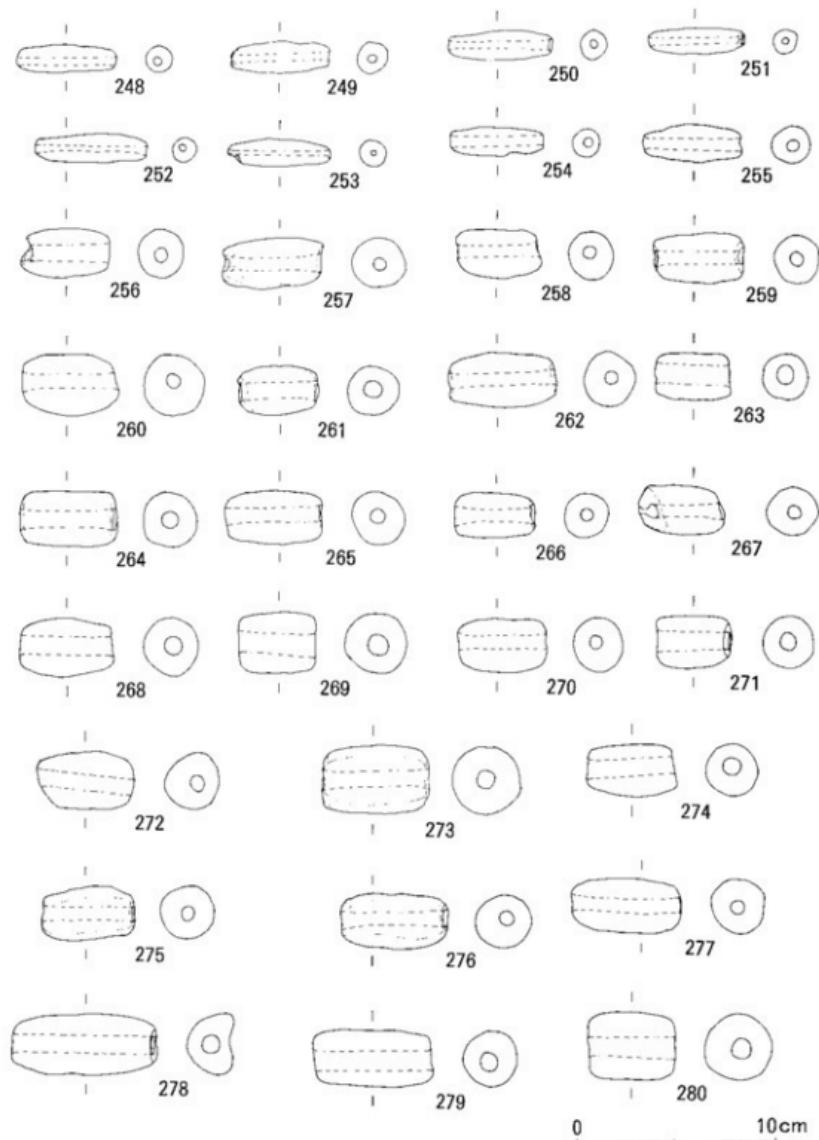
次に生産の問題について述べると、①で触れたように土師器の杯・小皿がすべてロクロナデ調整・ヘラ切り、更に杯外底の粘土紐接合痕からも認められるように粘土紐巻き上げ手法で製作されているところに最大の特徴がある。かかる手法は、須恵器生産の基本的な手法であり、この時期の土師器生産が須恵器生産の技術的影響下にあったことを示している。おそらく須恵器工人が土師器生産に移行したものであろう。土師器杯が、この時期に登場することを述べたが、あえて系譜をたどれば須恵器杯に求めることができる。土師器と須恵器に見られる互換性も律令的土器様式におけるそれとは本質を全く異なるものであり、須恵器工人が土師器生産に転換する際に現われたものに過ぎない。当該期に出現した中世土器の初現形態が以後の土器展開のあり方を規定したのは、まさにこの工人の転換による成形手法に起因する。このような変化は、畿内およびその周辺の土師器には全く見られない現象であり、地方における土器生産の特徴を示すものである。歴史的に長い伝統を持つ土師器生産が、当該期に至っても自己完結的家内工業的な生産体制を脱していかなかったことを証明するものである。これは須恵器生産についても同様のことが言える。專業集団として土師器とは全く異なる組織を持って独立していたものの常に専制国家の膝下から脱脚することができず第二次社会的分業を達成するには至らなかった。



第16図 中世遺物包含層出土の遺物



第17図 土師器・須恵器底部
製塙土器拓本(246・247)



第18図 土錘実測図

遺構

古代の検出遺構は、8基の土坑と20数個のピットである。時期的には出土遺物から9世紀中葉から10世紀初めに営まれたものであるが、遺構の具体的な性格付けをすることはできない。ただ、当遺跡を考える上での視点として、VII・IX層の堆積状況、狹隘な地形への立地、綠釉陶器などに注目しなければならない。県下での綠釉陶器出土例は数少ないが、官衙・寺院址からの出土が確認されており、本県における綠釉陶器の位置付け、あるいは使われ方の傾向を示している。さて、綠釉陶器も含めてVII・IX層の堆積状況は、すでに観たように低丘陵からの斜面堆積である。従ってVII・IX層の遺物は、調査区内で使用されたものではなく、丘陵上で使われ廃棄されたものと解釈しなければならない。この丘陵は、調査区の現地表面との比高差7~9mを測り、現在は大部分が宅地となって削り取られているが、わずかに平坦面が残っている。この丘陵頂部こそが、VII・IX層の土器を使用した人々が営んだ遺跡の本体である。しかしながら、旧地形を復元・推定しても、集落や官衙関係の建物が軒を並べる程の面積はない。では、如何なる性格の遺跡が考えられるのであろうか。必ずしも有力な決め手となる資料ではないが、「南路志統篇稿草」起載の「森澤村」図によれば、この小丘陵は、中筋川に突き出でた山塊の突端に位置し、その上に「八坂社」と呼ばれる神社の存在が示されている。現在、「八坂社」は「天神」と改称され、祠が低丘陵上に鎮座している。「八坂社」が何時成立したのか、はたして古代にまで遡るのかどうかは不明であるが、この社の存在は当遺跡の性格を考える上で一つの



第19図 「南路志統篇稿草」の「森澤村図」

手掛けとなるものである。すなわち、中筋川対岸の具同中山遺跡群は、5～6世紀の著名な祭祀遺跡であり、中筋川が原始・古代の祭祀・信仰と深く結び付いていたことを示している。時代的には数百年の隔たりがあるが、当丘陵が中筋川と風指川との合流地点にあることや中筋川を見下す位置にあることから、9～10世紀に河川祭祀が営まれていたと考えることは、十分に妥当性があることである。当該期の祭祀遺跡から縁釉陶器が出土することは、例を挙げるまでもなく広く認められるところであり、当遺跡出土の縁釉陶器もその個有の性格に符合させることができ。ただⅧ・Ⅸ層からは、土器と同じような状況で100個近い土錐が出土している。これをどのように解釈すべきかと言う問題は残る。

ここで営まれた祭祀は、河神信仰、広義の農耕祭祀と考えられるが、縁釉陶器の使用などからして、律令的な言葉は官制の祭祀としての位置付けがなされるべきものである。斜面に崩れ落ちた包含層中の遺物から祭祀の具体的な方を知ることは不可能であるが、古墳時代において共同体の首長とその成員とでなされていた祭祀が、古代国家の形成と発展と共に祭祀権も権力によって吸収・形骸化されたものであろうことは想像に難くない。従って律令国家の動搖と中世という新しい時代への胎動の中で、官制の祭祀は終焉を迎えるのである。

以後400～500年の空白の後、15世紀に至ってSB1を中心とする諸遺構が営まれる。明治初期編纂の『南路志篇稿草』によれば、10戸の家屋が存在しているが、これは近世集落の状況を伝えるものと考えられる。従って、SB1と周辺の諸遺構は、近世森澤村の一画をなすところの「カザシ」、「コカザシ」集落の前身遺構の一部として位置付けることができよう。

註

- (1) 田中琢『日本の考古学』VI 歴史時代上 1980
- (2) 高橋齊明・吉原達生・出原恵三『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1983
- (3) 中野良一『愛媛県における古代末から中世の土器様相』『中近世土器の基礎研究』IV 1988
- (4) 鈴木康之『草戸千軒町遺跡におけるI期以前の土器』『草戸千軒』No.189 1988
- (5) 松田直則『中～近世小稿』『田村遺跡群』第10分冊 高知県教育委員会 1986
- (6) 西弘海『土器様式とその背景』『土器様式の成立とその背景』 1986
- (7) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』 1980
- (8) (6)に同じ
- (9) (7)に同じ
- (10) 松野尾草行編 1874年から1880年まで国史編輯係となった乗行がまとめたもの。

第Ⅳ章 アゾノ遺跡

1. 調査の方法

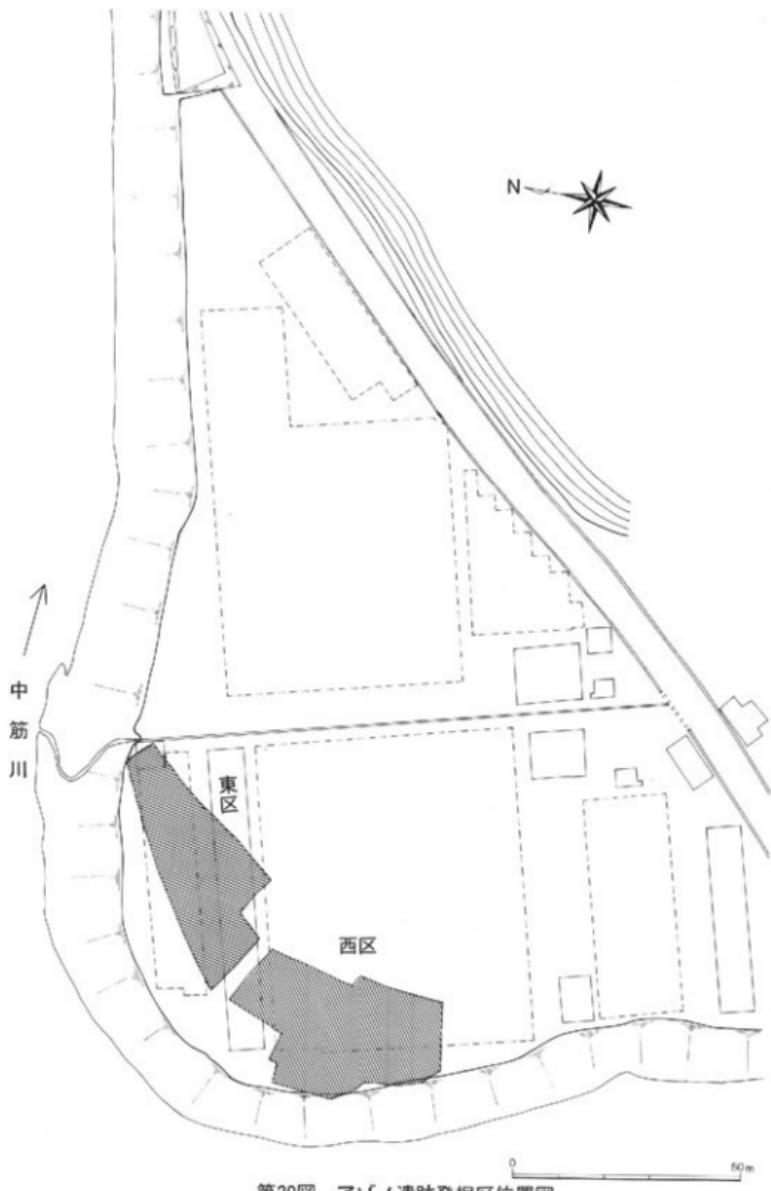
昭和62年度に実施した試掘調査の結果、上流側と下流側に遺構及び遺物の集中が認められたため、上流側を西区、下流側を東区とした。調査区には、建物のコンクリート基礎や鉄骨等が多量に残存し、また地表下0.9m～1.4mに及ぶ客土の厚い堆積が見られた。したがって構造物の残骸及び客土を重機によって調査前段階で除去した。調査は上流側の西区から実施した。

調査は、遺物の包含されている上面まで重機で掘削し、その段階で昭和61年度対岸の具同中山遺跡群発掘調査で実施したトラバースポイントを利用し、基準方位を真北にとる4m×4mの方眼を設定した。東・西調査区の位置も考慮し、東西を西からA→B→C、南北を北から1→2→3と区分し、その区画の名称を北西隅の交点番号で表わした。西区では試掘調査でのトレレンチを中心に調査を開始したが、包含層及び遺構が西側（川側）、南側、東側に延びてさらに拡張を行った。

東区は、西区の調査が終了した段階で開始した。遺物包含層上面までを重機によって掘削し、包含層は人力で遺構検出作業と併行して掘り下げていった。遺構検出面と同時に北側（川側）において液状化に伴う噴砂跡を検出したため、密集して走る数条の噴砂跡部分を選定し、2m×4mのトレレンチを数ヶ所設定し、地震跡の調査も行った。

2. 基本層序 （第23図）

基本層序は、客土を除去した段階から、I層～IV層まで分けることができる。I層：旧表土、II層：淡茶褐色シルト層、III層：暗褐色粘質土層、IV層：淡黄色粘質土層、V層：青灰色粘質土層、VI層：青灰色砂質土層である。中世の包含層は、第III層の暗褐色粘質土層であり、西区においては、北側に向けて薄くなり明確な包含層を形成することなくII層の淡茶褐色シルト層になる。東区においては、包含層が調査区の中央部、南側において、厚く堆積しており、東区の北壁面をみると（第23図）北西部では西区の北東部から続くII層が堆積しており、北側中央部から徐々に厚く堆積している。以上のことから、中央部南側に堆積している包含層が、中央部北側に向けて徐々に流れ込み厚く堆積していることがわかる。東区調査区の北東部においては、噴砂による影響で、I層及びII層が明確に区分できない状態であったためI層としている。II層の淡茶褐色シルト層は、無遺物層であり、IV層以下も同様である。V層の青灰色粘質土は、試掘調査の段階で全域に広がっていることを確認したが、VI層に関しては掘削深度が深くなるため、地震跡調査のため設けたトレレンチによってのみ層を確認しており、全域に認められるものであるかどうかは不明である。



第20図 アゾノ遺跡発掘区位置図

3. 遺構と遺物

今回の調査で、西区から、掘立柱建物跡6棟、土坑42基、溝2条、ピット群が検出されており、東区は掘立柱建物跡6棟、配石遺構、ピット群、土坑1基で構成されている。ピット群の一部を除き中世の所産であり、各遺構は第IV層上面で検出した。ここでは、東・西調査区を分けて、遺構と出土遺物について述べることとする。尚遺構外で包含層出土の遺物は次章で述べることにするが、供膳のための土師器については包含層出土の分類による。また土坑については、遺物が良好に出土したものと説明し、他は一覧表に譲る。

(1) 西調査区の遺構と遺物

S B 1 (第24図)

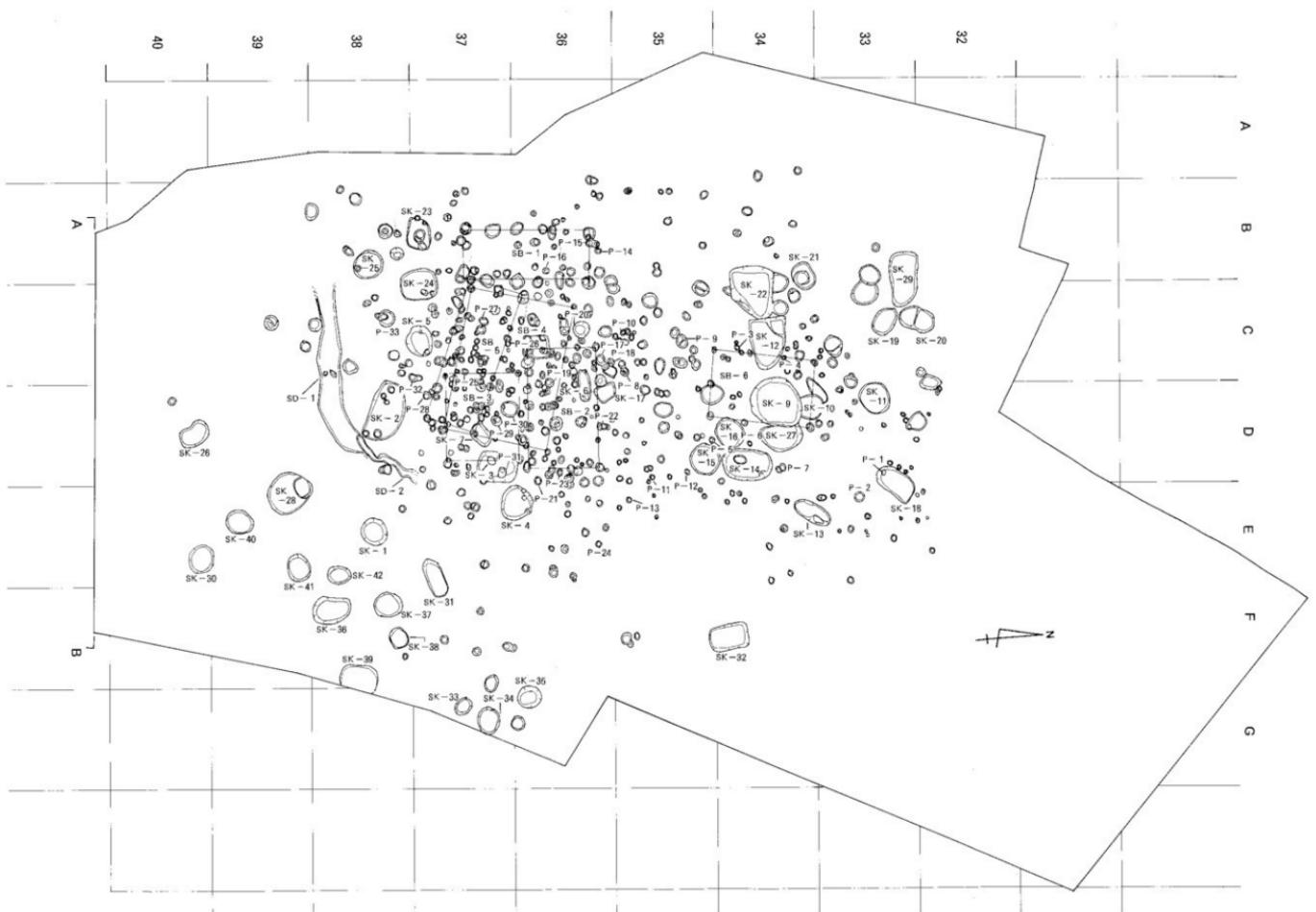
調査区中央部より西部に位置する。B-36・37区において検出された。棟軸をN-1°-Eにとり真北に対してわずかに振れを生じている。規模は、梁間1間・2.0m、桁行5間・5.1mの南北棟であり、平均柱間寸法は、桁行方向で1.0mを測る。柱穴の掘り方はおおむね円形を呈し径約20~60cmを測りやや大形であり深さはまちまちであるが、底面は4.6mのレベルである。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は、土師器、瓦質土器、瓦器、青磁、白磁、須恵器、土鍾等が存在し、白磁には口禿の挽がある。実測可能なものは、P 1から1・2の土鍾と、P 2から3の青磁碗、P 3から4の土師器小杯、P 4から5の東播系須恵器が出土している。1・2は、浅黄橙色を呈する土鍾で、長径4.6cm、幅1.2cmを測る小形品である。3は、淡青緑色釉が施され、口縁部内面に一条の浅い沈線と文様が施される。4は土師器の小杯であるが、口径7.8cm、器高2.4cmを測る。焼成が還元炎に近い状態であるのか胎土まで黒褐色を呈し堅緻である。平らな底部から外上方へ直線的に立ち上がり端部は丸くおさめる。ロクロナテ調整で外底は不明。5は東播系須恵器で捏鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方に肥厚し面を形成する。

S B 2 (第24図)

調査区の中央部でS B 1の東側に位置するC・D-36区において検出した。棟軸をN-89°-Eにとる掘立柱建物跡である。規模は、梁間3間・2.7m、桁行4間・4.75mの東西棟であり、平均柱間寸法は、梁間方向で0.9m、桁行方向で0.9mを測る。柱穴の掘り方は径20~30cmを測り、円形を呈し、深さはまちまちで10~50cmと幅がある。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦質土器、青磁、瓦器が出土しているが実測不可能である。

S B 3 (第25図)

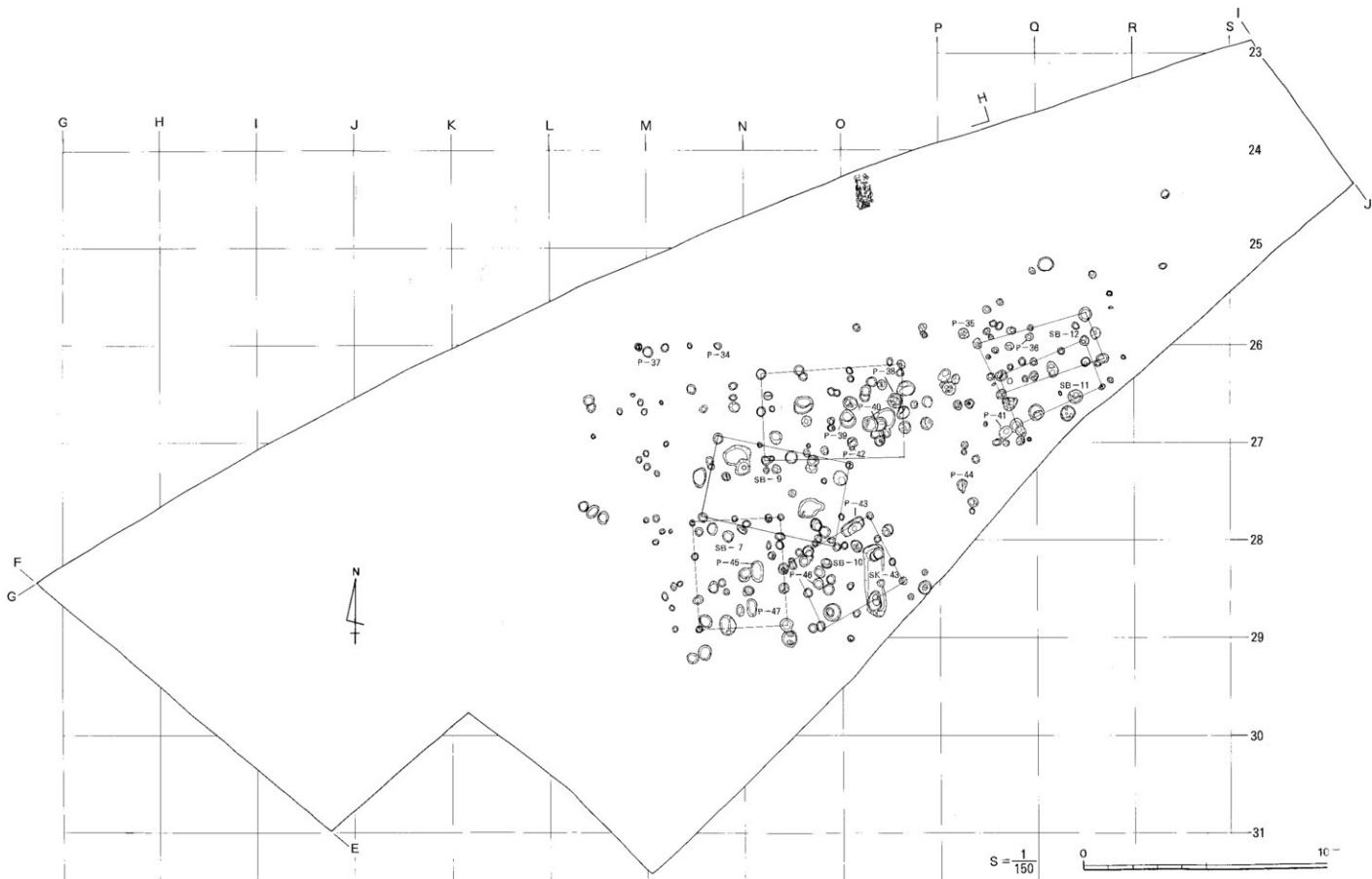
調査区の中央部でS B 2の南側に位置する。C・D-36・37区において検出した。棟軸をN-85°-Eにとる掘立柱建物跡である。規模は、梁間2間・2.9m、桁行2間・3.4mの東西棟である。中間に柱穴を考えることもでき、總柱の掘立柱建物跡になる可能性がある。平均柱間寸法は、梁間方向で1.5m、桁行方向で1.75mを測る。柱穴の掘り方は径20~40cmを測



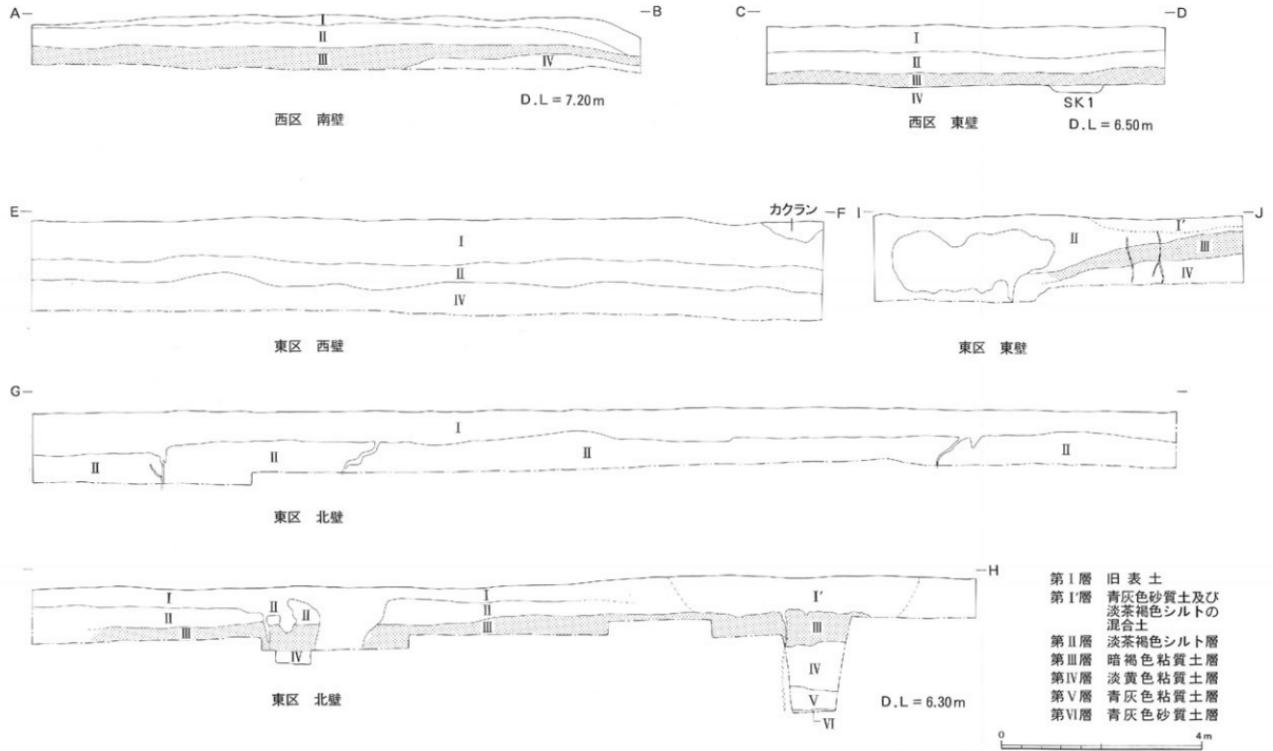
第21図 アゾノ遺跡西区検出遺構全体図

$$S = \frac{1}{150}$$

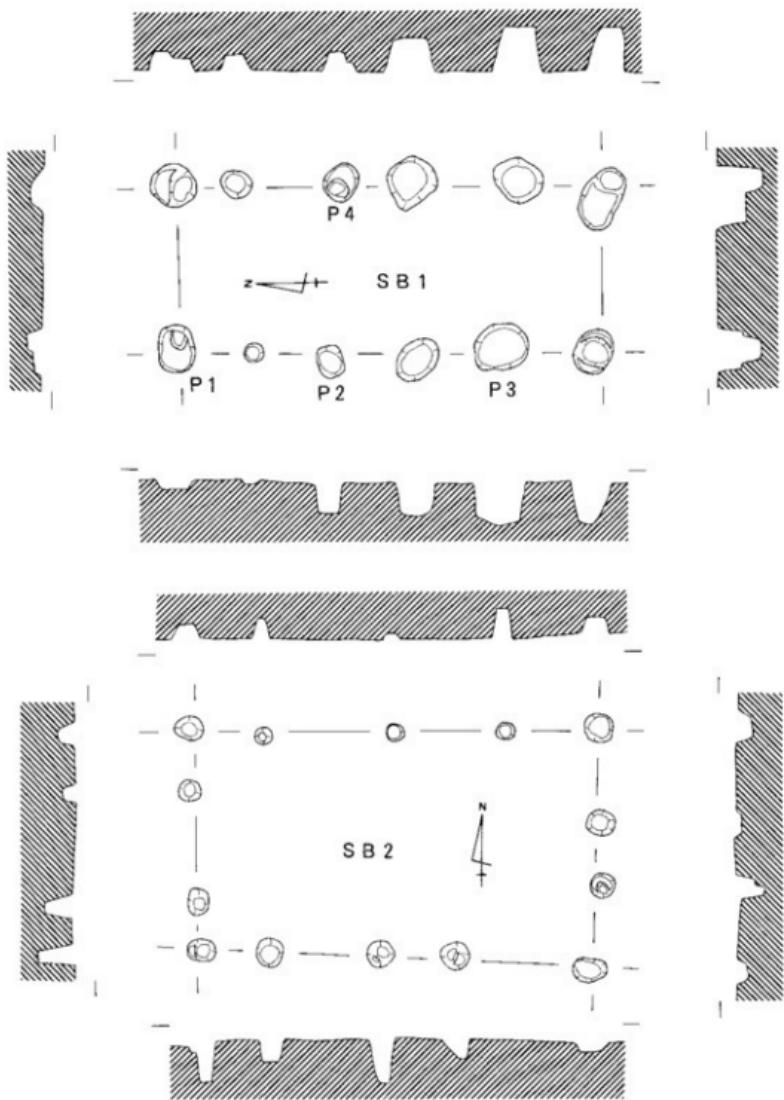




第22図 アゾノ遺跡東区検出遺構全体図



第23図 アゾノ遺跡セクション図



第24図 SB1・2 実測図（西区）D L = 5.30m

り円形を呈する。深さは、北側が浅くなっているが、南側列を見ると45cmを測り底面のレベルは、4.45mである。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は、土師器、瓦器、青磁、土鍬が出土しているが、青磁、瓦器は1点のみで他は土師器が占める。図示でき得た遺物は、P 1から7の土師器碗のみである。高台は逆台形状を呈し、「ハ」字状に開く。内外面磨耗が著しく調整不明である。

S B 4 (第25図)

調査区の中央部でS B 1の東側に位置する。C・D-36・37区にかけて検出した。棟軸をN-80°-Wにとる。規模は、梁間4間・4.1m、桁行4間・5.8mの東西棟である。平均柱間寸法は、梁間方向で1.1m、桁行方向では、東側が広く1.9mで西側は狭く1.0mを測る。柱穴の掘り方は、径20~40cmの円形状を呈し、深さはまばらであり20~60cmの幅がある。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は、土師器、瓦質土器、瓦器、須恵器等が出土しており、輸入陶磁器はみられない。図示でき得た遺物は、P 1から6の土師器、P 2から8の瓦器が出土している。6は杯で、復元底径が8.0cmを測り、平らな底部から直線的に外上方に立ち上がる。外底は回転糸切りである。A-II類である。8は瓦器皿で、復元II径8.0cmで丸みを持った底部から口縁部は大きく開く。底部は指頭圧痕が残り、II縁部内外面はヨコナデ調整である。内面はナデでミガキは認められない。S B 2・3と重複しているが柱穴の切り合い関係はなく新旧関係は不明である。

S B 5 (第26図)

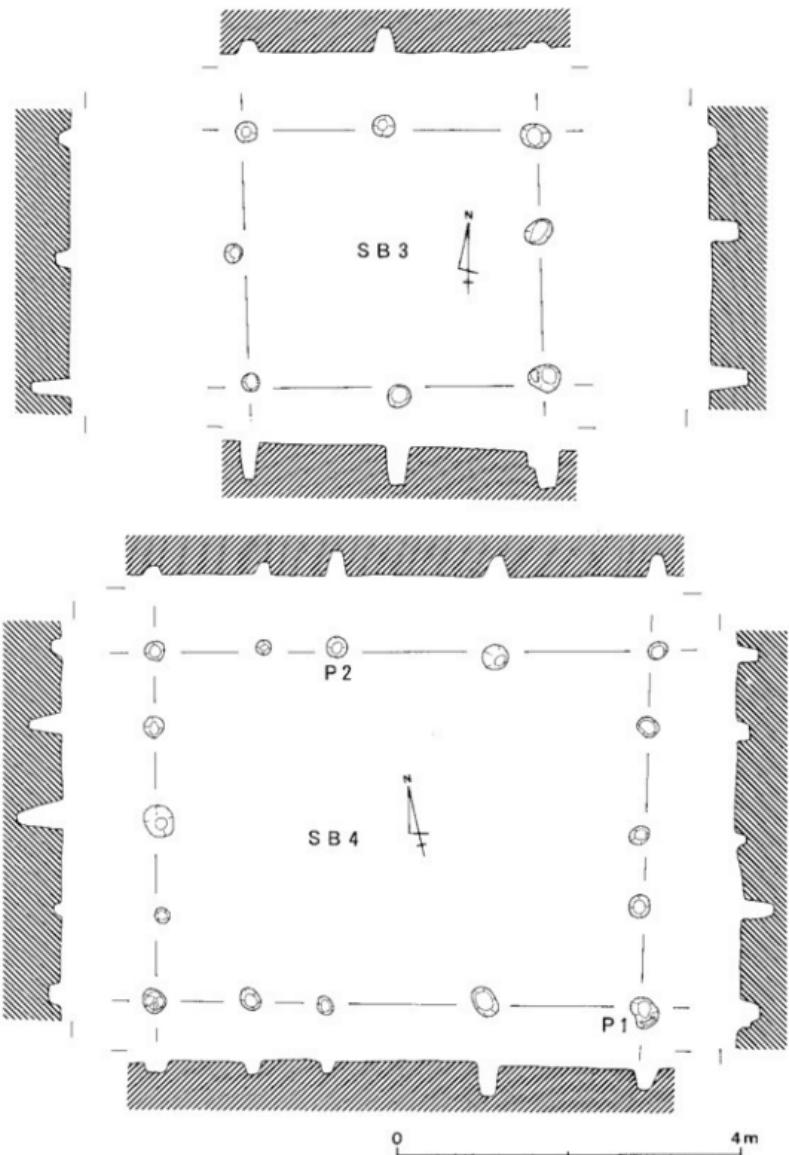
調査区の中央部でS B 4と同じ位置である。C-36、C・D-37区において検出した。棟軸をN-68°-Wにとる。規模は、梁間2間・2.0m、桁行5間・5.8mの東西棟である。平均柱間寸法は、梁間方向で1.1m、桁行方向は、西側が広く1.3m、東側が1.1mを測る。柱穴の掘り方は、径20~40cmの円形状を呈し、深さは、20cm前後を測るものが多い。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は、土師器が中心で瓦器、瓦質土器が若干出土している。細片が多く実測不可能である。S B 3・4と重複関係が認められ、S B 4とは柱穴が切り合っているが、埋土が類似しており前後関係は不明である。

S B 6 (第26図)

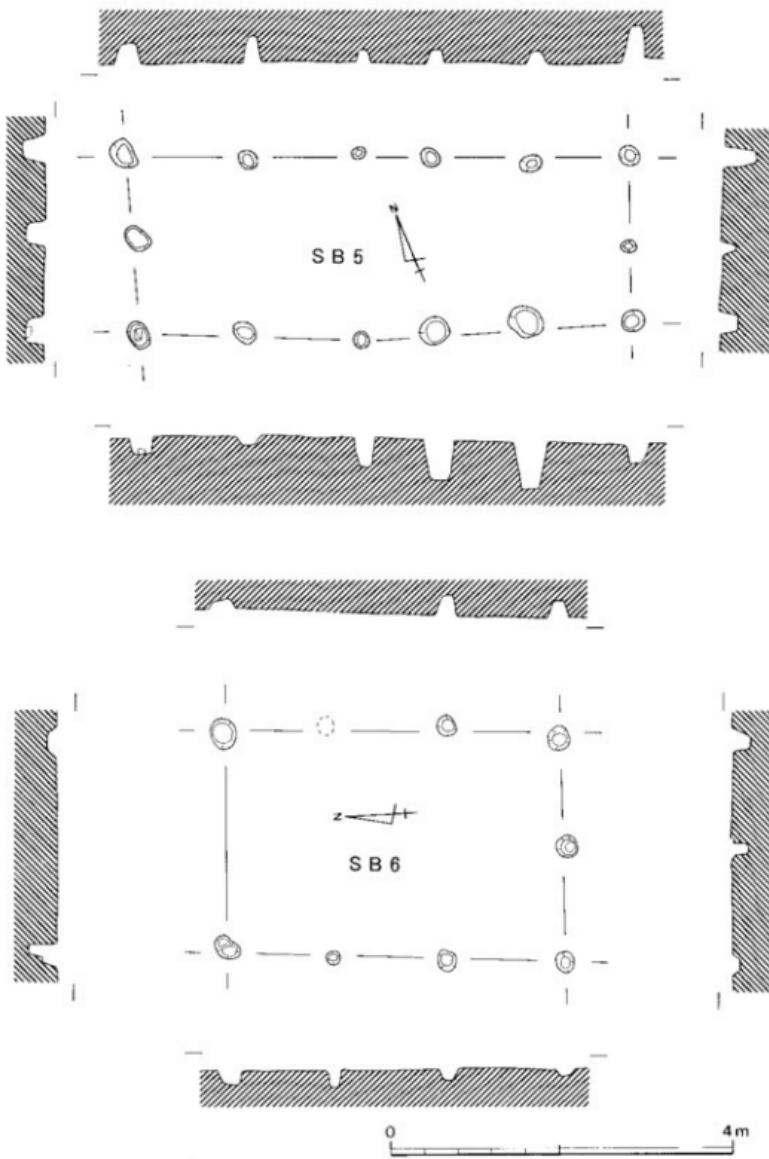
調査区の北西部に位置する。C・D-34・35区にかけて検出した。棟軸をN-2°-Eにとり、真北に対してわずかに振れを生じている。規模は、梁間2間・2.6m、桁行3間・3.95mの南北棟である。平均柱間寸法は、梁間方向で1.3m、桁行方向で1.3mを測る。柱穴の欠損している箇所は土坑に切られている。柱穴の掘り方は、径20~30cmを測り円形状を呈する。深さは10~30cmと幅があるが20cmに平均値をとる。埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は、土師器、瓦器碗が出土している。細片で実測不可能である。

S K 4 (第27図)

調査区の中央部東側に位置する。E-36・37区において検出した。規模は径1.4mを測り、



第25図 S B 3・4 実測図（西区）D L = 5.30m



第26図 S B 5・6 実測図（西区）D L = 5.30m

平面プランは円形状を呈する。深さは15cmを測り浅く底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土で單純一層である。埋土中より、土師器、須恵器、瓦器、鉄津、土鍤が出土している。細片が多く図示でき得るものは15の土鍤のみである。

S K 6 (第27図)

調査区の中央部でS K 4 の北西側に位置する。C・D-36区において検出した。平面プランは、長径1.3m、短径0.45mを測り楕円形を呈する。深さは28cmを測り、断面形は船底状を呈する。長軸方向はN-84°-Eである。埋土は暗褐色粘質土である。埋土中から、須恵器、土師器、鉄津が出土している。図示でき得たものは、14、17の土師器碗と16の須恵器鉢である。14は底部片で、断面方形の低い高台である。調整は磨耗が著しく不明である。模A-III類にはいる。17は体部内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部が外反する。ロクロナデ調整である。16は東播系須恵器鉢で、口縁部は上方に拡張される。

S K 9 (第27図)

調査区の中央部北側に位置する。D-34区において検出した。平面プランは、径2.1mを測り円形状を呈する。深さ15cmを測り、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土である。埋土中から、土師器、須恵器、瓦器、青磁が出土している。青磁は1点のみで外面に鎬連弁文を有するものである。瓦器片の高台は断面方形を呈する。図示でき得たものは、18の須恵器鉢のみである。口縁部はやや肥厚している。

S K 12 (第27図)

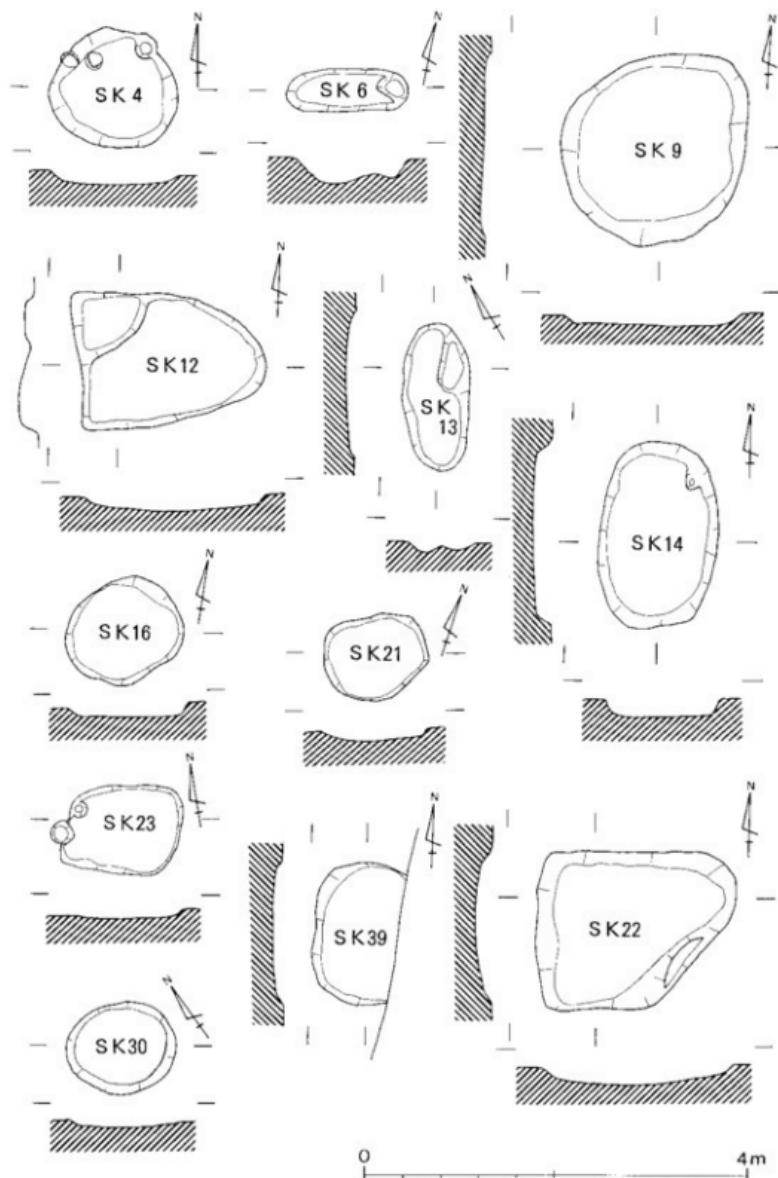
調査区の中央部北側でS K 9 の西側に位置する。C-34区において検出した。平面プランは、直径2.0m、短径1.4mを測り半楕円形を呈する。深さ20cmを測り、浅く底面は平坦である。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、瓦器、青磁、鉄製品、土鍤が出土している。土師器片が53点と多く、その中に高台付碗の底部片が含まれる。その他の遺物は数点である。図示でき得たものは、19の土鍤のみである。

S K 13 (第27図)

調査区の北西部に位置する。E-33・34区にかけて検出した。平面プランは、長径1.6m、短径0.7mを測り、楕円形を呈する。深さは15cmを測り浅く底面は平坦である。長軸方向はN-28°-Eである。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、20の土鍤と、床面直上から23の刀子が出土している。23の刀子は、鋒化が著しく、かろうじて形態を実測できたものである。片刃であり、長さ28.5cmを測る。

S K 14 (第27図)

調査区の中央部北側、S K 13の南西側に位置する。D-34区において検出した。平面プランは、長径2.0m、短径1.25mを測り、楕円形を呈する。深さ20cmで、断面形は逆台形状を呈する。長軸方向はN-2°-Eである。埋土は、暗褐色粘質土である。埋土中より、土師器、瓦器、青磁が出土しており、土師器片は、92点と多量に出土している。図示でき得たものは、土師器



第27図 土坑実測図(西区) DL = 5.30m

で22の楕、24の脚部、25の杯である。22は、A一田類で、体部外面は回転ヘラ削り、内面は丁寧なナナ子調整が施される。24は鍋の脚である。25は、杯B—I類である。底部外面は不明である。その他瓦器片22点、青磁3点が出土しているが実測不可能である。

S K 16 (第27図)

調査区中央部北側S K 14の西側に隣接して位置する。D—34区において検出した。平面プランは、約径1.25mを測り、円形状を呈する。深さ15cmで浅く、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中からの遺物は少なく、土師器、瓦器、瓦質土器が出土している。図示でき得たものは、21の土錘のみである。

S K 21 (第27図)

調査区の北西部でS K 12の北西側に位置する。B・C—34区にかけて検出した。平面プランは、長径1.2m、短径0.9mを測り、楕円形を呈する。深さ15cmで、底面はほぼ平坦である。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、瓦器、土錘が出土しているが数少ない。図示でき得た遺物は、26の瓦器楕と27の土錘である。26の瓦器楕は、和泉型である。内面はナナ子及びミガキが施され、外面は口縁部がヨコナナ子、体部は指頭圧痕が残る。外面に粘土帶接合痕が観察できる。

S K 22 (第27図)

調査区の北西部で、S K 12の西側に隣接して位置する。B・C—34区において検出した。平面プランは、長径2.2m、短径1.7mを測り、不整形を呈する。深さ25cmを測り、底面はゆるやかに凹む。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、須恵器、瓦器、土錘が出土している。土師器は36点出土しているが、いずれも細片である。その他は数点である。図示でき得たものは、28の土錘1点と30、31の東播系須恵器である。30、31は、口縁部が拡張されるが同時期の製品と考えられる。

S K 23 (第27図)

調査区の中央部南西側に位置する。B—37・38区にかけて検出した。平面プランは、長径1.2m、短径0.95mを測り、隅丸方形を呈する。深さは15cmで浅く、底面は平坦である。西側はピットに切られている。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、瓦器、土錘、鉄滓が出土している。土師器片が20点程出土しているが、他は数点である。図示でき得た遺物は、29の土錘のみである。

S K 30 (第27図)

調査区の南東部に位置する。E—40区において検出した。平面プランは、長径1.2m、短径1.0mを測り、円形状を呈する。深さ15cmを測り、底面は平坦である。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、瓦器、青磁、須恵器が出土している。土師器片19点の中で、高台付楕片が若干存在する。青磁片は、口縁部内面に一条沈線がみられるものである。図示でき得たものは、32の東播系須恵器である。

S K 39 (第27図)

調査区の南東部に位置する。F—38区において検出したが、東側は調査区外である。平面プランは、長径1.55mを測り、隅丸方形形状を呈する。深さ15cmで浅く、底部は平坦である。埋土は、暗褐色粘質土である。埋土中から、土師器片23点、瓦器片8点が出土している。土師器片の中には、釜片が存在する。図示でき得たものは、33・35の高台付椀と、34の瓦器椀がある。33・35は椀A—I類にあたる。34は、口縁部内面に一条の沈線が施され、楠葉型と考えられる。

S D 1 (第34図)

調査区の中央部南側に位置する。C・D—38区にかけて検出した。長さ6.5m、幅東側で0.95m、西側で0.65mを測り西側がやや狭くなっている。深さは平均15cmで深い溝である。底面のレベルは、西側で5.10m、東側で5.04mを測り東側がやや深くなっている。断面形は、逆台形を呈している。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中より、若干量の土師器、須恵器、瓦器が出土している。須恵器片は、甕の胴部破片であり、外面に平行タタキや斜格子のタタキが認められる。

S D 2 (第34図)

調査区の中央部南側でS D 1の北東側に隣接して位置する。D—38区において検出した。長さ2.8m、幅は約0.3mを測る。深さは、15~20cmで、底面のレベルは、南側で4.88m、北側で4.94mを測り、やや南側が深くなっている。断面形は、逆台形を呈している。埋土は、暗茶灰色粘質土の単純一層である。埋土中からの遺物は坪無である。

ピット群 (第21図)

調査区中央部から北側にかけてピット群が集中して残存する。その中でもC—36・37区、D—36・37区にかけて密であり、複数に切り合っている。平面プランは円形状を呈し、径20~30cmを測るものが多い。図示可能な遺物が出土しているピットの内、P 1~P 33が西区で検出している。P 1から36の青磁椀、37・38の土鉢が出土している。36は、見込み蛇ノ目状粒ハギで、その他は淡黄色釉が施される。P 2からは、39の土師器杯である。39は、A—I—a類である。底部は回転糸切りである。P 3から40の土鉢、P 4は41の瓦器椀が出土している。41は、和泉型の瓦器椀で、口縁部外面ヨコナデ、体部は指頭圧痕が残る。内面は、ヘラミガキが雜に施される。P 5から42の青磁椀は、外底から高台疊付の部分が無釉で、その他は淡黄緑色釉で貫入がはいる。見込みは、片切り彫りと櫛描きの文様が施される。P 6からは44の瓦器椀が出土しており、底部は形骸化した三角形状の高台である。P 7は43の瓦器皿が出土しており、口径8cm、器高1.2cmを測る。口縁部外面ヨコナデ調整で、底部に指頭圧痕が残る。内面はナデ調整が施される。P 8からは、45の口縁部の拡張した束縛糸須恵器が出土している。P 9から46の鉄鏃、48の瓦器椀が出土している。46の全長は8.7cmを測る。P 10からは47の瓦器皿、P 11からは49のB—I—a類の土師器皿、P 12の50もB—I—a類の土師器皿である。P 13からは51の砥石

が出土している。断面方形を呈し、両面を使用している。P 14からは、52・53・55、P 15からは、54・56・57、P 16から58の土鍤が出土している。P 18から59、P 19から60の瓦器碗が出土している。P 20から61の瓦器皿、70の須恵器鉢、62~66の土鍤が存在する。P 17は、67の断面長方形を呈する砥石、P 21は76のB—I—a類の土師器皿、P 22から69の土鍤が出土している。P 23から75のB—I—a類の土師器皿、P 24は、68の土鍤がある。P 25からは、71、72の土師器杯が出土している。共にA—II類に属するが、71は、底部がへラ切り、72が糸切りである。P 26は73の土師器皿A—I—a類が出土している。P 27では、77の土師器碗の口縁部破片で、大きく口縁部が外反するタイプが出土している。P 28は、78の瓦器碗が出土しており、口縁部内面に浅い沈線が施され、柿葉型と考えられる。P 29では80の須恵器壺片がある。外面に平行タタキ、内面はナデ調整である。P 30は、74の土師器皿A—I—a類である。P 31は、79の土鍤P 32は土師器杯で81のA—I類と82のB—I類が共存している。81・82とも底部は回転糸切りである。さらに83、84の土師器碗も出土しており、内外面は丁寧なヘラミガキが施されている。P 33では、85の土師器羽釜が出土している。

(2) 東調査区の造構と遺物

S B 7 (第29図)

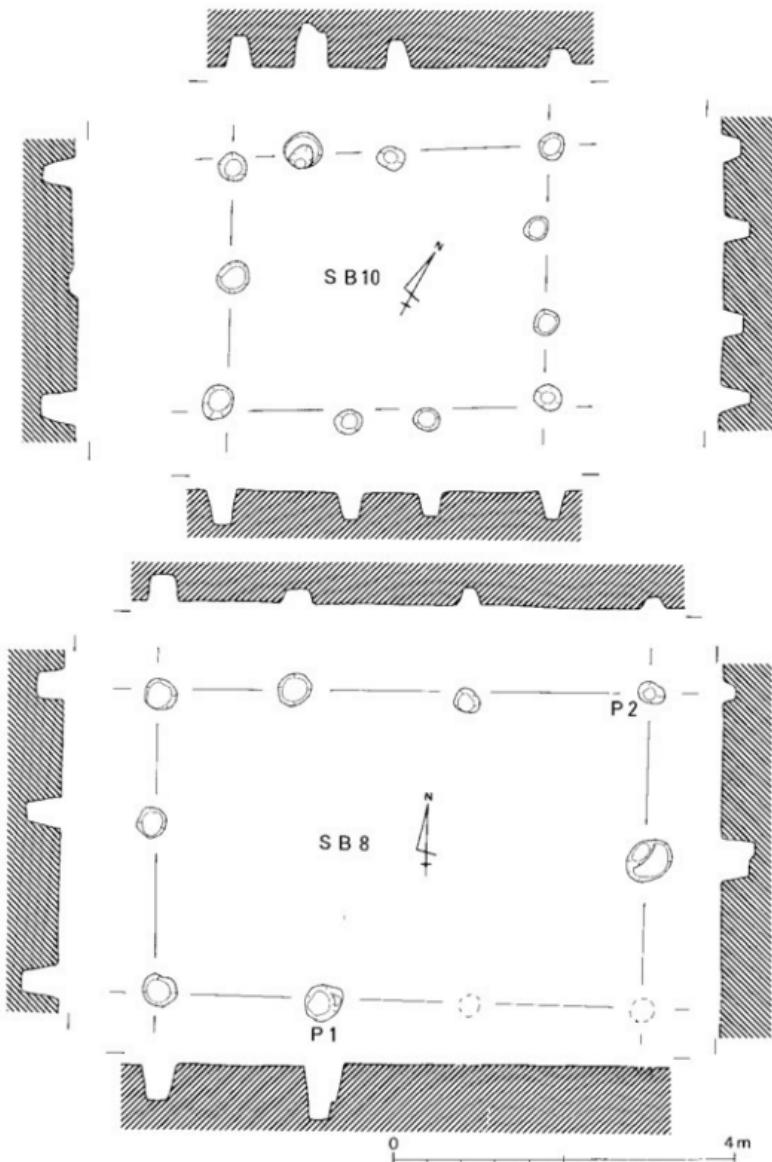
調査区中央部より南西側に位置する。M・N—27・28区に跨がって検出した。棟軸をN—45°Wにとり、やや西に振っている。規模は、梁間2間・3.6m、桁行3間・4.4mの南北棟であり、平均柱間寸法は梁間方向で1.8m、桁行方向で1.45mを測る。柱穴の掘り方は、径30~50cmを測り円形を呈する。南側梁間中央部は欠損している。深さはまちまちであるが、30cmで平均できる。埋土は茶灰色粘質土である。埋土中から土師器、瓦質土器、瓦器、青磁が出土しており、青磁は同安窯系の櫛刷きの皿である。細片が多く実測不可能である。

S B 8 (第28図)

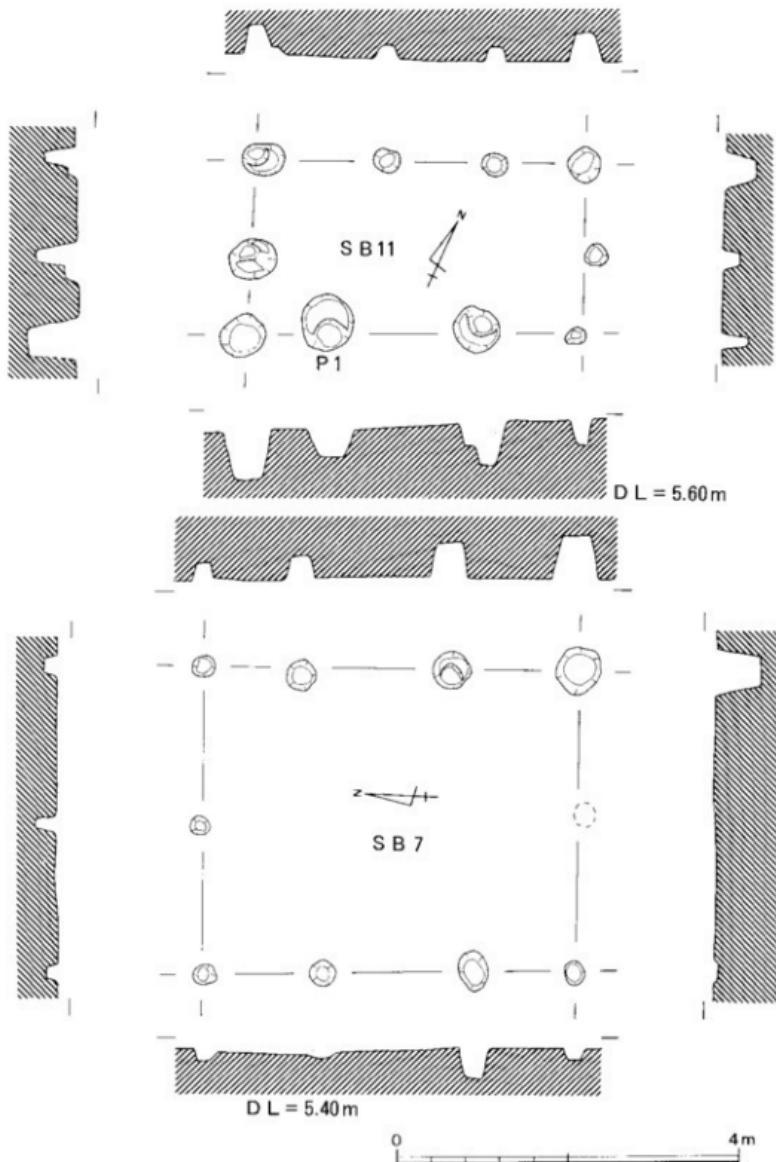
調査区の中央部、S B 7の北東側に位置する。N・O—26・27区に跨がって検出した。棟軸をN—88°—Eにとる。規模は、梁間2間・3.5m、桁行3間・5.75mの東西棟である。桁行南東部の2箇所は欠損している。柱穴の掘り方は、径30~60cmを測り円形を呈する。深さは20~70cmと幅がある。埋土は茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁が出土している。図示でき得た遺物は、P 1から12の土師器杯と、P 2から9の青磁碗がある。12の外底は腐耗が著しいが、回転糸切りと考えられる。

S B 9 (第30図)

調査区の中央部に位置する。M—26、M・N・O—27、N—28区に跨がって検出した。棟軸をN—79°—Wにとる。規模は、梁間2間・3.3m、桁行3間・5.6mの東西棟であり、平均柱間寸法は、梁間、桁行方向ともにばらつきがある。柱穴の掘り方は、径20~40cm前後を測り、円形を呈する。深さは、40~50cmに平均できる。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、



第28図 SB 8・10 実測図 (東区) DL = 5.40m



第29図 SB7・11実測図(東区)

土師器、瓦器、瓦質土器が出土しており、図示でき得るものは、P 1から出した10・11の瓦器碗である。いずれも和泉型のもので、高台は形態化した三角形状を呈する。S B 7・8・10と重複しているが、柱穴の切り合い関係は認められず、新旧関係は不明である。

S B10 (第28図)

調査区の中央部南側に位置する。N-O-27・28区に跨がって検出した。棟軸をN-62°-Eにとる。規模は、梁間3間・2.9m、桁行3間・3.8mの東西棟であり、西側の柱穴が1箇所欠損している。平均柱間寸法は、梁間方向で1.0m、桁行方向で1.2mを測る。柱穴の掘り方は径20~40cmを測り、円形を呈する。深さは、20~50cmの幅がある。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、須恵器、瓦器が出土しているが、実測可能な遺物は皆無である。S B 9と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

S B11 (第29図)

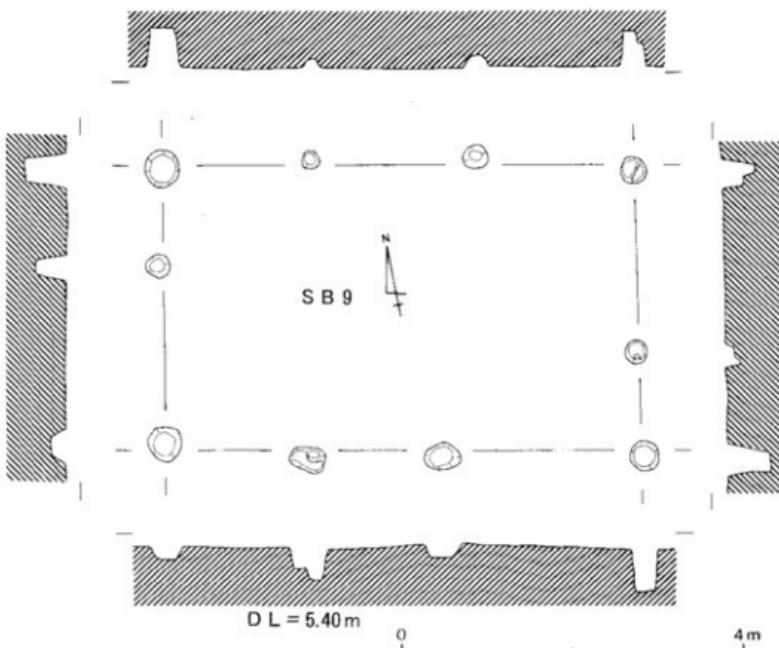
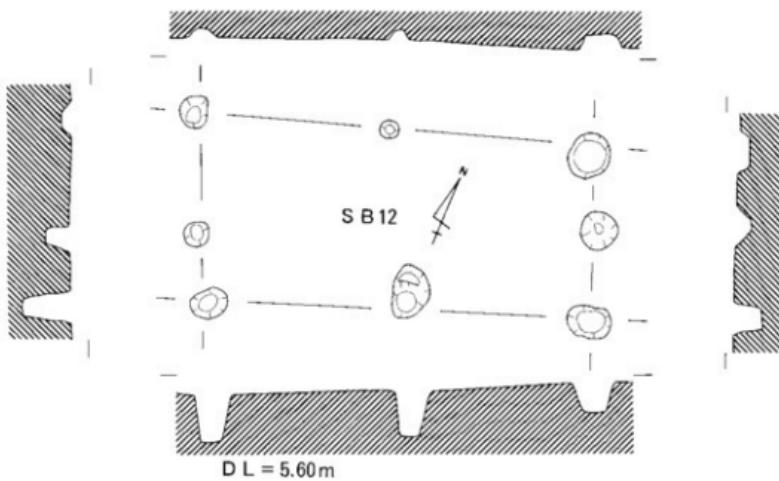
調査区の東部に位置する。P・Q-26区にかけて検出した。棟軸をN-68°-Eにとる。規模は、梁間2間・2.1m、桁行3間・3.9mの東西棟である。柱間寸法は、梁間方向1.1m、桁行方向1.3mを測るが、ややばらつきがある。柱穴の掘り方は、径20~60cmの円形を呈する。深さは、20~60cmの幅がある。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から土師器、須恵器、瓦器が出土しているが、図示でき得たものは、P 1から13の備前焼播鉢が出土している。S B 12と重複しており、S B 12の柱穴に切られている。

S B12 (第30図)

調査区の東部でS B 11と重複して位置する。P・Q-25・26区に跨がって検出した。棟軸をN-68°-Eにとる。規模は、梁間2間・2.1m、桁行2間・4.6mの東西棟である。平均柱間寸法は、梁間方向1.0m、桁行方向2.3mを測る。柱穴の掘り方は、径30~60cmを測り円形を呈する。深さは、桁行南側列が深く50~60cm、北側列は20cm前後である。埋土は、茶灰色粘質土である。埋土中から、土師器、瓦器、備前焼等が出土しているが、細片が多く実測不可能である。S B 11より新しい掘立柱跡物跡である。

ピット群 (第22図)

調査区中央部から東側にかけて、集中して残存する。西区に比較すれば、密集度は高くない。O-26、N-28区にかけてピットが切り合っている。平面プランは、円形状を呈し、径30~60cmを測るものが多い。東区では、P 34~P 47までの遺物が図示でき得た。P 34からは、86~88の遺物が出土している。86は、瓦器碗で復元口径13.0cmを測る。87は同安窯系の皿で、復元口径9.8cm、外面にヘラ压痕及び見込みにヘラによる片影りと横による稻妻状文様が施される。オリーブ灰釉で若干荒い貫入がはいる。88は、須恵器、甕で罐部が若干肥厚し、口縁部内面に浅い凹みがはいる。P 35からは、90の瓦質土器小壺、P 36からは89の土師器鍋が出土している。胴部外面には、斜位のタタキが施される。P 37から91の土師器皿B-1-a類、92の瓦器小皿が出土している。P 38は比較的多量で、95~101の青磁皿と104の青磁碗が出土している。皿



第30図 SB 9・12 実測図（東区）

は、体部内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反するものである。P 39では、102 の青磁皿と、103 の白磁杯が出土している。P 40は、105 の土師器蓋で、口縁部で「く」字状に外反し、口縁部は内上方に立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデで、頸部外面にヘラ状圧痕が施され、胴部内外面はナデ調整である。P 41からは、106の11縫部の外反する青磁碗が出土している。P 42からは、108の口縁端部が水平に外反し、内面に一条の浅い沈線と構描文が施される白磁碗と、P 43では 109 の土鍤が出土している。P 44では 110 の口縁部の外反する青磁碗、P 45では、111 の鍤が水平につく瓦質土器蓋が出土した。111 の内面は横位のハケ調整である。P 46では 107 の口壳の白磁皿、P 47では 112 の備前焼窯の底部が出土している。

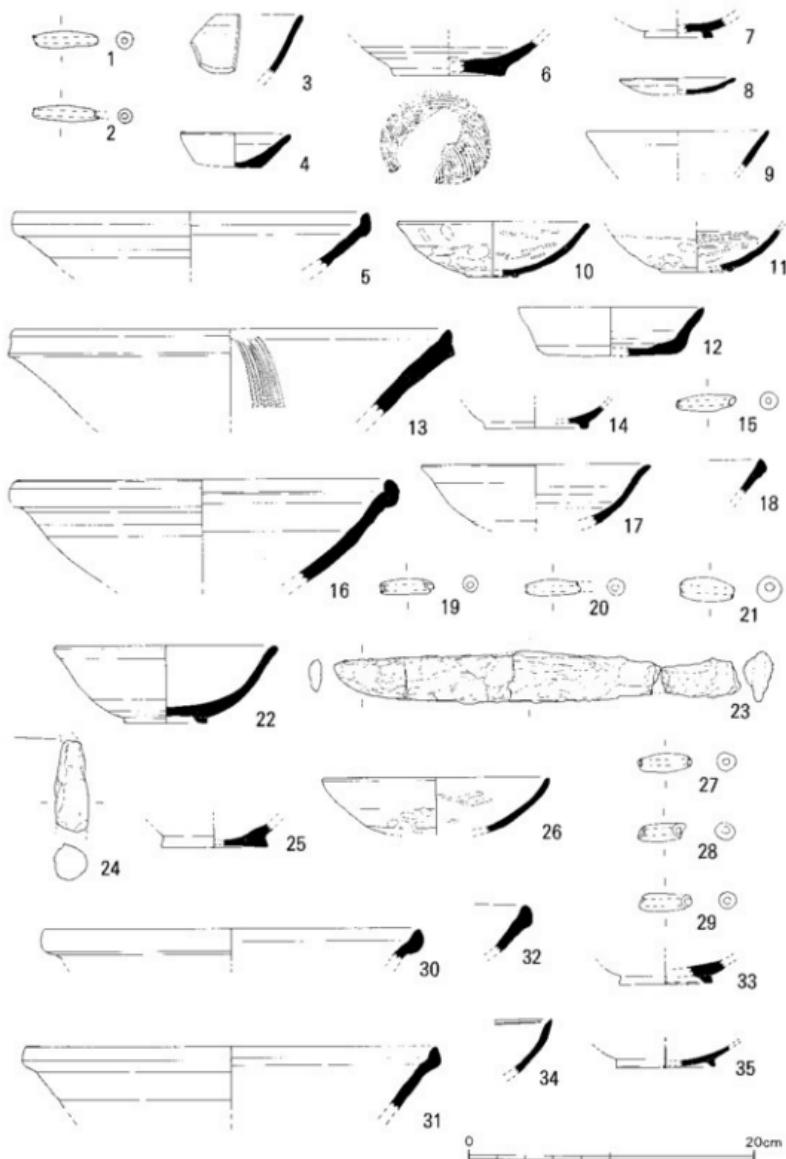
配石造構（第53図）

調査区の中央部北側に位置する。O—24区において、地蔵跡トレンチ調査を進める段階のⅢ層中で検出した。規模は、長径1.47m、短径 0.7 mを測る。10~15cm大の河原石と 113 の須恵器破片を敷きつめて配置されており、大部分が炭化物に覆われている。本造構は、東西に走る液状化による噴砂によって切られており、この噴砂発生時より前に構築されていたことがわかる。出土遺物の裏は、口縁部は「く」字状に外反する。胴部から肩部にかけて内面は横位のハケ調整、外面はナデ調整である。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

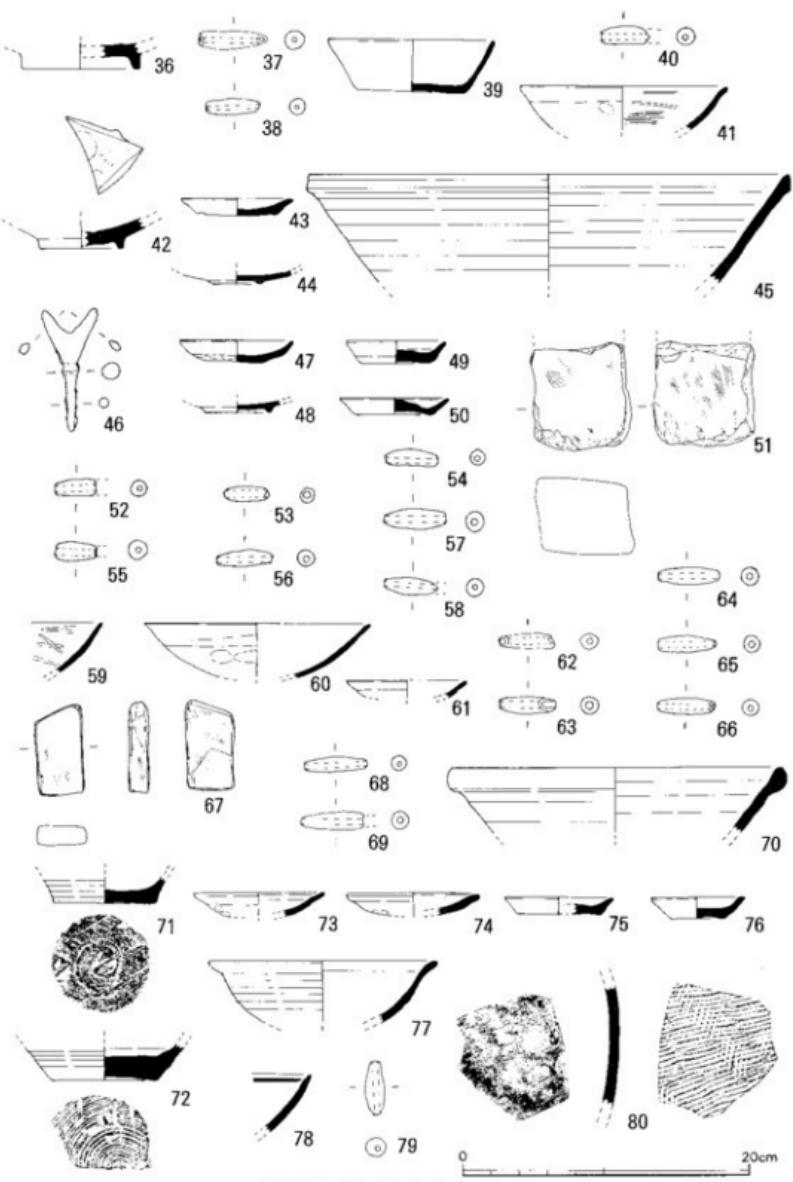
第3表 アゾノ遺跡・土坑観察表

土坑番号	平面形	規 模(m) 長軸×短軸×深さ	埋 土	遺 物	調査区
SK 1	円 形	1.08×1.0×0.17	茶灰色粘質土	土・鉄	西 区
SK 2	隅丸方形状	2.45×1.35×0.09	"	土・須	"
SK 3	隅丸方形状	1.6×1.15×0.09	"	土	"
SK 5	円 形 状	1.25×1.0×0.11	"	土・青・瓦	"
SK 7	隅丸方形状	0.9×0.6×0.11	"		"
SK 8	円 形 状	0.9×0.5×0.13	"	土・青	"
SK 10	"	1.05×1.0×0.06	"	土	"
SK 11	"	1.3×1.2×0.14	"	土・瓦	"
SK 15	円 形	1.25×1.2×0.12	"	土・瓦・青	"
SK 17	隅丸方形状	0.85×0.6×0.03	"	土・須	"
SK 18	"	1.65×0.9×0.15	"		"
SK 19	梢円形狀	1.2×0.8×0.1	"		"
SK 20	"	1.45×0.9×0.14	"	土・瓦	"
SK 24	隅丸方形状	1.5×1.15×0.13	"	土・瓦・瓦質・鍾・ス	"
SK 25	円 形 状	1.2×1.05×0.02	"	土	"
SK 26	梢円形狀	1.26×0.84×0.09	"	土	"
SK 27	不 整 形	1.7×1.1×0.09	"		"
SK 28	円 形 状	1.75×1.5×0.05	"	土	"
SK 29	梢円形狀	2.15×1.0×0.14	"	土・瓦質	"
SK 31	梢 円 形	1.62×0.64×0.11	暗褐色粘質土	土・瓦・瓦質・須	"
SK 32	隅丸方形状	3.0×2.05×0.19	茶灰色粘質土		"
SK 33	円 形 状	0.74×0.56×0.12	"		"
SK 34	"	1.04×0.85×0.14	"	土・瓦	"
SK 35	"	0.96×0.8×0.17	"	土・瓦	"
SK 36	梢円形狀	1.5×1.02×0.12	"		"
SK 37	円 形 状	1.1×0.96×0.16	"		"
SK 38	"	0.8×0.74×0.09	"	土・瓦質・瓦	"
SK 40	"	1.1×0.98×0.06	"		"
SK 41	"	1.4×0.9×0.08	"	土・青	"
SK 42	"	9.4×0.7×0.17	"	土・鍾	"
SK 43	隅丸方形状	6.05×1.45×0.14	"		東 区

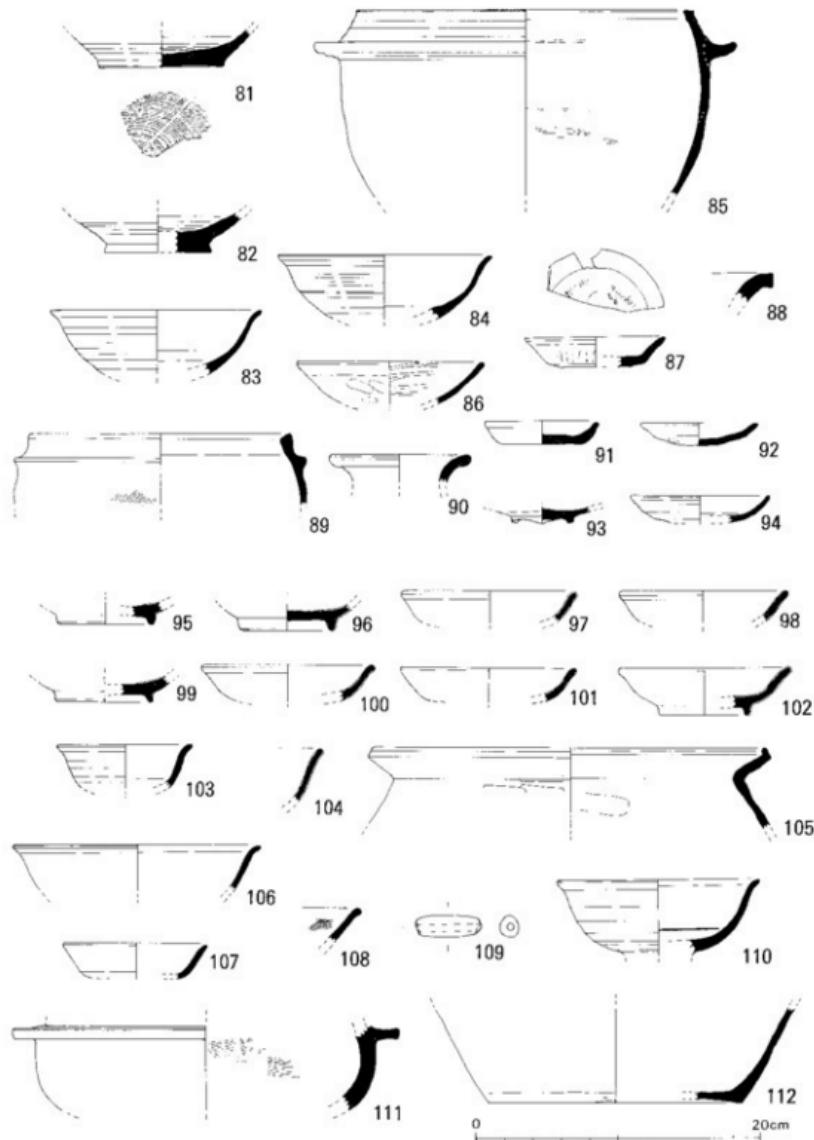
遺物：土（土器）須（須器）青（青磁）瓦（瓦器）瓦質（瓦質土器）鉄（鐵製品）ス（鐵滓）鍾（土鍾）



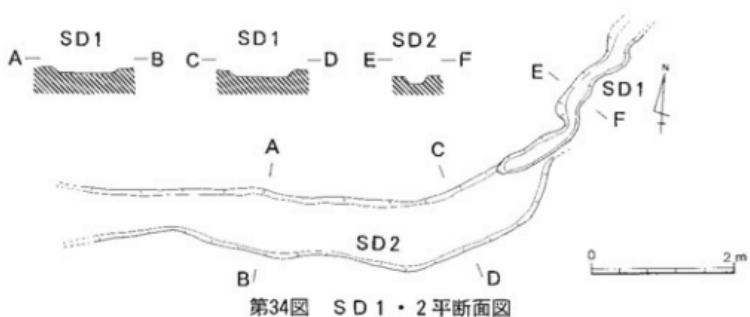
第31図 遺構出土の遺物



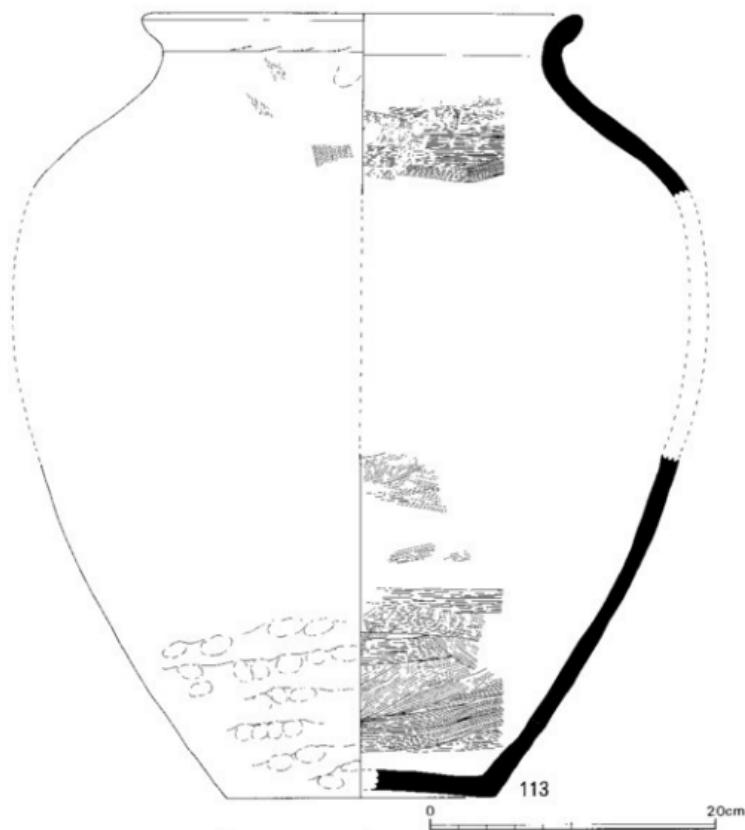
第32図 遺構出土の遺物



第33図 遺構出土の遺物



第34図 SD1・2 平断面図



第35図 配石造構出土遺物

4. 包含層出土の遺物

アゾノ遺跡東区・西区の両調査地区で、第III層の包含層から11～15世紀に亘る遺物が多量に出土した。第III層は、茶褐色シルト層で、遺物の出土状況からすると細分できそうであったが土層の色調及びその土質からは明確に把握することができなかった。ここでは、東西両調査区から出土遺物を種類及び器種ごとに説明を加えていき、その中でも在地産である土師器の供膳具を中心に形態分類をおこなうこととする。包含層の遺物は、土師器皿・杯・碗・釜・鍋・甕・火舎・瓦質土器小壺・釜・鍋・甕・瓦器小皿・椀・須恵器椀・鉢・甕・備前焼壺・甕・鉢・漸戸・美濃系陶器皿・椀・青磁皿・椀・甕・盤・白磁皿・椀・杯・合子・染付皿・石製品で砥石・茶臼・鉄製品は釘・渡来鏡は細片であるが洪武通宝が1枚存在し、その他土鍾が多量に出土している。

土師器（114～201、207、208）

土師器は、供膳具及び煮沸具を中心に出土している。供膳具については以下のとおり形態分類をおこない、その他については個々の特徴を説明していくことにする。

皿：（114～128） 手づくねによる成形のものとロクロ使用の成形で底部が回転糸切りとヘラ切りによるものが存在する。成形の差で大きくA・B群とし、口径9cm以内のものをI類、9cmから10cm内外のものをII類、10cm以上のものをIII類とする。さらに形態によって細分する。

A群 手づくねによる成形（114～117）

A-I-a：擬似「て」字状口縁を有するもの。（114・115）

A-II-b：底部から内湾気味に外上方に大きく開き口縁部にいたるもの。（116・117）

B群 ロクロ使用成形（118～128）

B-I-a：底部から屈曲し直線的に短く上方に立ち上がるもの。（119・120）

B-I-b：底部から屈曲し内湾して短く上方に立ち上がるもの。（118）

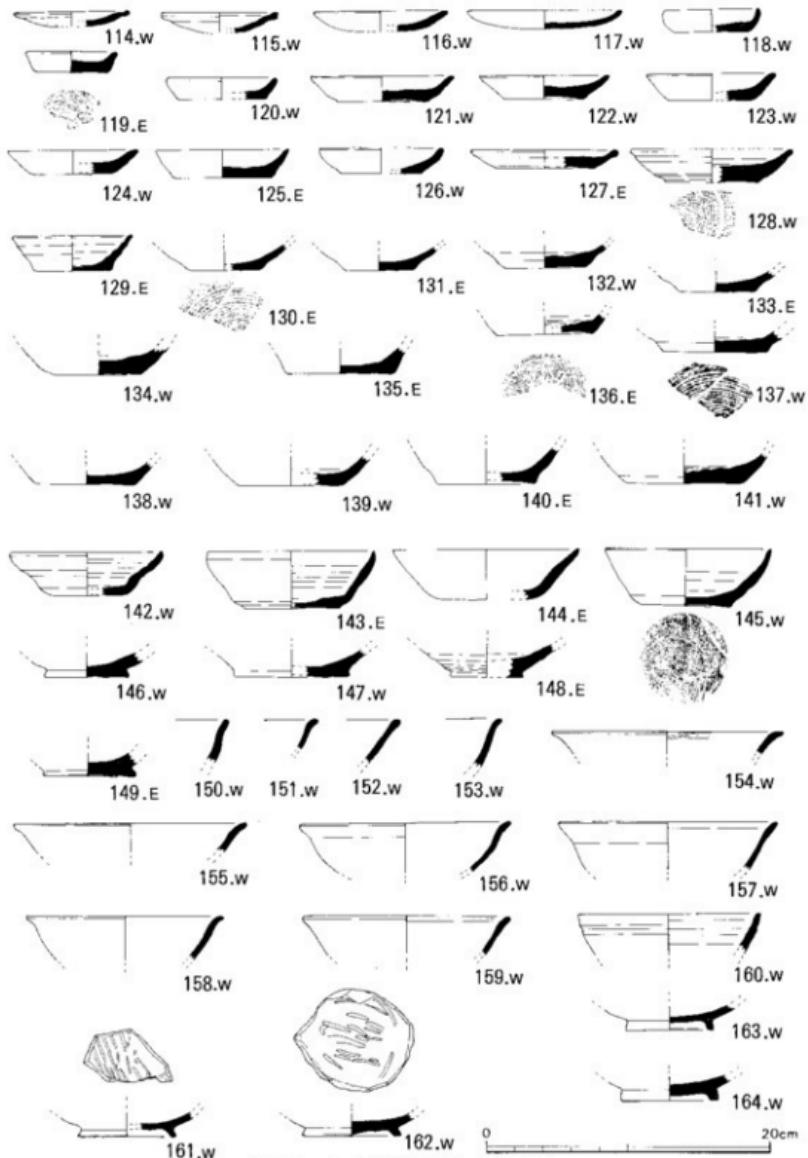
B-I-c： ケ 外上方に立ち上がるもの。（126）

B-II-a：底部から屈曲して直線的に大きく外上方に立ち上がるもの。（121～125）

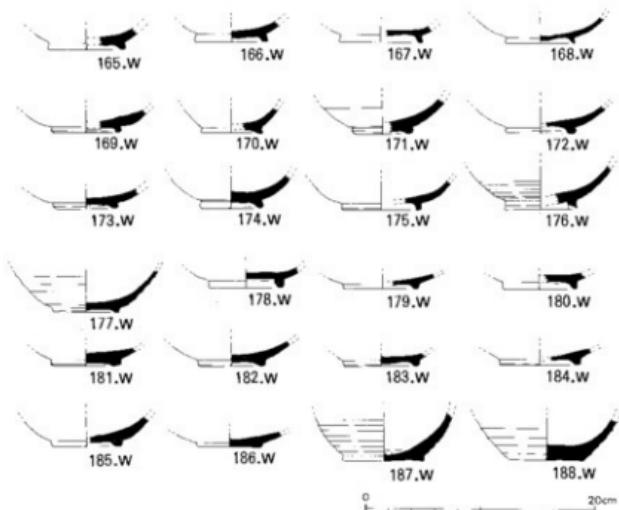
B-II-b： ケ 直線的に短く外上方に立ち上がり端部が肥厚するもの。
(127)

B-III-a：底部から屈曲して内湾気味に外上方に立ち上がり端部が肥厚するもの。（128）

皿は、B-II-aが比較的多く出土しており、121・125が底部ヘラ切りであることから、その他を見ると磨耗が著しく不明であるが同様に底部ヘラ切りと考えられる。B-II-bも底部ヘラ切りである。B-I-aは、119が回転糸切りであることから、形態的に類似している118・126も同様に底部回転糸切りと考えられる。B-III-aとした128も回転糸切りであるが、他の皿と比較すると器高が2.4cmと高く杯に近づいている。器高は、A-I-aが1.0～1.3cm A-II-bが1.3cm、B-I-a・bが1.5～1.6cm、B-I-cが1.8cm、B-II-aが1.7～2.0cm、B-II-bは、1.3cmである。色調は、浅黄橙色から橙色を呈するものがほとんどである。



第36図 包含層出土遺物（土師器）



第37図 包含層出土遺物（土師器）

杯：(129~149) 129のみ小杯である。129は、口径8.2cm、器高2.5cmを測り、平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がるタイプである。底部は磨耗しており不明であるが、回転糸切りと考えられる。ロクロ使用の成形である。その他杯類もすべてロクロ使用成形によるものであるが、底部破片が多いため、底部の形態でA・B群とし、底径が5.0~6.0cm内外におさまるものをI類、6.0~8.0cm内外でおさまるものをII類とする。さらに全体の形状を窺い知ることのできるものは細分する。

A群：平坦な底部を有する。

A-I : (130~133)

A-I-a : 体部が直線的に外上方に立ち上がるもの。(142)

A-II : (134~141)

A-II-a : 体部が直線的に外上方に立ち上がるもの。(143・144)

A-II-b : 体部が内湾気味に外上方に立ち上がるもの。(145)

B群：円盤状高台の底部を有する。

B-I : (146・148・149)

B-II : (147)

杯は、A群が主流であり、すべて底部は回転糸切りによるものと考えられる。全体・形状が判明するものの法量は、142が口径10.6cm・器高3.1cm、143が口径11.8cm・器高4.1cm、144が

口径13.2cm・器高3.6cm、145が口径11.6cm・器高4.0cmである。B群は、杯になるものか椀とすべきものか判断に苦しんだが、ここでは底部から体部にかけて立ち上がりの開きにより杯とした。底部の小破片であるため椀としての可能性も残る。148・149の底部は回転糸切りが観察できるため、146・147も同様にあつかえるものと考えられる。色調は全般的に浅黄橙色を呈する。

椀：（150～188）　杯同様に底部破片が多く存在し、全体の形状を知り得るものがないため底部の形態によってA～C群とし、A群のみ高台部の形状で分類を行う。

A群：輪高台を有する。

A-I：断面方形で「ハ」の字状に開くもの。（161～169）

A-II：逆台形状を呈し、「ハ」の字状に開くもの。（170～174）

A-III：断面方形で直線的になるもの。（175～178）

A-IV：逆台形状を呈し直線的になるもの。（179～185）

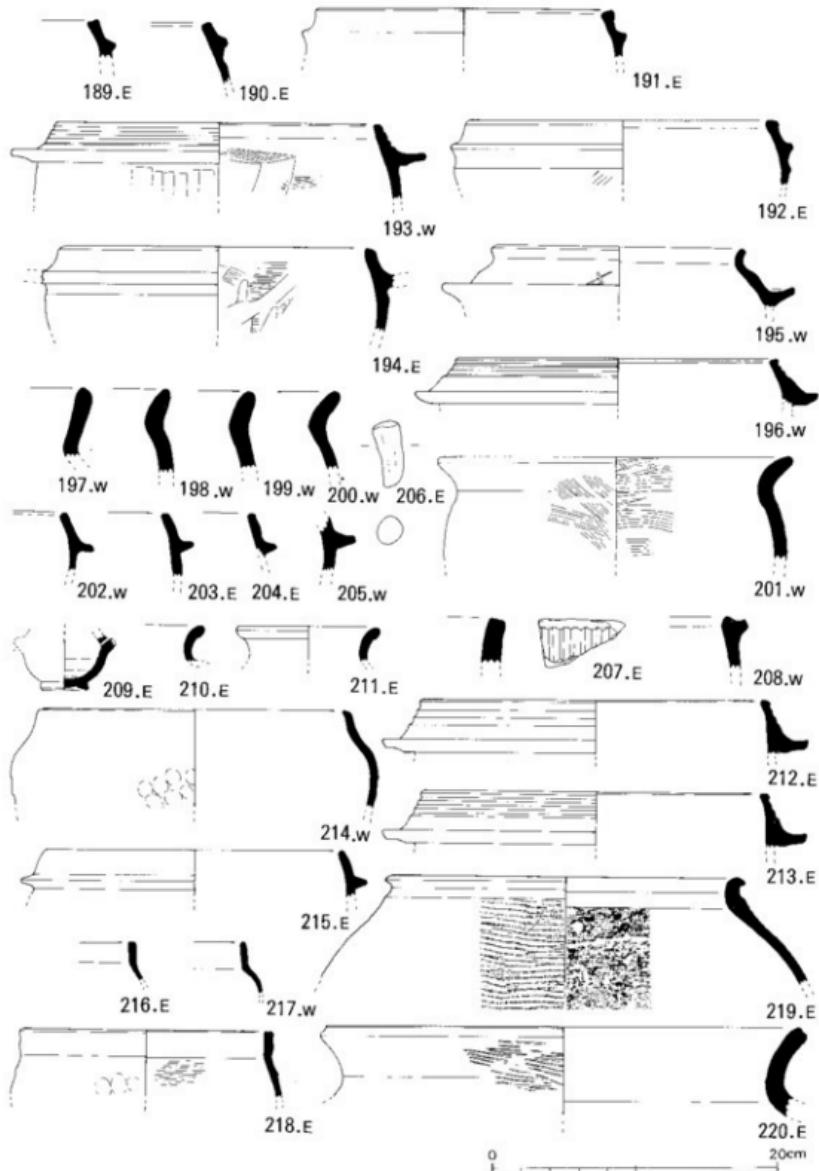
B群：円盤状の高台を有する。（186・187）

C群：平坦な底部を有する。（188）

椀は、A群が多く出土しているが、A-Iの161・162は内面にヘラミガキが施される。161は平行線状の丁寧なヘラミガキが施され、162は単位の大きいヘラミガキが観察できる。163は胎土が白色系を呈し、一部赤色化している部分がある。169・174・176には、体部外面下半にヘラ削りが認められる。A群の外底には回転糸切りが認められるものがなくナデ調整が施されるものが多い。150～160は、椀の口縁部破片である。推定口径13～15cm内外におさまるものが多い。160を除き、体部が内湾して外上方に立ち上がり、口縁部が外反するものである。154の口縁部内面には一部ヘラミガキが認められる。色調は、浅黄橙色と灰白色を呈するものがみられ前者は、150～156・160、後者は157～159である。灰白色を呈する口縁部破片は、163・178と同様の色調、胎土を有しており、同個体になる可能性がある。B・C群は量的に少ないが、187の底部のみ回転糸切りが観察できる。他の186・188は磨耗が著しいため不明であるが底部は回転糸切りと考えられる。底部破片で、163・178を除き浅黄橙色から淡黄色を呈する。

鍋：（189～192）　口縁部破片が若干出土しているのみである。口縁部は内傾し、端部が肥厚するものが認められる。肩部は三角形状の突帯部を有する。口縁部外面は、いずれもヨコナデ調整で、192は、突帯部直下もヨコナデ調整である。胴部は192に見られるように、斜位のタタキが施され、煤が付着する。191・192の復元口径は、20cm前後である。色調は橙色を呈する。

釜：（193～196）　193は、半球型に近い胴部から内傾する口縁部になり、肩部に幅の狭い鉗をめぐらす。口縁端部は平坦で、口縁部外面は段状の凹線がめぐらされる。胴部外面は、ヘラ削り調整、内面は口縁部がヨコナデ、胴部にかけては、ハケメが施される。内外面に炭素を吸着させている。復元口径は、22.6cmである。194は、半球型に近い胴部から、内傾する口縁部で端部は外傾する面を有する。肩部に鉗をめぐらせるが、端部は欠損する。口縁部外面及び



第38図 包含層出土遺物（土師器・瓦質土器）

鋤下部はヨコナデ調整。刷部外面は、横方向のヘラ削りが施される。口縁部から胴部にかけての内面は、横方向のハケ目の後斜位の方向にナデ調整がはいる。推定口径は20.8cmで、色調は浅黄橙色を呈する。195は、胴部が欠損している。鋤は上方に突出し、口縁部は外反する。鋤部の上方に「△」状のヘラ掘きがみられる。口縁部内外面はヨコナデ調整で、その他はナデによる調整が施される。推定口径17.2cmで色調は浅黄橙色を呈する。196は、推定口径20.8cmで、口縁部が内傾し、肩部に貼付している鋤になめらかに移行する。口縁端部はやや内傾し拡張されている。調整は、内面は不明であるが、外面は口縁部に3条の凹線が施され、鋤上面はヨコナデである。208は内傾する口縁部になり、外面には断面台形状の貼付の鋤がつく。内面の調整は不明である。外面の単位は不明であるが、丁寧なヘラミカキが施される。内外面に炭素を吸着させており、外面には煤も付着する。

甕：(197~201) 口縁部破片が多く存在する。口縁部が外反し、198・199は胴部上位に200・201は口縁部に最大径を有する。197~200は全体的に磨耗が著しく調整が明確でない。201は、推定口径24.4cmを測り、口縁部外面はヨコナデの後斜位のハケ、同じく胴部外面は斜位のハケ調整である。内面は荒い横位のハケ調整が施される。色調はいずれも橙色から褐色を呈し、胎土は1~2mmの砂粒を多く含む。

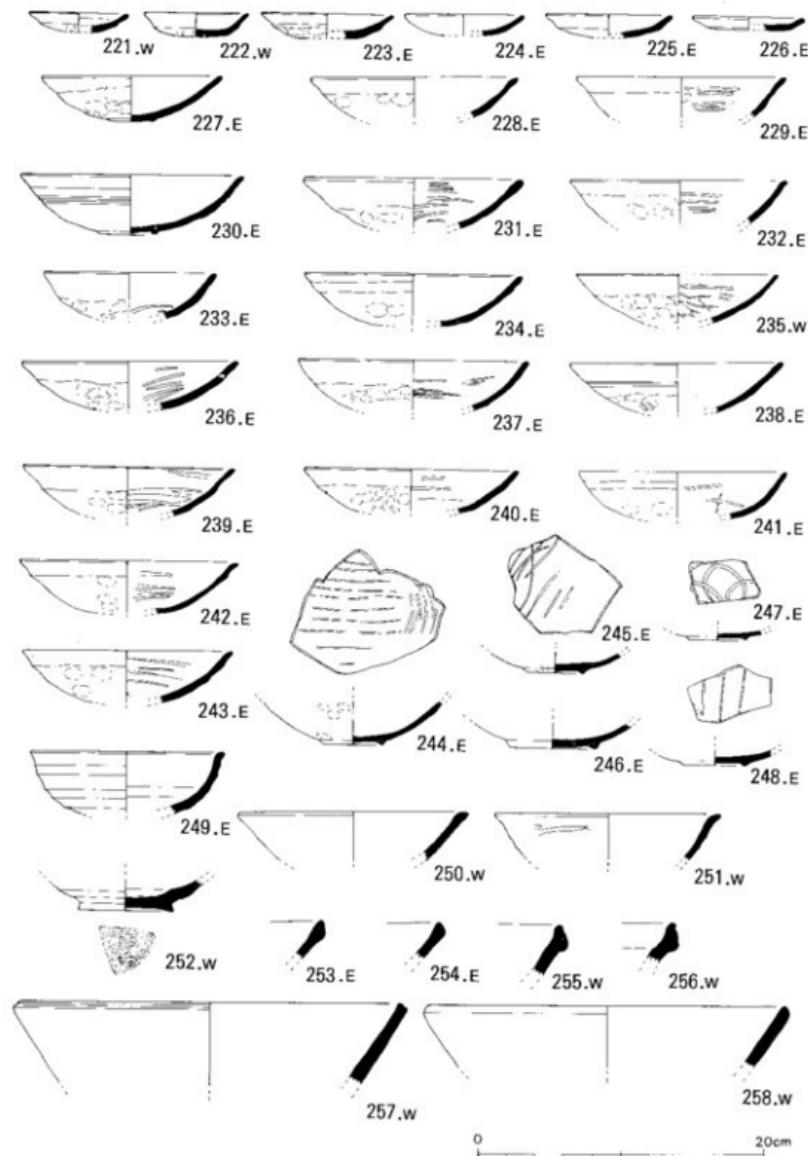
火舎：(207) 口縁部破片で1点のみである。口縁部が立ち上がるタイプの火舎であり、外面に格子状の文様を刻んでいる。色調は浅黄橙色を呈する。

瓦質土器 (202~206・209~220)

瓦質土器は、煮沸具・貯蔵具が中心に出土している。その他は小形製品である。煮沸具は、2点を除き在地産と考えられるもので、貯蔵具・小形製品は搬入品である。

釜：(202~206・212・213・215) 202~206・215は、在地産の釜である。口縁部は、内傾し端部は平坦なものと内傾するものが認められる。鋤も断面方形や三角状に突出するものがある。206は、脚部であり、202~205・215の釜が三足になるものと考えられる。焼成はいずれも軟質で、調整も磨耗が著しく不明なものが多いが、口縁部内外面にヨコナデが施されるものがある。212・213は、畿内からの搬入品である。復元口径は212が23.4cm、213が24.2cmである。半球型と考えられる刷部から、肩部には幅の狭い鋤を有する。鋤の部分から内傾する口縁部で、端部はやや肥厚され平坦になる。口縁部外面は凹線状になる。内面は不明である。色調は灰色を呈し焼成不良である。

鍋：(214・216~218) 214は、刷部上位に最大径を有し、口縁部は内傾する。端部は平坦であるが、一条の浅い沈線が施される。胴部外面は指頭圧痕、口縁部内外面はヨコナデ調整である。216・217・218は、口縁部がやや内傾気味であるが、上方に立ち上がるタイプの範疇に入る。218は、口縁部内外面ヨコナデ調整、胴部外面は指頭圧痕、内面は横方向のハケ調整が施される。色調は灰色を呈する。



第39図 包含層出土遺物（瓦器・須恵器）

小壺：(209～211) 小形製品の壺である。209は、貼付高台で肩部にも貼付の把手状のものがつき、外方から径2mmの孔が穿たれる。胴部内面にはロクロ目が残る。内外面灰色を呈する。210・211は、口縁部が大きく外反し直線状を呈する。211は、復元口径9.8cmを測る。ロクロナデ調整である。色調は、内外面及び胎土も黒色を呈する。

壺：(219・220) 219は、復元口径32.6cmを測る。大きく張った肩部から、頸部は上方に立ち上がり、口縁部は強くヨコナデされ外反する。胴部外面は、平行タタキが施され、内面は、磨耗が著しいか横位のナデ調整が施される。色調は灰色を呈し、胎土に0.5～1mmの砂粒を多く含む。220は、胴部が欠損しているが口縁部はなめらかに外反する。端部は外傾する面を有するが、凹線状になる。口縁部外面に平行タタキ、内面はヨコナデが施される。色調は灰色で胎土は1～2mmの砂粒を含む。

瓦器 (221～248)

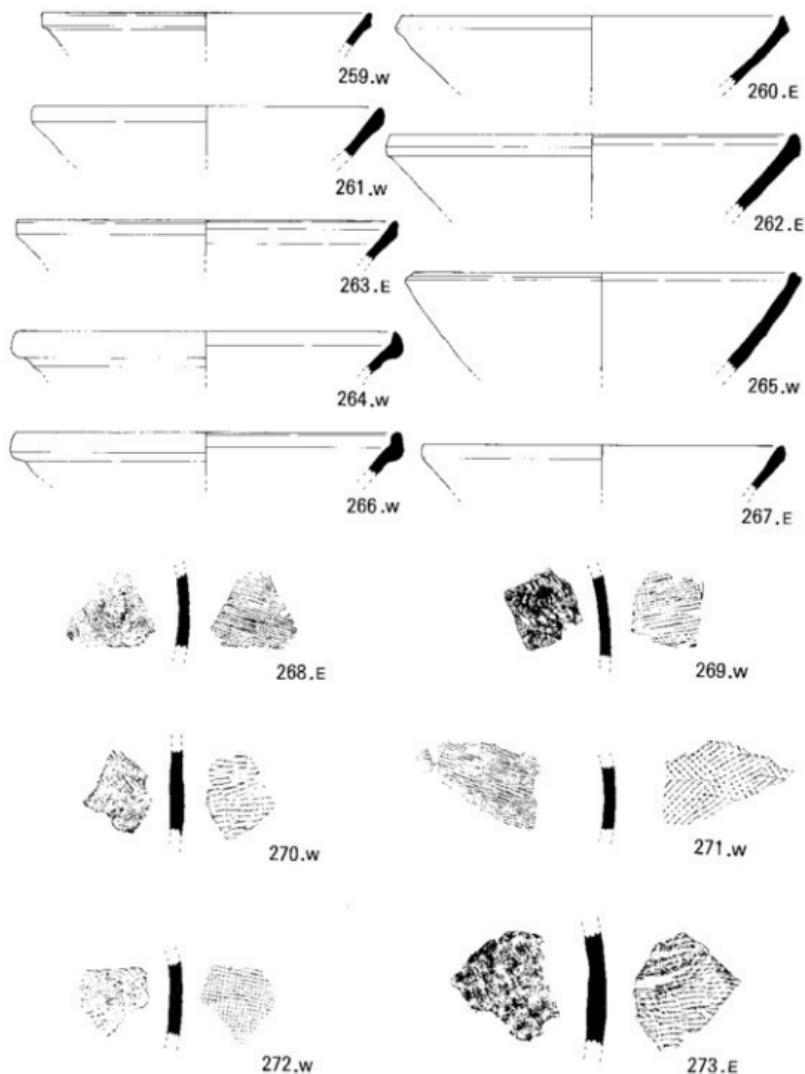
瓦器は、小皿・椀が出土している。口縁部と底部破片が多く全体の器形を知り得るものは少ない。すべて包含層出土のものは和泉産と考えられる。

小皿：(221～226) 221・222は、復元口径7.0と7.2cmを測り、他と比較すると小振りである。底部外面は、指頭圧痕が施され口縁部はヨコナデ調整である。221は、底部から丸みをもって口縁部に立ち上がるが、221は平らな底部から屈曲して口縁部に立ち上がる。223～225は、復元口径9.0～8.4cmとなり、いずれも丸みを有した底部から口縁部に立ち上がる。224のみは、底部と口縁部の境に調整差による棱線がみられない。226は、復元口径7.6cmであり小振りである。平らな底部から屈曲して短く外方に立ち上がる。他の小皿と比較して器高が0.9cmと低くなる。

椀：(227～248) 227は、口径12.5cm、器高3.2cmを測る。形骸化した高台を有し、内湾気味に大きく開いて外方に立ち上がる。体部外面は指頭圧痕、口縁部はヨコナデが施される。233は、復元口径11.8cmで小振りであり、内面にヘラミガキが施される。口縁部外面は、ヨコナデで、体部下半は指頭圧痕が残る。その他は、復元口径14～15cmが中心である。調整は、体部外面に指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデが施されている。内面には、ヘラミガキの省略化が行なわれ、全体に粗雑感を与えるものである。その中でも230は、全体の器形を知ることができ、復元口径15.6cmを測る。貼付高台は、形骸化が進んでいるか断面逆台形状を呈している。体部外面には指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ、内面は磨耗が著しく不明である。特徴としていえることは、3条の浅い凹線が施される点である。224は、三角形状の貼付高台で、見込みに平行線のヘラミガキ、内面に圓線状のヘラミガキが施される。248・245も同様である。247は、三角形状の貼付高台を有し、見込みに螺旋状のヘラミガキが施される。

須恵器 (249～280)

須恵器は、椀・鉢・甕類が出土している。鉢類は、東播系と考えられる。供膳具である椀の出土は数少なく、調理具・貯蔵具が主体を占めている。



第40図 包含層出土遺物（須恵器）

椀：(249～252) 249は、復元口径13.4cmを測る。体部が内湾して上方に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面にロクロ目が残る。焼成は良好で硬質である。色調は暗青灰色を呈す。250・251は、復元口径16.0・15.6cmを測り、体部は内湾気味に外上方に大きく開き口縁部はやや外反する。調整はロクロナデで、251の外面には一部ヘラミガキが残る。色調は250が淡灰色で、251は灰白色を呈し、いずれも焼成は悪く軟質である。252は、復元底径6.6cmを測り、円盤状の高台部を有する椀である。外底は糸切りである。硬質で、色調は淡灰色を呈する。

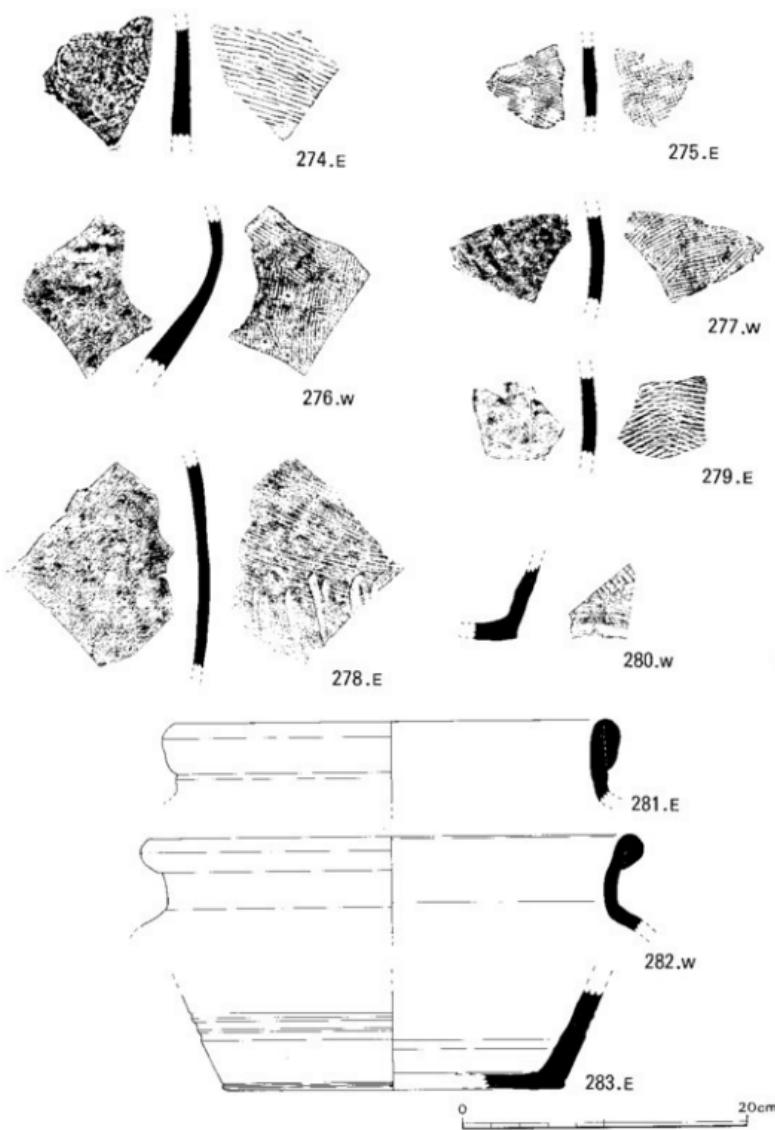
鉢：(253～267) 口縁部破片が多量に出土している。体部は直線的に外上方に立ち上がる形態のものがすべてである。口縁部の形態に差が認められる。257・258・265のように、口縁部は拡張されず、外傾する面を有し、265のように端面にやや凹部をもつものも存在する。次に253・254・259～263・267のように端部が肥厚し、259・260では内外の強いヨコナデ調整により滑らかな立ち上がり気味の口縁を有するものも含まれる。さらに255・256・262・264・266では、口縁部に対する外面の強いヨコナデ調整により上方に張りだすものと下方に垂れ下がるものがあり、口縁帯を形成するようになる。ロクロナデ調整によるものであるが、色調は灰色から灰白色を呈するものが多い。口径は、復元口径であるが、259・261のように23～24cmを測るやや小振りのものから、262の28.2cmを測る大形品が存在する。その他はすべて25～26cmを測るものである。

甕：(268～280) 脊部破片が多く良好な資料とは言えないが、外面で観察できる特徴によって説明を加える。268・269は、外面平行タタキの後一部に斜位のタタキが施され、格子目状にしている。内面はナデ調整である。270は、外面に荒い平行タタキ、内面はナデ調整である。271は、外面矢羽根状のタタキで、内面は櫛目状のナデ調整である。胎土は灰褐色、外面は黒色を呈し、焼成は軟質で瓦質のような製品である。272は、外面格子目のタタキで、内面は同心円のタタキをナデ消している。273・274は、外面平行タタキで、内面はナデ調整である。この2点も焼成は軟質である。275は、外面格子目のタタキで、内面は櫛目状のナデ調整である。276は、外面平行タタキの後部分的に斜位のタタキを施し格子目状にしている。内面はナデ調整である。277は、外面平行タタキ、内面はナデ調整。278は、外面横位の櫛目状のナデ調整の後下半は縦方向のヘラ削りが施される。内面櫛目状ナデの後さらにナデ調整が施され、指頭圧痕が見られる。280は、底部破片であるが、外面はナデが施され、その上部に格子目のタタキが施される。内面はナデ調整である。胎土は暗茶褐色を呈し、備前焼になる可能性がある。焼成は、272・275～280が硬質である。

備前焼 (281～294)

備前焼は、甕・壺・擂鉢の貯蔵具・調理具のみである。擂鉢が比較的多く出土している。

甕：(281～283) 281は、口縁部が上方に立ち上がり、幅の広い玉縁を呈する。復元口径は30.5cmを測る。282は、復元口径34.0cmで、口縁部はやや外反し玉縁の口縁部を有する。283



第41図 包含層出土遺物（須恵器・備前焼）

は、底部片であるが外面に3条の凹線が施される。

壺：（284） 口径11.0cm、残存器高17.8cmを測る。胴部中位に最大径を有し、半球型の胴部から頸部は短かく上方に立ち上がり、口縁部は外反しやや土練状を呈する。外面には粘土紐接合痕が観察できる。肩部内面には指頭圧痕が残る。

擂鉢：（285～294） 285・286は口縁部破片であるが、285は、口縁端部を斜めに切り落としたように外傾する面を有する。286は口縁端面を上下に拡張させ広い面を有する。287は平らな底部から直線的に外上方に立ち上がり、底部外面にはヘラ削りが施される。内面の条線は8本単位で下から上へ施される。288は、平らな底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。内面の条線は10本単位で下から上へ施される。289～291は、体部が内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は、289から291に従い徐々に拡張され広い面を形成するようになる。292・293は、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は292・293が上下に拡張されて広い面を有し凹状になる。294は上方に肥厚し立ち上がり、口縁部内面は凹状になる。復元口径は、289・290が29.6・28.1cm、291～293が26.6cmで、294が29.6cmである。

瀬戸・美濃系陶器（295～302）

瀬戸・美濃系陶器は、卸し皿、椀・天目茶碗が出土している。他製品を比べると量的に少ない。

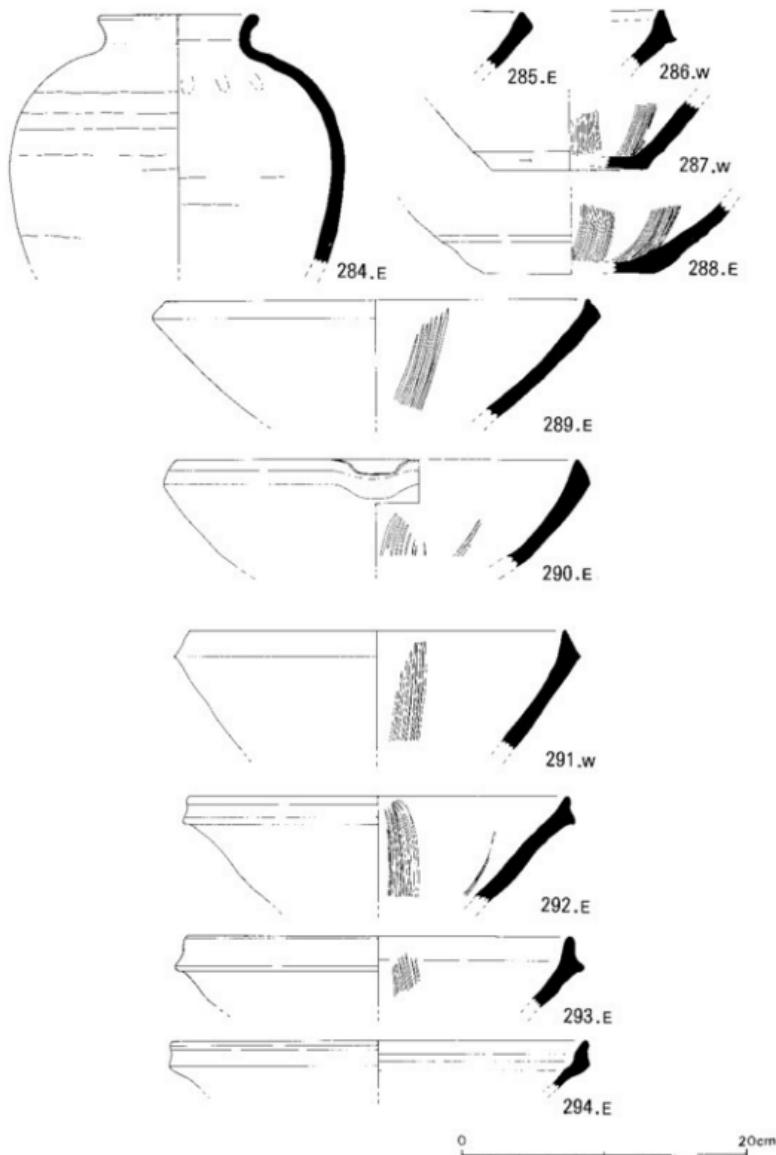
卸し皿：（295～298） 295は、底部の卸し目部分が欠損しているが、体部はゆるやかに内湾気味に立ち上がり、端部は外傾する面をもちやや凹線状になる。釉は口縁部の一部に施される。296は、平らな底部で内面に荒い卸し目がみられる。297・298は、体部が内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は内面に短かく突出する形態をもつ。297は口縁内外面に施釉、298は、外面無釉で内面は施釉している。復元口径は、295が16.2cm、297・298が14.2・15.4cmである。

椀：（299～302） 299・300は天目茶碗である。体部は内湾気味に外上方に、口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。299の復元口径12.6cmである。301は、逆台形状を呈する高台付の椀で置付は平坦である。外底には回転糸切りが残る。体部外面はロクロのヘラ削り、内面は貫入のはいる緑色の釉が施される。302は、体部が直線的に開く椀である。口縁部内外面に黄緑色の釉が施される。

青磁：（303～360・365・394）

青磁は、皿・椀・壺・蓋・盤が出土している。同安窯系から龍泉窯系のものが見られる。

皿：（303～319） 303～306は同安窯系の皿である。303は、復元口径10.7cmで体部中位で屈曲し口縁部を形成する。見込みは、ヘラによる片彫りと櫛による稻妻状文が施され、全面淡緑色釉が施された後底部のみをカキ取っている。304は、復元口径10.3cmで、内面ヘラによる片彫りと櫛による稻妻状文が施され、外面体部下半と底部には施釉されていない。303と施釉方法に差が認められる。305は、304と同形態で、内面は青緑色釉に貫入がはいり櫛による稻妻状文が施される。外面体部下半と底部は露胎である。306は、復元口径10.6cmを測り、体



第42図 包含層出土遺物（備前焼）

部中位で屈曲し口縁部はやや外反する。淡青緑色釉が施され内面に櫛による稻妻状文のみ観察できる。307～313は、同タイプのもので、復元口径は307・308・311・313が 12.6cm 、309・310が 11.0cm 、312が 11.8cm である。309を除き体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部はやや外反する。全般的に青緑色釉が施され、307～309・311は貫入がはいらず、310・312・313がはいる。314～316・319は底部破片であるが、314は、高台が逆三角形状を呈し、見込みは円形状に釉を搔きとており外底も露胎である。315・316・319は、逆台形状の高台部を有し、見込み及び外底は露胎である。317・318は、腰部で屈曲し体部は外上方に大きく立ち上がり口縁部は外反する。317の見込み、外底、318の外底は露胎である。

椀：(320～359・365) 320～325は口縁部破片であるが、内面に1条及び2条の沈線がはいるものである。内面の文様は、飛雲文や線描きの文様が施される。326は、復元口径 13.6cm を測り、黄味がかった青緑色釉に内外面貫入がはいる。内面に櫛描き状の文様が施される。327は、内面に飛雲文がはいる。328は外底が露胎で、その他は青緑色が施される。見込みは片彫りの蓮華文である。329は、復元口径 15.9cm で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部はやや外反する。内面は、蓮華の葉を横から見た文様が描かれる。330～335は、内外面無文で、口縁部は外反しないタイプである。330・332には口縁部内面に浅い沈線がはいる。復元口径は $15\sim16\text{cm}$ 内外で331が 12.6cm でやや小振りである。オリーブ灰色釉が施される。336～340・342は外面に鎧蓮弁文が施されるタイプである。341は、口縁部が外反し外面に蓮弁文が施され、オリーブ灰色釉で荒い貫入がはいる。344～353は、内外面無文で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部が外反するものである。復元口径が、 $13\sim14\text{cm}$ におさまるものに、349・352のように 17cm 内外を測るもののが存在する。354～359・365は底部破片であるが、356の見込みには印花文がスタンプされ、359では内外面に櫛描き文が施される。354は外底が露胎で青緑色釉が施される。355は、外面露胎で見込みは淡青緑色釉が施される。豊付の外面を削っている。356は厚い底部で豊付の部分から外底は露胎になっているが赤く発色している。357は全面に青緑色釉が施され、見込みの部分のみ貫入がはいる。358は、厚い底部をもち、釉は豊付をこえて施されている。359は外面露胎で、見込みは段を有し明緑灰色釉が施されている。365は高台の削り出しが浅く、豊付外面をさらに削り取っている。豊付外側まで明緑灰色釉が施される。

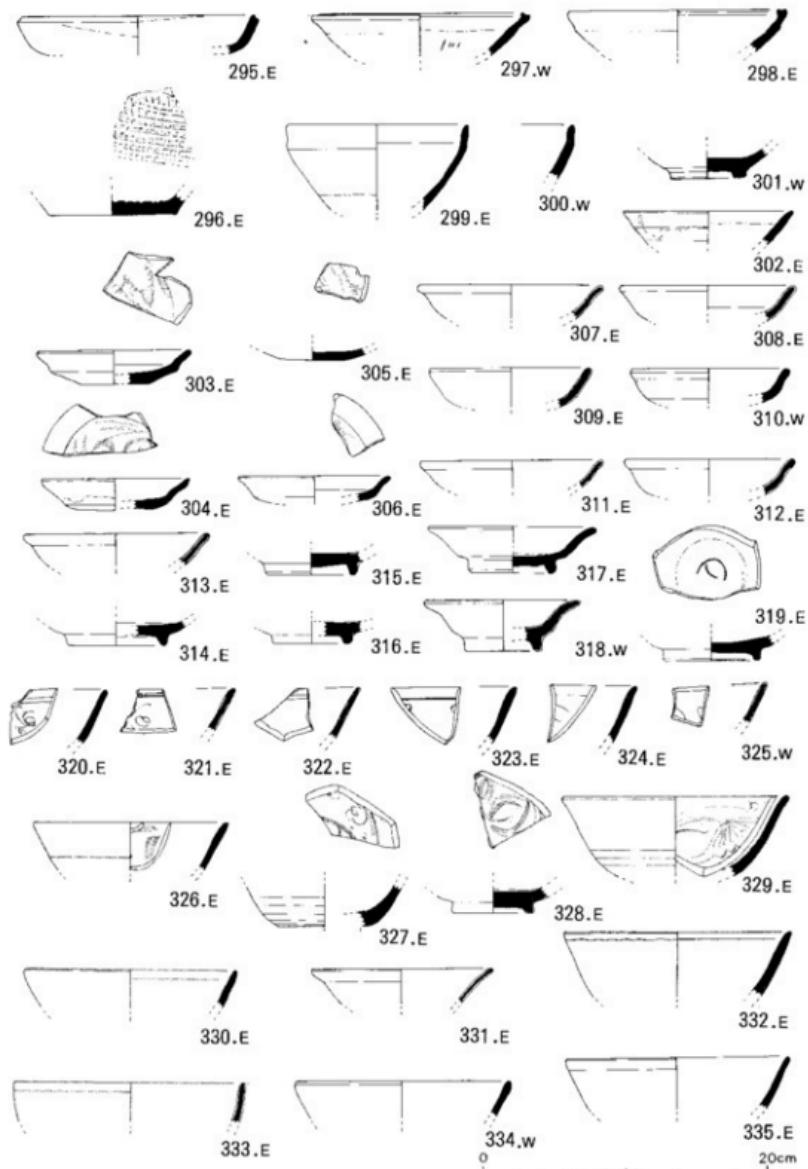
壺：(360) 1点のみ出土しており、肩部の破片である。青磁の四耳壺で耳は欠損している。淡青緑色釉が施される。

盤：(394) 口縁部は上方に立ち上がり、青緑色釉が施される。

白磁 (361～364・366～393)

白磁は、皿・椀・合子・杯類が出土している。

皿：(361～364・366～377) 361は、体部が内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。白濁色釉が施されるが体部下半は露胎である。362は口禿である。灰白色の釉が施されるが、外面体部下半は露胎である。363は、体部から内湾気味に立ち上がり口縁部にいたり端部



第43図 包含層出土遺物（瀬戸・美濃系陶器・青磁）

は面取る。白濁色釉が施され細かい貫入がはいる。364・366～377は、367・368を除き同タイプの製品と考えられる。白濁色釉が体部下半まで施され貫入がはいる。高台部は露胎である。復元口径・高台径を見ると大小の差を認めることができる。376の口径は、11.6cmを測る。377は、外底に「田」と朱書きされる。367は、口縁端部を面取りされる。368は、平坦な底部で、外底は露胎である。内面は白濁色に貫入がはいる。同安窯系の白磁と考えられる。

椀：（378～390） 378・379は口縁部が玉縁状を呈するものである。379は荒い貫入がはいる。380は口縁部が外反し端部は口禿である。381は体部が内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部を若干外反させる。382は、復元口径13.4cmを測り、他の白磁と比べると小振りである。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は小さい玉縁を呈する。灰白色釉が施される。383は、復元口径17.6cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は大きめの玉縁を呈する。胎土は粗く灰色気味で黒色粒子を含有する。384は、復元口径16.4cmを測る。口縁部破片で明瞭でないが、口縁部近くまで外面へラ削りして灰白色釉が施される。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。385は、復元口径15.2cmを測り、形態は384と同様である。386・387は復元口径17.5・15.3cmを測り、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部を外反させて端部を水平にしている。387は体部内面に櫛で花文を描いている。388は口縁端部を丸くおさめ、灰白色釉が施される。復元口径16.2cmを測る。389の高台は、外面を直に内面を斜めに削りだし、疊付を狭くしている。体部外面下半は無釉である。390は、体部下半及び高台部は露胎で、見込に印花文が施される。

合子：（391） 身の部分で口縁部破片が出土している。釉は体部中位まで施され、下半部は無釉で赤化している。復元口径7.4cmである。

杯：（392・393） 392は、体部が内湾して外上方に立ち上がる。白濁色釉で貫入がはいる。393は8角杯で、薄い白濁色釉が施され、高台脇及び高台部は無釉で高台はアーチ状を呈する。

染付（395）

染付は、1点のみ出土しており、皿で口縁部が端反りの形態である。見込みに2重の界線、外面に唐草文が淡い青色で描かれている。

石製品（396～400）

砥石及び茶臼が出土している。

砥石：（396～399） 397は、仕上砥で砂岩製である。偏平な長方形を呈し、側面は擦り切りの痕を残す。砥面は平滑である。上下端が欠損しているが、残存長5.4cm、全幅3.1cm、全厚0.5cmを測る。396・398・399は、中砥と考えられ、4面とも使用している。断面方柱状を呈し、下端部は欠損している。396は、残存長7.3cm、全幅4.2cm、全厚3.6cmを測り、粘板岩製である。398は、残存長12.7cm、全幅3.9cm、全厚2.7cmを測り、砂岩製である。399は、残存長6.6cm、全幅4.6cm、全厚3.8cmを測り、流紋岩製である。

臼（400） 茶臼の上臼で、大部分が欠損しているが、挽き手穴が側縁の中央部に認められ

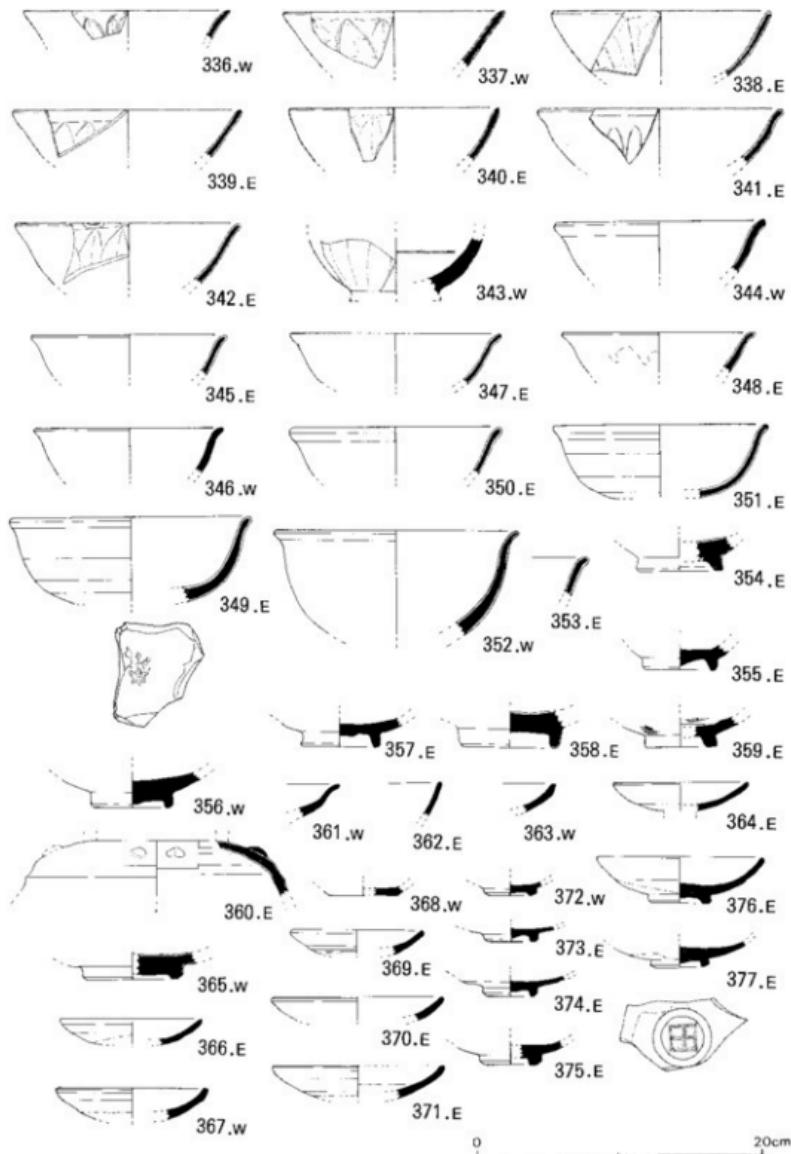
る。挽き手穴は方形である。芯穴の復元径は2.6cmを測る。溝間が密で7条以上の溝を有する。

鉄製品（401～404）

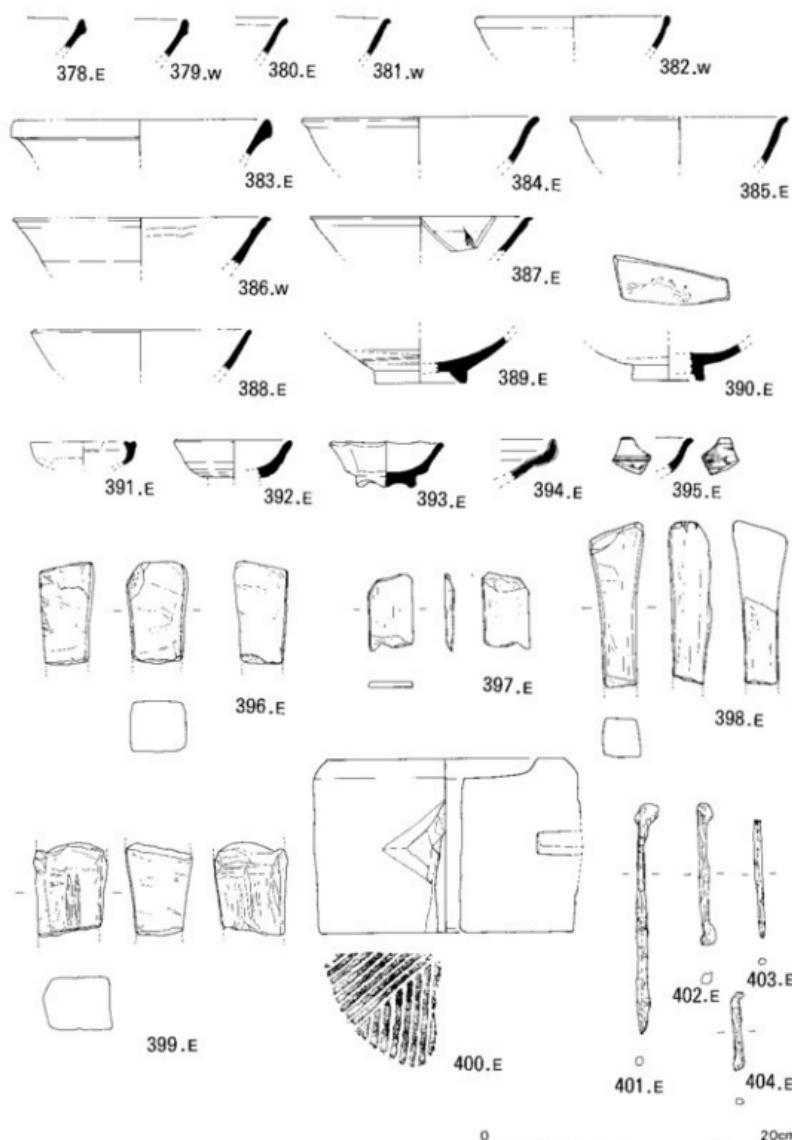
鉄釘と考えられるものが出土しており、403を除き上端部を折り曲げている。401の全長16.4cmを測る。403は上端部が欠損しており、402・404は下端部が欠損してくる。

土製品（405～466）

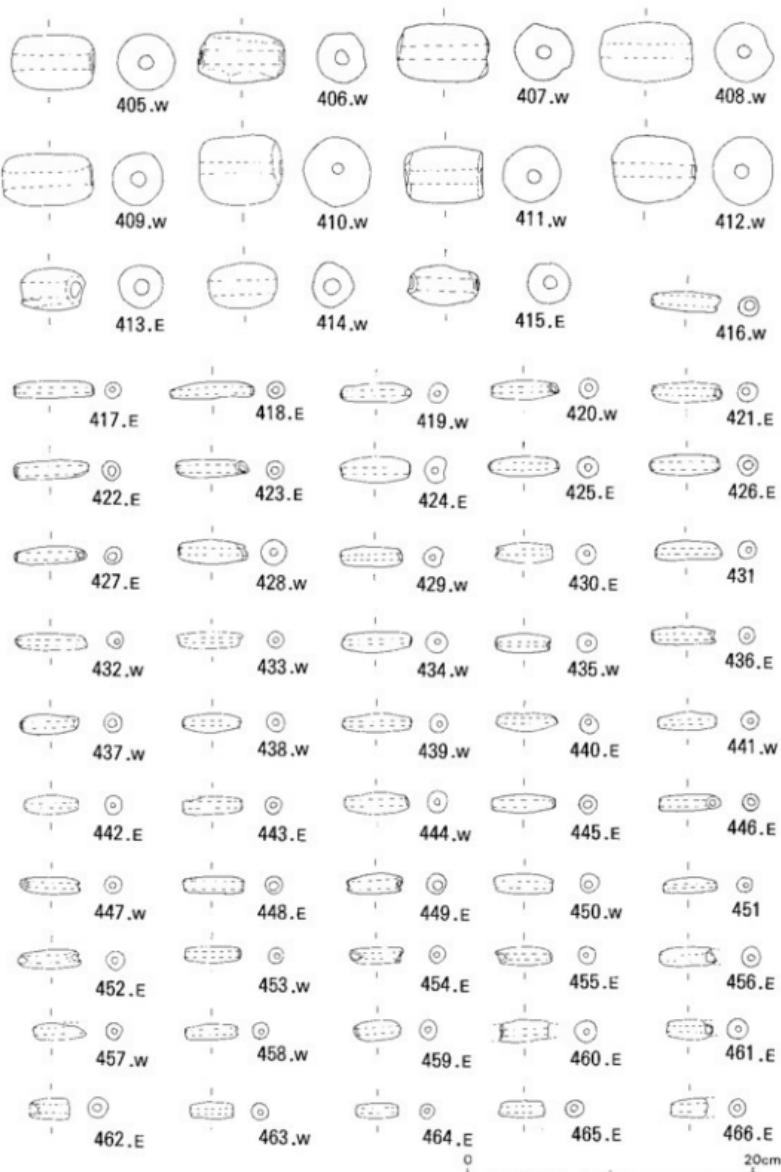
土鍤が多量に出土しており、全長が4～6cm、幅4～5cmを測る大形品のものと、全長4～5cm、幅1.2～1.3cm前後を測る小形品が存在する。大形品は、色調が灰白色を呈し硬質であるのに対し、小形品は浅黄橙色を呈するものが多数を占める。詳細は第4表、計測表を参照されたい。



第44図 包含層出土遺物（青磁・白磁）



第45図 包含層出土遺物（白磁・染付・石製品・鉄製品）



第46図 包含層出土遺物（土 縮）

第4表 土 縮 計 測 表

遺物番号	全長(cm)	直徑(cm)	孔深(cm)	重量(g)	調査区	遺物番号	全長(cm)	直徑(cm)	孔深(cm)	重量(g)	調査区
405	5.9	3.9	1.0	90.4	西区	436	4.5	1.2	0.4	4.8	東区
406	6.1	3.1	1.0	74.0	西区	437	4.2	1.3	0.6	5.4	西区
407	6.5	4.1	1.1	114.0	東区	438	4.1	1.4	0.4	6.5	西区
408	6.6	4.2	0.9	115.8	西区	439	4.8	1.3	0.3	6.3	西区
409	6.5	3.7	1.0	85.2	西区	440	4.2	1.3	0.4	5.4	東区
410	5.8	4.9	1.0	158.6	西区	441	4.1	1.3	0.4	5.5	西区
411	5.5	4.0	0.9	91.6	西区	442	3.9	1.4	0.4	4.8	東区
412	6.0	4.8	1.0	126.5	西区	443	4.1	1.2	0.5	4.3	東区
413	401	3.0	1.1	34.0	東区	444	4.5	1.5	0.4	7.2	西区
414	4.9	3.2	1.1	38.0	西区	445	4.4	1.3	0.6	3.0	東区
415	5.0	2.9	0.9	39.0	東区	446	4.3	1.2	0.6	3.0	東区
416	4.8	1.4	0.8	5.1	東区	447	4.2	1.2	0.4	5.0	西区
417	5.6	1.2	0.4	7.0	東区	448	4.3	1.2	0.7	2.6	東区
418	5.9	1.2	0.5	4.5	東区	449	3.9	1.5	0.7	4.5	東区
419	5.0	1.3	0.5	7.8	西区	450	4.1	1.4	2.5	7.3	西区
420	4.7	1.4	0.5	6.1	西区	451	3.8	1.1	0.3	2.5	東区
421	4.9	1.4	0.5	7.5	東区	452	4.4	1.3	0.5	5.9	東区
422	5.3	1.4	0.7	5.5	東区	453	4.8	1.1	0.4	3.9	西区
423	5.1	1.3	0.6	4.5	東区	454	3.8	1.2	0.4	4.1	東区
424	5.1	1.8	0.45	9.7	東区	455	4.0	1.3	0.3	5.1	東区
425	4.9	1.4	0.5	4.5	東区	556	4.0	1.4	0.4	5.2	東区
426	4.9	1.4	0.7	5.5	東区	457	3.8	1.2	0.4	2.5	東区
427	5.1	1.2	0.6	5.0	東区	458	1.1	1.1	0.3	3.8	西区
428	4.8	1.8	0.6	12.5	西区	559	3.3	1.4	0.4	5.1	東区
429	4.3	1.4	0.3	6.7	西区	460	3.4	1.6	0.4	8.1	東区
430	4.1	1.4	0.4	5.6	東区	461	3.3	1.4	0.4	4.5	東区
431	4.7	1.3	0.4	7.6	西区	462	2.9	1.5	0.6	4.5	東区
432	5.0	1.1	0.3	5.9	西区	463	3.0	1.2	0.4	3.2	西区
433	4.7	1.2	0.3	5.2	西区	464	3.0	1.1	0.3	3.0	東区
434	4.9	1.4	0.3	9.3	西区	465	3.2	1.2	0.5	3.7	東区
435	3.8	1.4	0.3	5.5	西区	466	2.6	1.3	0.4	3.1	東区

4. 考 察

(1) 遺 物

アゾノ遺跡で出土した遺物は、11世紀から15世紀後半に亘る長期間のものが含まれており、その大部分が包含層出土のものである。さらに造構の中で、各器種別で良好な共伴関係を把握できるものは少ない。かかる観点からすれば、資料的には各時期の土器様式を抽出でき得るものとは言い難い。しかし幡多地方において、当該期の資料は稀少であり、各器種における諸特徴は基礎資料として提示し位置づけておかなければならない。アゾノ遺跡は、時期的に古代末から中世にかけての遺物が出土しており、その中でも中世の遺物が量的に多い。古代末から中世にかけては、その境界を表現する場合何を指標とするか議論されているところであるが、本遺跡の資料はそこまで提示でき得るものではない。しかし、ここでは若干出土している当該期の遺物を田村遺跡群を始めとする県内の遺跡から出土した土器を通じ抽出することにより、問題点の提起をおこない、その後の中世土器については、搬入品及び在地製品の器形・手法による分析をすることにより、アゾノ遺跡で展開する中世土器の様相を捉えてみたい。

先述した包含層出土の遺物で、上師器供膳具において形態分類を試みた。ここでは各器種の形態分類に添っておおまかではあるが時期の抽出をおこなうこととする。皿A-I-a類は手づくねによる成形で、口縁部の特徴が「て」字状口縁を有するものである。皿A-II-b類も手づくねによる成形であるが、A-I-a類との差は大きく口縁部にそれをみることができる。これらA類は京都系上師器皿⁽¹⁾であり、県内においては初例であり稀少である。これらは京都製品の模倣であり、その時期を京都で見ると11世紀後半から12世紀前半におさまるものである。A-II-b類は、口縁に施される二段のナデが明顯に示められるものではないが、伊野氏の指摘するAタイプ集団の土器製作を模倣しているのではないだろうか。次に多く出土している皿B-II-a類を見るに至る。これらは、口径10cm前後、器高1.7~2.0cmを測り、底部はヘラ切りが施されるものである。風指遺跡で分類している小皿のI類の系譜を引くものと考えられる。さらに酷似するものとして、香我美町十万遺跡S D 2出土の皿や、愛媛県古照遺跡2区S E 04出土の皿があげられる。いずれも10世紀後半から11世紀前半頃におくことができるものである。皿B-II-b類は、底部ヘラ切りでありB-II-a類と比べるとやや口径が大きい。国術の南屋敷地区の調査でP 6から酷似するものが出土しており、B-II-a類とほぼ同時期に捉えてよいものではないだろうか。B-I-a、B-I-b、B-III-a類は、いずれも底部糸切りであり、B-I-c類もその範疇で考えてよいものである。これらは芳原城跡出土⁽²⁾の小皿タイプと同じものも出土しており、15世紀の所産と考えてよいものであろう。

杯類は、129の小杯が存在するが、この小杯の出現は田村遺跡群の編年でも15世紀中頃から後半頃出現してくるものであり、同時期におさえることができる。その他は杯であるが、底部破片が多く、全体の形態を通して考察することができない。しかし、底径でみると大きくA-I類とA-II類に分類することができた。15世紀後半から16世紀にかけて、口径に対する底径差が縮

小してきているという点を先に指摘してきたところであるが、その後十万遺跡の S K11・S D 1 の資料を用いた分析でも同様な見解を示している。これらの成果を援用すれば、A-II類が古く、A-I類を新しく位置づけることができる。さらにB群の杯に関しては、後述することにする。

椀は、杯同様底部片が多く、高台部のみで分類をおこなった。高知県では、在地産の椀の出現が中世土器成立にかかわる大きな視点になるのでないだろうか。既に瀬戸内地方で認められる、岡山・広島地域の吉備系土師器椀や、山口・北九州地域の防長系土師器椀との関連で高知県出土の椀を考えいかなければならない。アゾノ遺跡では良好な椀が出土していないが、国衙の松ノ下地区P 4 でみられるように、回転糸切り底に高台を貼付するものが認められ、それに類似するものが多く、県内の土師器椀を概観すると広義の防長系に入いる。本遺跡の椀A群もそれに位置づけられるものと考えられる。防長系土師器椀の出現は、11世紀後半頃と考えられており、吉備系土師器椀も、岡山県鹿田遺跡出土資料の分析で11世紀後半頃出現すると考えられている。アゾノ遺跡椀A-I・II類に酷似するものが、曾我遺跡 S K 5 から出土している。S K 5 は、白磁II-I類を伴なっていることから11世紀中頃から12世紀前半頃とおおまかに年代をおさえることができる。次に椀B群についてみてみる。杯B群としたものも椀としてとらえなければならぬかもしれない。B群の円盤状高台を有するものあり、土師器のみでなく須恵器(252)も存在する。底部破片であるため、ここでは同タイプの出土している田村遺跡群L o c 14のS K31を挙げることにする。S K31はヘラ切りの土師器杯、B群の土師器、須恵器椀、浜津型の釜、底部糸切りの須恵器皿が出土している。須恵器椀は、西播磨地方の縁ヶ丘麻塚群からの搬入品と考えられる。須恵器椀の底部は回転糸切りであり、相生窯址群の製品とすれば第3段階以降のものと判断できる。詳細な検討は、ここではでき得ないが、大きく捉えて縁ヶ丘落矢谷2・4号窯と、1・3号窯の中で考えてよいものである。窯跡の考察では、10世紀の中頃から、12世紀前半頃までと捉えられており、高知にもその時期に搬入されたものであろう。さらにS K31からは、B群の底部回転糸切りの土師器椀が出土している。いわゆる須恵器椀を模倣したように酷似するものである。B群土師器椀で底部に静止糸切りが観察できるものとして十万遺跡のS D 2 の資料が挙げられる。S D 2 の資料は田村遺跡群のS K31より先行するものと考えられるが、いざれにしても須恵器椀を模倣してB群の土師器椀は製作されている。高知県において10世紀後半から11世紀にかけては、播磨系の須恵器椀を模倣した時期として設定できるのではないかと考える。模倣した時期を遺構別にとらえると、十万遺跡 S D 2 →田村遺跡群 L o c 14 S K31→曾我遺跡 S K 5 となる。曾我遺跡 S K 5 になると明確な円盤状高台が消滅していき、A群の土師器椀が出現していく。この時期は、11世紀中頃から12世紀前半頃と見てよいであろう。かかる観点からすれば、在地産のA群の土師器椀の出現は、吉備系・防長系と時を同じくするのである。供膳形態における須恵器の撤退、杯・皿にみられるヘラ切りから糸切りの変化、椀の広範な成立など、この時期は、高知においても中世的土器様式の確立

過程の中で捉えてよいものである。古代末から中世にかけての土器様相は、簡単にふれることはできないが、ここでは模倣形態の土師器椀がその後の在地土器に影響を与えていたのでないかという点を問題提起しておきたい。

在地産の供膳具について述べてきたが、次に搬入品を中心に考察を加えることにする。今回の調査で瓦器椀が多量とは言えないにしても、県内の他遺跡と比較すると目立って出土している。その大半が和泉型であり、楠葉型と考えられるものは、34と78の2点のみである。和泉型は尾上編年でIII-3からIV-2の段階である。この時期に瓦器椀・皿が供膳形態の一画を占めるわけであるが、それまで供膳形態の中で中心的役割を果たしていた土師器椀A群が消滅に向かうことになるのである。高知平野では、形骸化した高台を有する土師器椀が、十万遺跡³⁵ S K11から出土している。瓦器椀が比較的多く搬入されてくる時期は13世紀に入ってからである。また高知平野と比べれば、アゾノ遺跡の瓦器出土量は多い。以上の点から推察すれば、瓦器の搬入経路についても考えていかねばならぬ示唆的である。

次に国外からの搬入品を見ると、中国製陶磁器が多量受容されており、瓦器とともに13世紀以降さらに供膳形態の構成が多様になっている。青磁は、同安窯系の皿とその他に龍泉窯系と考えられる。同安窯系皿は、I-2類³⁶、I-1-b類³⁷が出土しており、龍泉窯系椀は、I-4-a類³⁸、I-2-b類³⁹、I-5-b類⁴⁰が存在する。これらの製品は、12世紀中葉から13世紀中葉頃に盛行した陶磁器類であり、その他を見ると、皿・椀共に内外面無文で口縁部が外反するタイプのもので14~15世紀⁴¹の所産と考えられるものが出土している。白磁では、口禿の皿IX-2類⁴²、椀のIX類⁴³が出土している。その382の椀II類、383のVI類もみられる。386はVII類⁴⁴、387はV-4-b類⁴⁵である。その他の製品は376・377にみられるようなタイプに統一できる。377は「田」を朱書きしているが、墨書きで同様な製品が芳原城跡⁴⁶でもみられる。376・377のタイプは、15世紀を中心に出現してくるものであるが、芳原城跡の例をとれば、15世紀後半頃まで残ってくるのではないかと考えられる。その他では、1点のみ染付皿が出土している。これらのことから、輸入陶磁器では、13世紀と15世紀に主流を認めることができ、15世紀後半頃の染付搬入時にこの集落が廃絶されていることを想起させる。

供膳形態を中心に見てきたが、次に煮沸形態、調理形態、貯藏形態を概観する。煮沸形態では土師器、瓦質土器の鍋・釜が存在する。189~192は、在地産の土師器鍋である。肩部に突帯を有し、側部外面に斜位のタタキが施されるものである。姫路市の加茂遺跡⁴⁷タイプの鍋である。高知県では15世紀後半頃の中世城館から頻繁に出土しているものであり、四国では、徳島⁴⁸から出土しているが愛媛では出土例を知らない。当時瀬戸内海は応仁の乱後大内氏が制するところであり、これに対抗する細川氏は堺から四国沖を通る南海路を利用したことを『大乘院寺社雜事記』に見ることができる。これらの製品は、畿内からの搬入品を模倣して在地で頻繁に製作されたと考えることもできる。193から196は、搬入品土師器釜で、193・194が和泉D₁型⁴⁹か河内D₁型に属する。195がB₁ d型に酷似する。これらの搬入された時期は13~14世紀である。

208の摺津型の釜は1点のみである。瓦質土器は、搬入品として212・213があげられるが、両者共に和泉D・河内J型の範疇で考えてよい。在地のものとしては、202～206、214～218の釜・鍋があげられる。202～205の釜は三足になるものと思われる。214・216～218のタイプは、三足に続き出現してくるものであり、15世紀にその中心をおくことができる。以上のことから、アゾノ遺跡の煮沸形態は、大きく捉えて、13～14世紀は、搬入品がその多くを占め、15世紀には在地の製品が占めてくることになる。

調理形態は、東播系須恵器、備前、瀬戸・美濃系陶器がみられる。東播系須恵器は、Ⅲ期からⅥ期に亘るものが出土しており、12世紀中葉から14世紀前半頃までの時期を考えることができる。この時期の調理具は、東播系の製品のみである。備前窯は、Ⅲ・B期からⅥ期のものが中心であり、スムーズに東播系の製品から備前焼に移行していることが窺い知れる。卸し皿のように小形製品は、瀬戸・美濃系が若干はあるか搬入している。

貯蔵形態は、219の瓦質土器甕が存在するが、これは堺近郊で生産されたものであり、畿内では瓦器甕とも呼称されている。搬入された時期は14世紀後半から15世紀前半頃であろう。²⁰その他は時期的に古い須恵器、備前Ⅲ・Ⅳ期の甕・壺がみられる。配石遺構から出土した113の甕は产地不明であるが、ナデ・ハケ調整を多用する手法から14世紀後半から15世紀前半頃に位置づけられるものではないかと考える。須恵器の甕は細片で詳細は不明であるが、271のように外面矢羽根状のタタキが施されるものが出土しており、14世紀中頃までは須恵器製品が主流を占めていたと考えられる。

以上出土遺物について概観してきたが、各形態の大きな流れは捉えることができたと思う。

(2) 遺構

西区で検出された遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑42基、溝2条、ピット群である。掘立柱建物跡は、棟軸方向が一致しているSB1・SB2・SB3が同時期になると考えられる。その後SB4・SB6に移行する。SB1～3の周間に集中してピット群が存在していることから考えても、建物の中心は明確である。その周囲には、土坑が散在しており、SD1で建物の南側沿って存在する溝は、西側に向って延びており、屋敷地の境を意味するものではなく、排水溝的な役割を果たすものと考えられる。調査区の南側及び北側にかけては、遺構が存在せず、北側にかけては包含層すら確認できない。東区に位置する屋敷跡とは明確に区別でき得るものである。

東区で検出された遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑1基、配石遺構1基、ピット群である。掘立柱建物跡の棟軸方向から考えると、SB7・8が同時期として捉えられ、その後SB9・10・11・12が考えられる。SB9とSB10にも時期差を認めることができ、このどちらかの建物にSB11・12が付属するものと考えられる。土坑43は、SB7・8に付属するものであろう。かかる状況は西区のSB4・6の関係にもみられる。出土遺物から建物の存続年代

を考えれば、西区のSB1から5の東播系須恵器が出土しており、その編年を援用すれば、VI期にあたり13世紀後葉から14世紀前半頃に比定できよう。SB4では8の瓦器皿が出土しており、底部から口縁部にかけて丸みを有する形態になり、14世紀初頭から14世紀前葉の時期をあてることができる。西区においては、明確な時期差は認められない。東区においては、SB7から同安窯系の皿が出土しており、SB9から高台部の形骸化した10・11の瓦器碗、さらにSB11からIV期の備前檍鉢が出土している。これらの出土遺物からSB7・8は13世紀、SB9は13世紀後半から14世紀前葉と考えることができる。東区での建物跡の変遷は、SB7・8→SB9・11→SB10・12となる。東西両区の建物を比較検討すれば、まず東区のSB7・8が出現し、西区のSB1・2・3となり、SB4・5が東区のSB9・11と同時期で、その後SB10・12と考えることができる。また、出土遺物中、輸入陶磁器に目を向ければ、包含層中で同安窯系の出土している地点は東区のみであり、碗で錦運舟文を有するものなど、その多くは東区出土である。また15世紀段階では、瀬戸・美濃系陶器で天目茶碗、茶臼や青磁・白磁等はすべて東区出土と言ってよい。アゾノ遺跡の集落構成を考える場合、その中心は、東区に存在すると見えるであろう。また集落の最盛期は、13世紀後葉から14世紀前葉と考えられ、その時点では西区にも、建物が拡張され屋敷地として構成されたと想起できる。アゾノ遺跡集落の終末は、15世紀後半頃と推定することができる。廃絶された要因は、付編2で詳細を述べることにするが、1498年の南海地震による影響が大きく関与しているものと想定できる。アゾノ集落の性格を考えていく上では、政治的・社会的背景の中で階層的な面を含め考察していかなければならない。同時期の田村遺跡群、十万遺跡の集落を見ると大きな溝に囲まれており、建物数及び集落全体の規模に関して大きな差異を認めることができる。これらのことから当集落は、規模・立地や遺物中に土鍤が多量に出土している点などから勘案して、直接生産に携わった漁村的な性格を持った集落であることが想定できる。

註

- (1) 「第6回中世土器研究集会討論記録」『中世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中近世土器研究会 1988・11
- (2) 百瀬正臣・樋本久和「中世土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナル』12、1988で指摘されている。いわゆる「手づくね皿」を模倣して在地で生産されたものを指す。
- (3) a : 伊野近富他「平安京跡左京(内膳町) 昭和54年度発掘調査概要」「埋蔵文化財充提調査概報」1983-3 京都府教育委員会1980
b : 宇野隆大「土器と陶磁器の種類」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ -白川北殿北辺の調査-』京都大学埋蔵文化財調査センター 1981
- (4) 伊野近富「かわらけ考」「京都府埋蔵文化財調査研究センター」1987
- (5) 高橋博明・出原恵三・古原達生「十万遺跡発掘調査報告書」香我美町教育委員会 1988
- (6) 中野良一「愛媛県における古代末から中世の土器様相」「中世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中近世土器研究会 1988・11

- (7) 森田尚宏『土佐国衙跡発掘調査報告書』第7集 南国市教育委員会 1987・3
- (8) 宅間一之・出原恵一『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984
- (9) 松田直則『中～近世小結』『丹村遺跡群』第10分冊 高知県教育委員会 1986
- (10) "『高知県における中世土器の様相』『中近世土器の基礎研究』III 1987・12
- (11) 訳5と同じ
- (12) 百瀬正臣・橋本久和『中世平安京の土器様相と各地への展開』『考古学ジャーナル』12
299 ニュー・サイエンス社 1988
- (13) 訳7と同じ
- (14) 鈴木康之『鹿田遺跡出土の中世土器について』『鹿田遺跡』I 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (15) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989
- (16) 森田勉・横田賢次郎『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978
- (17) 下村公彦『I. o c 14』『田村遺跡群』第7分冊 高知県教育委員会 1986
- (18) 丘麻教育委員会『相生市・妹ヶ丘窯址群』1987
- (19) 訳5と同じ
- (20) 尾上実『南河内の瓦器概』『古文化論叢』1983
- (21) 訳5と同じ
- (22) 訳16と同じ
- (23) 上田秀夫『14～16世紀の青磁焼の分類』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- (24) 訳8と同じ
- (25) 姫路市教育委員会『加茂遺跡』『姫路市文化財調査報告』V 1975
- (26) 中島田遺跡で同タイプの鍋が出上していることを徳島県教育委員会船家清司氏より御教示を得た。
- (27) 菅原正明『畿内における土盃の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1982
- (28) 安野繁春『西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年』『沿岸考古学会誌』3 福井考古学会 1985・3
- (29) 関根忠彦・菅原正明『備前燒研究ノート(1)～(3)』『倉敷考古館研究集報』1・2・5 倉敷考古館 1966・1967、さらに同研究集報18号で、III・B期で和歌山県長寿寺から出土した人頭に巣穴5年(1342年)の刻銘があることを報告されており、III期後半の正確な年代をうかがっている。
- (30) 菅原正明『畿内における中世土器の生産と流通』『古文化論叢』1983
- (31) 宇野隆夫『後半期の須恵器』『史林』67-6 史学研究会 1984 においても14世紀後半の窯の資料として胴部外側に細かい綾形状の平行タキを施すものを挙げている。アゾノ遺跡はこの時期以降、東播系の体及び須恵器の窯に代って備前焼が出現してくると考える。
- (32) 訳28と同じ

付 編

1. 南海地震とアゾノ遺跡の地震跡 寒川 旭
2. 噴砂発見と地震の発生時期について 松田直則

付 編 1

南海地震とアゾノ遺跡の地震跡

通商産業省工業技術院地質調査所 近畿・中部地域地質センター

主任研究官 寒川 旭

1. 南海地震とアゾノ遺跡の地震跡

寒川 旭

(1) 南海地震

1946年（昭21）年12月21日04時19分に発生した南海地震は紀伊半島沖に震源をもつ巨大地震（地震規模M：8.0）で、高知県に著しい被害をもたらせた。最も被害の著しかった高知県中村町では、全世帯数2,177で全壊家屋2,421、半壊773、全焼62、死者273人、負傷者3,358人に及ぶ大惨事となった。また、四万十川にかかる鉄橋9スパンのうち6スパンが落ちている。

西日本の太平洋側には海底が著しく深くなっているゾーン（南海トラフ）が東北東—西南西方向にのびている。プレートテクトニクス理論によると、この位置で、海の地殻（フィリピン海プレート）が陸の地殻の下へ沈み込んでおり、この運動に伴う地殻の歪が大きくなると、プレートの境界で大規模な破碎が生じて巨大地震が発生する。これが南海地震の原理である。

昭和の南海地震によって大規模な津波が発生し、陸域でも顕著な地殻変動が生じた。この中で最も特徴的なものは、高知県東洋町甲浦～高知市～須崎市～中村市を結ぶゾーン（ヒンジラインと呼ばれている）が沈降して、その南側の地城が南ほど隆起量が大になる傾動運動を行ったことである。これに伴ってヒンジライン沿いの地域が水没するとともに、室戸半島や足摺半島が隆起してその後の人々の生活にも大きな影響を与えていた。

(2) 南海地震の歴史

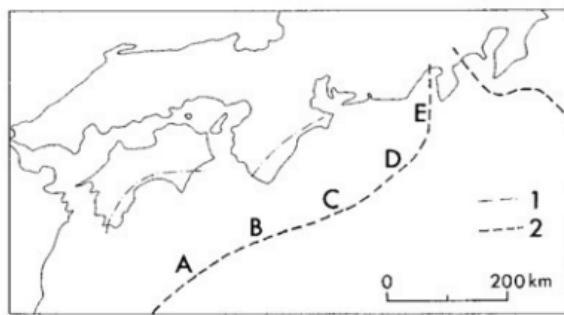
南海地震は地球的な規模での地殻運動に伴う現象である。そして、震源域の南海トラフで、ほぼ連続的に地殻の歪が蓄積され、それがある限界に達するたびに破壊がおこり南海地震がくり返し発生してきたものと考えられる。

過去の地震に関する被害の記録から、南海地震と考えられる数多くの地震の存在が推定できる。⁽²⁾被害の記録が特に豊富で地震の存在が確実視されるものは1854（安政元）年および1707（宝永4）年の南海地震で、共にM 8.4程度の、我が国でも最大級の地震規模が推定されている。

前者は、地元では「寅の大変」と称され、中村市の「木戸助八文書」などに被害の様子が詳しく記載されている。また、中村市に残る言い伝えとして、「中ノ丁より出火して京町付近まで燃え広がったが、京町内の鹿野岸の井戸から著しく水が噴き出して火を消し止めた（京町焼）」などの話が残っている。

後者は「亥の大変」と称され、『南路志』『宮崎文書』『幡多探古資料』などに中村市の被害状況がくわしく記されている。また『広恵簿』には「宝永四丁亥十月初四日、未之上刻大地震。予の家の戸は自ら離れ、障子の骨も折れる。地の開く所（亀裂）多く」と地面に多くの裂け目が生じた事が記されている。

両地震とも、著しい津波の被害が発生し、ヒンジライン地域が沈降して、その南に位置する室戸岬などが隆起するような、1946年の南海地震と類似の地変が生じている。さらに、規模において両地震は1946年の場合をはるかに上回っている。また、前述のように、地割れ・液状化



A	B	C	D	E
1946		1944		
1854		1854		
1707		1707		
1605		1605		
		1498		
1361				
1099		1096		
887				
684				

第47図 南海地震および東海地震の発生時期

1 ヒンジライン

2 トラフ

などの発生を示す記述もみられる。

さらに、地震史料より、1605（慶長9）年、1361（正平16）年、1096（康和元）年、887（仁和3）年、684（天武13）年にも同様な地震が発生したものと考えられる。特に684年の「白原地震」では『日本書紀』に「土佐国田苑五十余方頃、没為海」と記されており、「黒田郡の水没伝承」との関係が注目されている。この地震における水没も南海地震特有のヒンジライン地域の沈降と考えれば、このような水没現象は684年のみならず、他の時期の南海地震にも共通な地殻変動の「癖」と考えられる。

（3）南海地震に関する2つの問題点

第47図は南海トラフで発生した巨大地震の時期と震源域（破壊が生じて地震が発生した領域）を示したものである。南海地震はA・Bの領域で生じる。又、東海地震と呼ばれる巨大地震はC～Eの領域で発生する。

1944年12月7日には東海地震の領域で東南海地震（M7.9）が生じ、その2年後の1946年12月21日に南海地震が発生した。1854年12月23日には安政東海地震が（M8.4）が生じ、翌日、安政南海地震が発生した。1707年10月28日（宝永地震）には東海地震と南海地震が同時に発生した。1605年2月3日にも両地震が同時に発生した。

このように、江戸時代以降では、東海地震と南海地震が100～150年の間隔ではほぼ同時に発生する傾向が認められる。しかし、それ以前では、南海地震の発生間隔も100～150年の約2倍になっている。また、1096年の東海地震と1099年の南海地震を除いて、両地震がほぼ同時に発生した例は認められなくなっている。

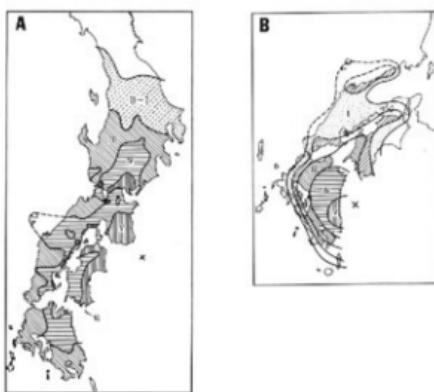
このような現象について次の2つの解釈が可能である。①南海地震と東海地震が江戸時代以降になって100～150年の周期でほぼ同時に発生するようになった。②江戸時代以降のような特徴がそれ以前の時代にも当たるのだが時代が逆上るにつれて地震史料も乏しくなり、いくつかの地震についてその存在が見逃されている。このいずれかについて結論を出し、両地震の特性について考察することが第1の問題点である。

1946年より前の南海地震については、古文書の記述から被害・地変を推定するのみで、他の物的証拠は極めて少ない。このため、具体的に地震の際に人々の生活している地面でどのような現象が起きて、それがどのように被害に結びついたかについての考察が行い難い。しかし、将来の地震被害の対策を考える上では、地表面付近で発生する地質現象をいかにして把握するかが必須の要件（第2の問題点）である。

（4）地震考古学の概要とその意義

地震考古学は1988年5月に提唱されたばかりの新しい研究分野で、遺跡で検出された地震跡を総合的に研究することを目的とする。

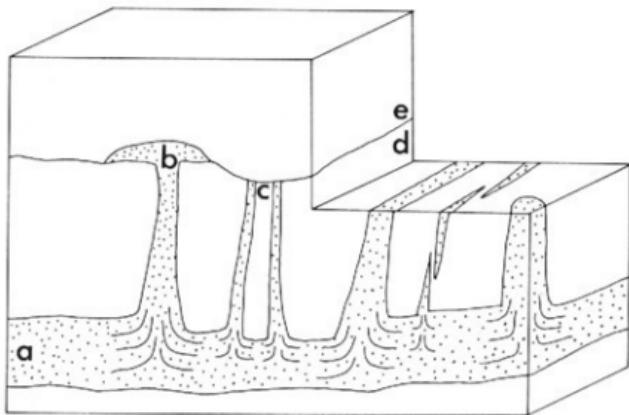
主な研究対象として、遺跡で認められる断層・液状化・建造物の倒壊などの痕跡、地震による古墳の変形、地震時の地殻変動に帰因する水没遺構があげられる。これらの中でも、高知県下



第48図 高知県下に被害をもたらせた地震の震度分布
(気象庁による: 宇佐美 1987より)

A 1946年の南海地震

B 1968年の日向灘地震



第49図 液状化跡の模式図

において最も多く検出される可能性の強い液状化跡について第49図に模式的に示した。

液状化現象は、地表面下の比較的浅い位置に地下水で飽和したゆる詰まりの砂または砂礫層が堆積し、それを粘土などの水を通じ難く「蓋」の役割をする堆積物が覆っている状態で発生する。急激な地震動が加わると、すき間の多い砂粒は粒子間のすき間にどんどん落ちて行くような運動を行い、砂層全体が収縮するような形になる。その折に、粒子間が水で飽和された状態だと、急な収縮によって圧縮された水の反撃力によって間隔水圧が急激に高まる。この状態で上部に蓋をする堆積物があると、これを引き裂いて砂・水が一体になって地表面へ噴き出す。これが液状化に伴う噴砂現象で、激しい地震動に伴って震源域周辺の沖積地盤に多く発生する。

第49図のaが液状化層で、bが地表へ向って噴き上った噴砂である。地震当時の地表面上にはbのように下から噴き上った砂の塊や地表に広がった砂の層が見られたはずである。しかしその後の浸食などでこれらが失われてしまった例も多く、その場合はcのような形で検出される。この図の場合、dの層が堆積した後に地震が発生し、その後にeの層が堆積している。このためdとeの年代が考古学的に把握できると、地震の年代もdとeの間に限定できる。

液状化現象は、気象庁の震度階級で震度V以上の地震動によって発生すると考えられている。高知県下の大部分の地域において、歴史上の地震も含めて、液状化が発生するような強い地震動を与える地震は南海地震にはば限られる。南海地震以外の地震で高知県下に被害を与えたものとして代表的な1968年日向灘地震においても、県下の震度はIII以下と考えられている(第48図)。このため、第49図に示したような液状化跡が検出された場合、いずれかの時期の南海地震によって生じた可能性が強い。

遺跡で液状化などの地震の痕跡が発見されると、地震の時期が限定されると共に、地震時の地表面下の地層の動きが平面的、断面的に観察できる。このような理由より、地震考古学の研究は前節で示した2つの問題点の解明に極めて有効である。

(5) アゾノ遺跡の地震跡

アゾノ遺跡において地震の液状化跡が検出された。これは、地震当時に地表面下2m前後に堆積していた細粒砂層が液状化して地表面に噴き出したもので、第49図でもとして図示したような地表面に噴出した砂も観察できる。

噴砂は、15世紀初め頃の遺構を引き裂いている。さらに、地震時の地表面へ噴出したと考えられる砂が14世紀から15世紀にかけての遺物包含層を直接被覆している。このため、液状化をもたらせた地震の時期は15世紀末頃と考えられる。さらに、地震後の地層に遺物が含まれなくなることより、地震を境にして人々がこの地に住まなくなったことが推定される。

第47図で15世紀末頃の南海地震の存在は不確かであるが、丁度、該当する時期である1498年に東海地震が確実に発生している。この地震は四国において地震被害の記録は見当らないものの和歌山市に津波が発生し、和歌山県の湯の峰温泉の涌出が停止するなどの南海地震特有の現象の記述があり、東海地震と南海地震が同時に発生した可能性もあると考えられている。⁽⁷⁾

アゾノ遺跡で検出された噴砂は、考古学的に推定される地震の年代と調和することより、1498年の南海地震によって発生した可能性が強い。さらに、今後の発掘調査などで1498年の南海地震の存在を裏付ける資料がさらに加わると、1498年にもやはり東海地震と南海地震が同時に発生したとの解釈がなされるようになり、前述の第1の問題点を解く重要な鍵となりうる。

当遺跡内では、さらに、上述の噴砂よりやや新しい時期と考えられる噴砂も検出されている。これは無遺物層中に噴き出しており、時期の限定は難かしい。しかし、1498年の可能性のある噴砂よりやや上位の地層中で広がっているのでさらに新しい時期の地震によるものと考えられる。この噴砂も南海地震に起因すると考えると、1605年・1707年又は1854年に発生したものと考えられる。今後、この地域の発掘調査によって層位が明らかになれば、これらの中の一つの地震に特定できる可能性がある。^{註6}

世界的に考えても、プレート境界の巨大地震に伴う過去の液状化の跡が検出され、その時代もほぼ限定された例はこれまでほとんど報告されていない。この意味でも、アゾノ遺跡での液状化跡の発見には大きな意義がある。

高知県は南海トラフに向い合っており、過去の歴史を考える上でも、将来の生活を考える上でも、南海地震の存在を考慮に入れる必要がある。そして、将来の南海地震の時期・被害の予測において、上述の2つの問題点が重要になる。この問題を検討する上で、遺跡の発掘調査が重要な役割をなしている。「遺跡で地震の跡を研究する」これは、極めて新しいテーマであるが、高知県では必須の研究課題であり、その成果に対する期待は大きい。

註

- (1) 吉川虎雄・貝塚寛平・太田陽子（1964）土佐湾北東岸の海岸段丘と地殻変動、地理学評論37: 627-648・吉川虎雄(1968)西南日本外帯の地形と地盤性地殻変動、第四紀研究7: 157-1704:ヒンジラインの説明がある。
- (2) 文部省震災予防評議会編(1941)増訂・大日本地図史料 第1~3巻;鳩鳳社、東京大学地震研究所編(1981~88)『新収・日本地震史料 第1~5巻』、宇佐美龍夫(1987)『新編日本抜粋地図総覧』東京大学出版社に地震被害史料が朱記されている。
- (3) 中村市史編纂委員会(1984)『中村市史 総編』による。
- (4) Ishibashi,k.(1981)Specification of a Soon-to-Occur Seismic Faulting in the Tokai District,Central Japan, Based upon Seismotectonics,Earthquake Prediction;An International Review, Maurice Ewing Series 4,AGV, Washington,D.C.297-332などにもとづく。
- (5) 寒川 勝(1988)考古学的研究対象に認められる地震の痕跡 古代学研究 116: 1~16、寒川 勝(1988)地震考古学の提唱 文化財科学学会報 16: 19~26、寒川 勝(1989)地震考古学事始 歴史手帖 17: 3: 4~10、名著出版、などに概要が示してある。
- (6) アゾノ遺跡の地殻跡について付録2にくわしい説明を行っている。
- (7) 宇佐美(1987)前掲、などに述べられている。
- (8) アゾノ遺跡の例のように、遺跡発掘現場で地殻跡が次々に検出されるようになると、これまで古文書によってのみ知り得た地震の存在が確実になり、古文書が残っていないために見逃されていた地震を発見することも多くなる。

2. 噴砂発見と地震の発生時期について

松田直則

(1) 噴砂発見に至る経緯

高知県は、地震大国と言われ、昭和21年の南海地震では、中村市を中心に大きな被害を被った。このような巨大地震による痕跡が今までの発掘調査の中で発見されていたはずであるが、残念ながら、調査者の地表考古学に対する関心度が薄く地震跡を確認できないまま現在に至った状況である。今回の発見以前に四国において明瞭に地震跡と確認された遺跡として愛媛県伊予三島市に所在する丸山II遺跡⁽¹⁾があげられる。丸山II遺跡は、中央構造線活断層系に近接した位置で、弥生時代中期の第3号住居址が食い違いをおこしている。地震の発生時期は、もちろん弥生中期以後である。その後の発見としては、今回のアゾノ遺跡があげられる。高知県は南海地震による被害が多く、伝承等が数多く残っており、その中でも黒田郡が過去の地震によって海底に沈んだという伝承が、南国市・須崎市・中土佐町・大方町・中村市・大月町の地元に言い伝えられている。この高知県に地震考古学を提唱された寒川氏が注目し、昨年から度数来高されて地震関係の資料を収集された。大月町柏島沖に沈む石堤もその一つで、自然のものか人工のものかを判断するために、県内では初の水中考古学の調査も実施された。このように寒川氏による精力的な調査・研究に刺激され今回の噴砂発見に至ったのである。

(2) 地震跡の調査と噴砂発見時期（第50～53図）

噴砂は、アゾノ遺跡の東区北東部において検出した。第II層の淡茶褐色シルト層を除去し、包含層の第III層を調査している段階で中筋川の流路に沿って、幅3～7cm、長さ1～5mの規模でN78°Eの方向に砂が噴き出している状況を検出した（第50図）。しかしこの段階で地震による噴砂であるかどうかの判断は困難であり、下に砂層があるかどうか、また表面で観察できる砂の割れ目が下層まで続いているかどうかを確認するため、地震調査用のトレントを設けることにした。まず噴き出している砂の割れ目を手で平面実測を実施し、写真撮影後、砂の割れ目の密集部分を選定しトレントの掘削に入った。第III層をやや掘り下げた段階で配石遺構を検出したが、この配石遺構も噴砂によって切られしており、噴砂に沿って2～3cmの段差が生じていた。この配石遺構は、河原石と須恵器破片を敷きつめて構築されており、噴砂の年代を知るうえでも良好な資料に遭遇したわけである。配石遺構を避けてさらに下層に掘り進むと、第IV層の淡黄色粘質土、第V層の青灰色粘質土が厚く堆積しており、第IV層まで明確に把握できた噴砂が第V層になると不明瞭になり始めた。噴砂の砂とV層が同色である点、さらにV層の下部になると粘性に砂が混じるようになることともあって、完全にVI層の青灰色砂質土中に噴きあげを確認したのは1・2条だけであった。さらに噴砂検出面から1.9m掘り下げた地点で噴出源の砂層を確認した。しかし下層にいくほど噴砂の幅が狭くなり、不明瞭な部分もあったため、この調査の段階で、寒川氏に米高していただき、現地で噴砂であることを確認していただいた。

噴砂がこの遺跡内で発生していることは明確になったが、発生した時期が問題となる。南海地震は、過去9回発生していることを史料によって判断することができる。(第5表)。その中でも1361(正平16年)、1498(明応7年)の資料が不足しており、南海地震層説の議論的となっていたが、今回の発見はその有力な物的証拠となり得る。まず噴砂発生時期の上限を考えていくこととする。地震用のトレンチで、検出した配石遺構は、完全に噴砂によって切られている。のことから配石遺構構築後発生していることが明確である。配石遺構は、113の須恵器甕の生産及び廃棄された年代が鍵となる。この甕は、口縁部と底部が出土しており、胴上部が欠損している。口径30cm、復元器高57cmを測る大形品である。底部から屈曲し、外方に立ち上がり、胴上部に最大径を有するものと考えられる。張りの強い肩部から、頸部は短く上方に立ち上がり口縁部はやや肥厚し外反する形態である。口縁端部は丸くおさめる。内面には主に横方向のハケ調整が施され外面はナテ調整である。底部外面には指頭圧痕が残る。色調は灰色を呈し焼成は良好である。この須恵器甕は、県内でも類似した製品は出土しておらず、産地も不明である。調整の技法からすると14世紀後半から15世紀前半と推定できるが明確ではない。しかし、同破片が東区のP41から出土しており配石遺構の破片と接合できた。P41からは、106の青磁碗片が出土しており、他の遺物からしても共伴と考えることができる。この青磁は、内外面無文で口縁部が外反するタイプである。淡い青緑色釉が施され、内外面に貫入が入いる。この青磁碗は、上田編年でD類とされるものであり14世紀後半から15世紀前半に位置づけられるものである。調整技法の特徴からしても一致でき得る年代である。また第III層の包含層中であり、検出状況からしても妥当な線である。以上のことから考えれば1361年よりも新しい時期にこの配石遺構が構築されたことになる。

次に下限をさぐることとする。噴砂が発生している断面図(第23図)を参考すれば、第III層の上面に第II層の無遺物層が堆積している。噴砂発生面と、第II・III層との境は一致しており第III層の包含層が切れたところで噴砂が発生している。そして、包含層の終末の時期に噴砂発生を捉えることができる。包含層中の遺物を前章で詳しく述べたが、その終末は輸入陶磁器の染付が搬入される時点と判断できる。アゾノ遺跡では、1点のみ染付が出土している。また16世紀に頻繁に出土する細蓮弁の青磁碗等が出土していない。瀬戸・美濃系の天目茶碗も大窯期のものではないと考えられる。さらに東区東壁(第23図)の断面を見ると、第III層を切って第II層中で噴出している噴砂を確認できる。また北壁の西側においても第II層を切っている噴砂がある。これらのことから、3度に亘る噴砂の発生時期が想定できる。以上の点から、第III層上面で発生している噴砂は、1498(明応7年)の地震による可能性が強い。さらに第II層中で発生している噴砂は1605(慶長9年)か1707(宝永4年)に想定でき、第II層を切っている噴砂は、1854(安政元年)の可能性が強くなる。

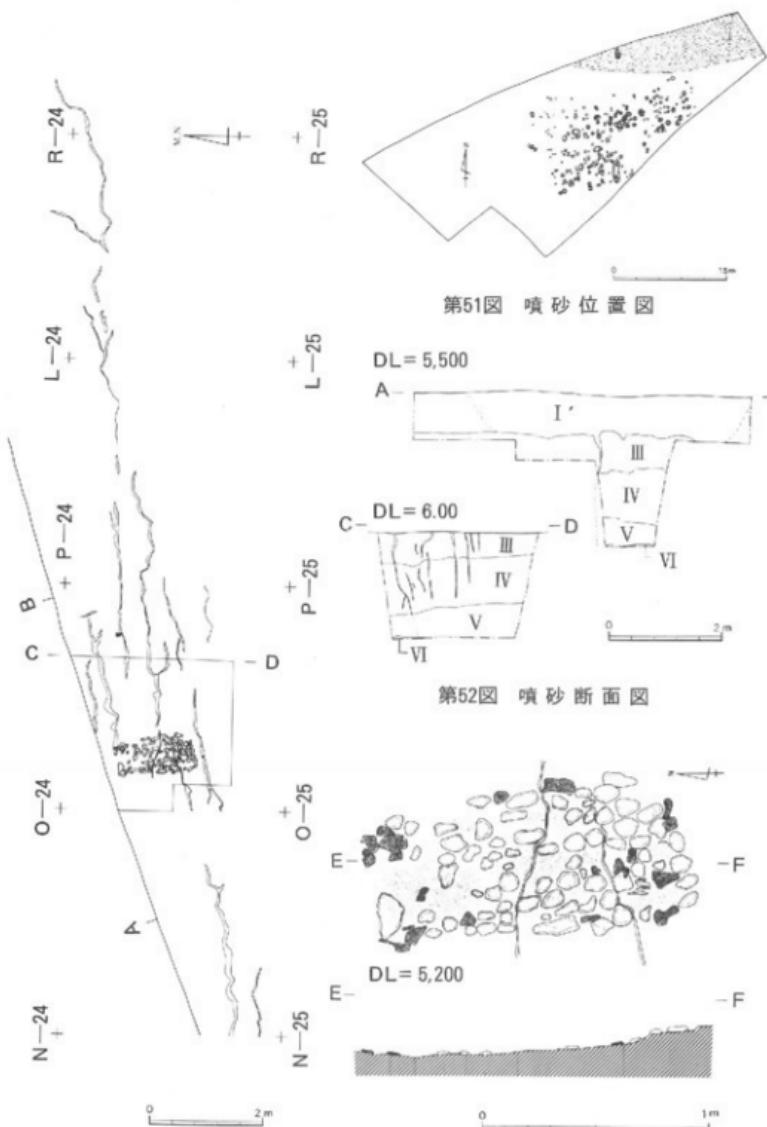
(3) アゾノ集落と地震

1498(明応2)年の地震は辰の刻に発生している。辰の刻は今の午前8時頃である。当時のアゾノ集落は、この地震によってどのような影響を受けたのか、さらに考古学的にどのような評価を与えることができるのか考えてみたい。1498年の地震で南海地震も同時に発生したと考える根拠になった資料に「大日本地震史料」中の和歌山県の記述があげられる。それによると「宮崎の田鶴原の館崩る、浦々へ浪入る、鐘樓堂崩る、諸國大地震、本宮御社崩れ、那智坊舍崩る」とある。当時の地震によって館が崩壊する程の被害があったことがわかる。昭和21年の(4)南海地震は地震規模がM8.0で、1498年の地震はM8.2~8.4である。昭和21年の地震でもわかるように特に中村市は、著しい被害を受けた。当時のアゾノ集落は、言うまでもなく掘立柱建跡であり、館が崩壊するほどの地震動を受けた場合、ほとんどが崩壊しても不思議ではない。辰の刻という時間帯もさらに拍車をかけ、火災を併発させたことが推定され、このことは第4層上面で炭化物が多くみられることからも言えるであろう。また東区の掘立柱建物跡から川に向って5~8mの地点で噴砂が発生しており、当時の人々はこれまで遭遇したことのない奇怪な自然現象を目のあたりにしたことであろう。これらのことから、当然集落を廃絶するようになんでも不自然ではない。出土遺物から考文すると、本集落は15世紀後半に終焉している。集落を廃絶する場合何らかの要因が考えられるが、アゾノ遺跡の場合は、1498年の地震によって廃絶しこの地に二度と集落を構成していないのである。これらのことから、考古学的に言えることは、出土遺物そのものが1498年より以前に生産使用されたものに限られることが明確になるわけであり、紀年銘の資料を得たと同様の評価を与えることになる。さらに1498年の地震は東海地震と併発したと考えられ、愛知県稲沢市尾張国府跡でもこの時期の噴砂が発見されている。(5)アゾノ遺跡と同様な資料を得ることができるならば、15世紀末から16世紀前半にかけての搬入品を明確に区別できることになる。今後土器編年を作成する上においても重要な視点を与えることになるものであろう。

四国では最近高松の市内においても噴砂が発見され、地震の痕跡が考古学的研究対象に組み入れられ発掘調査に生かされている。今回の噴砂の発見で、南海地震の1つとして、その発生年代を捉えることができたことは、尾張国府跡でも1498年の東海地震の可能性がある噴砂が確認されていることとあわせて寒川氏が提示しているところの第1の問題点に糸口を与えるものである。氏の提示している第2の問題点については、アゾノ集落廃棄という行為が地震によるものであることが今回の調査で明確となり、文献に記された歴史的事実を考古学的にも証明することができたのである。このように南海地震が1498年に発生したと考えうる物的証拠を提示できたことは、南海地震周期説にも影響を与える程の発見といえよう。周期説を検討するには、今後さらに資料の蓄積が必要である。また、当時の社会を復元する考古学においても地震考古学の援用がより必要とされるところである。

註

- (1) 愛媛県埋蔵文化財調査センター『四国縱貫自動車道岡谷埋蔵文化財調査報告書』
1984. 3
- (2) a. 寒川旭 「地震考古学の提唱」『日本文化財科学会会報』日本文化財科学会 1988.7
b. 寒川旭 「考古学の研究対象に認められる地質の痕跡」『古代学研究』116号 1988. 3
- (3) 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- (4) 文部省震災予防評議会『大日本地震史料』 1941
- (5) 宇佐美龍夫 「被害地震名論」『新編・日本被害地震総覧』東京大学出版会 1987
- (6) 稲沢市教育委員会の北条文献氏からの御教示による。
- (7) 尚松市教育委員会による弘福寺横瀬岐岡山田郡田園比定地遺跡において弥生時代に発生した噴砂を確認していることの御教示を寒川旭氏から受けた。



第50図 東区北東部噴砂平面図

第53図 配石造構平面図・エレベーション

第5表 南海地震の時期と被害の概要
(寒川 旭氏作成)

南 海 地 震	
684 (天武13) 年	土佐で10km沈下して海になる
○	→ (203年)
887 (仁和3) 年	大阪湾に津波
○	→ (212年)
1099 (康和元) 年	土佐で田千余町海に沈む (約1,000ヘクタール)
○	→ (262年)
1361 (正平16) 年	阿波の由岐に大津波
	→ (137年)
244年?	1498 (明応7) 年 和歌山市に津波
	→ (107年)
	1605 (慶長9) 年 四国南岸各地に津波
	→ (102年)
	1707 (宝永4) 年 四国南岸地域に大被害
	→ (147年)
	1854 (安政元) 年 //
	→ (92年)
	1946 (昭和21) 年 //

史料豊富

図 版

図版 1



風指遺跡全景（北から）



風指遺跡の低丘陵を望む（南から）

図版 2



西区遺構完掘状況

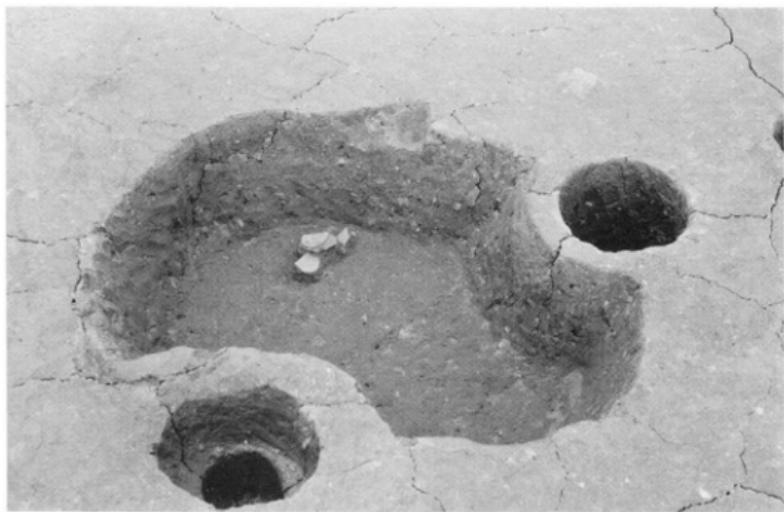


東区完掘状況

図版 3

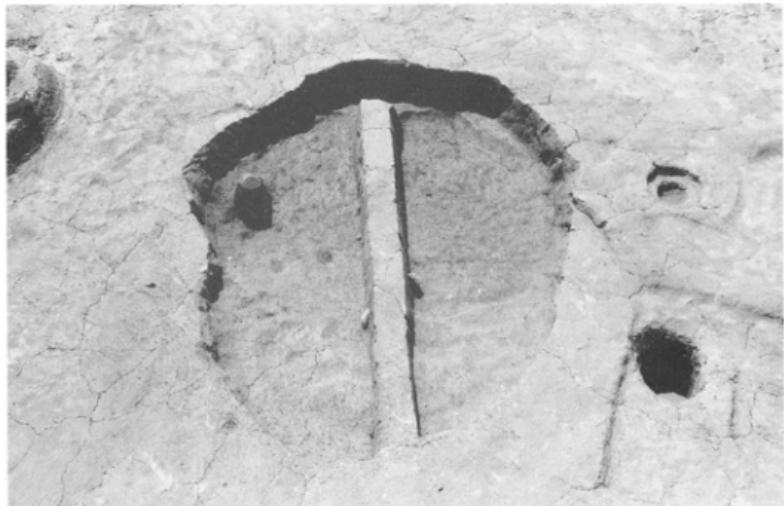


S K 2

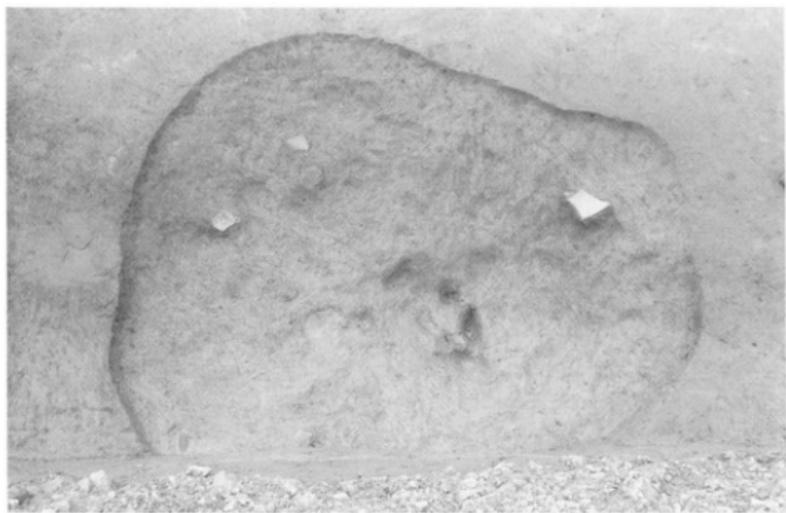


S K 3

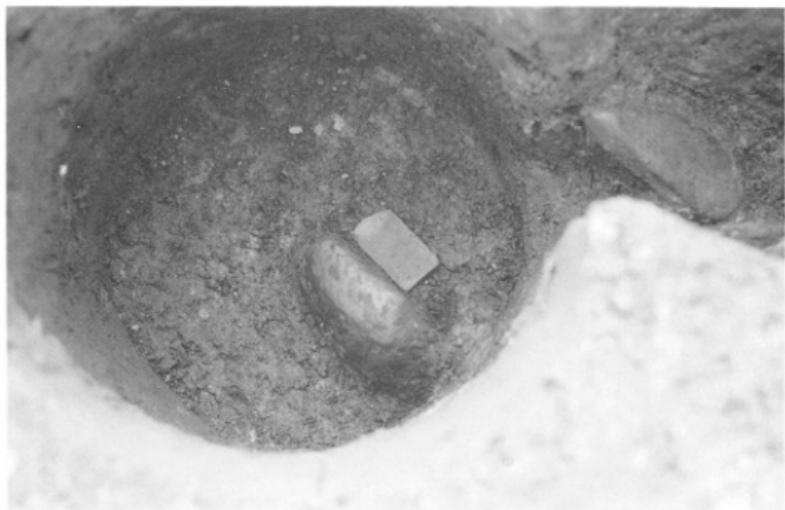
図版 4



S K 7 • 8



S K 17

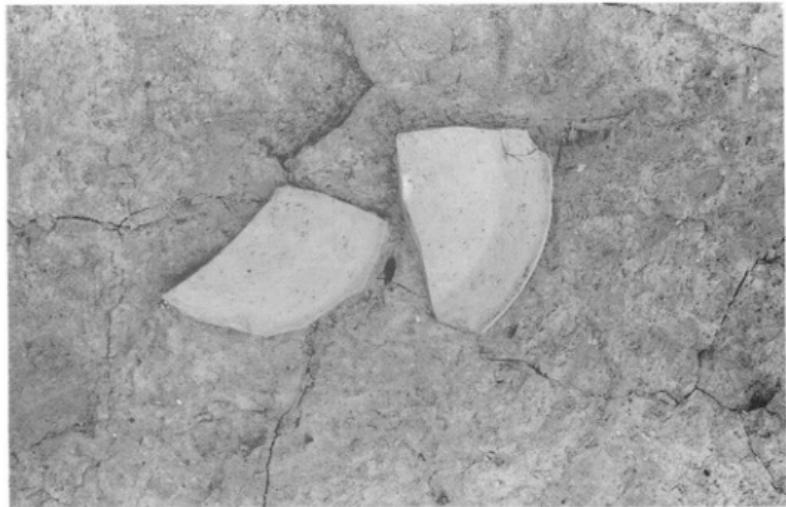


ピット1 床面磁石出土状況



SK 3 床面土師器杯底部出土状況

図版 6



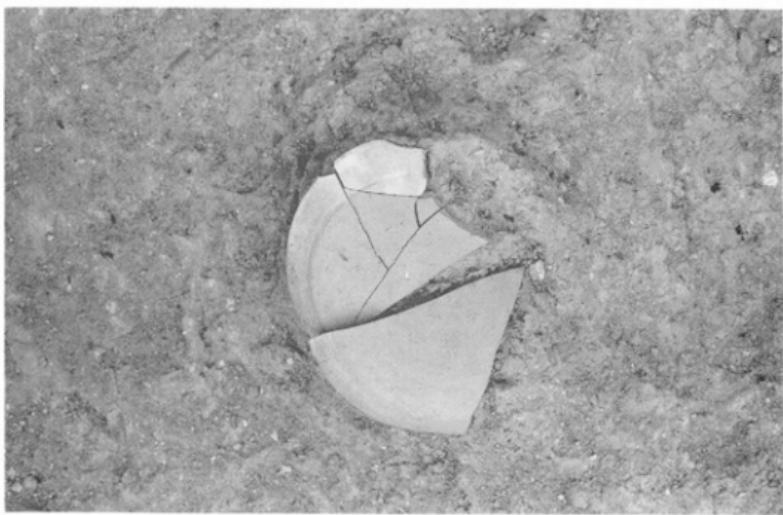
埋層遺物出土状況（須恵器皿）



同上 (土師器杯)



Ⅳ層 遺物出土状況（縄釉底部）

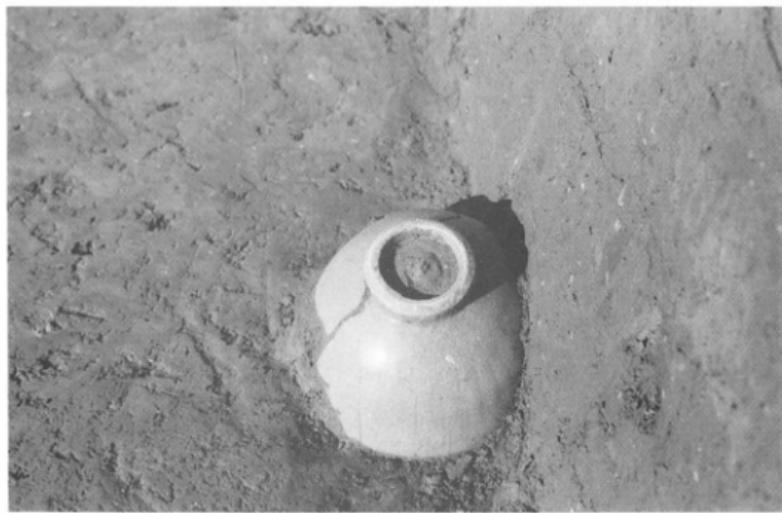


同上 (須恵器皿)

図版 8



IV 層 遺 物 出 土 状 況



同 上 (青磁瓶)



調査前遠景（北より）



西区遺構検出状況（南より）

図版 10

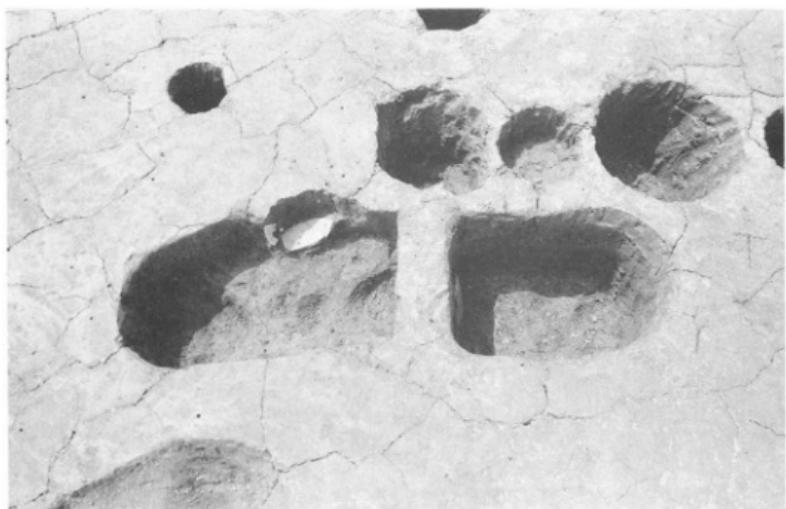


西区西壁セクション（東より）



西区Ⅲ層遺物出土状況

図版 11



S K 6 遺物出土状況



S K 6 遺物出土状況

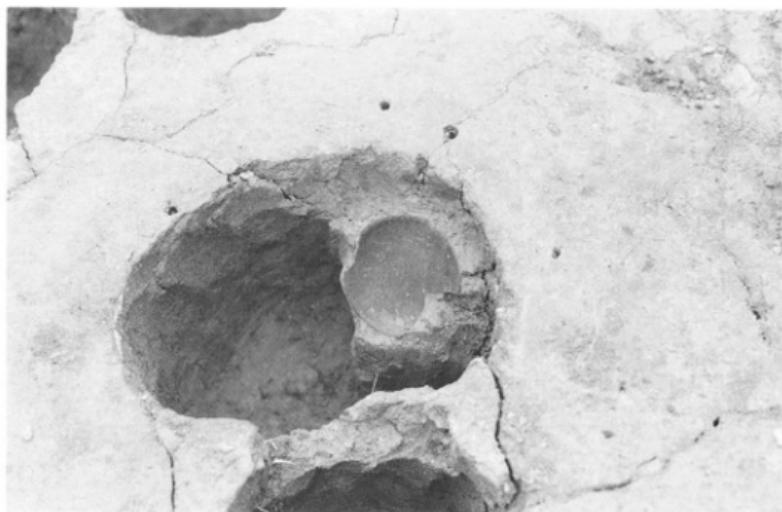
図版 12



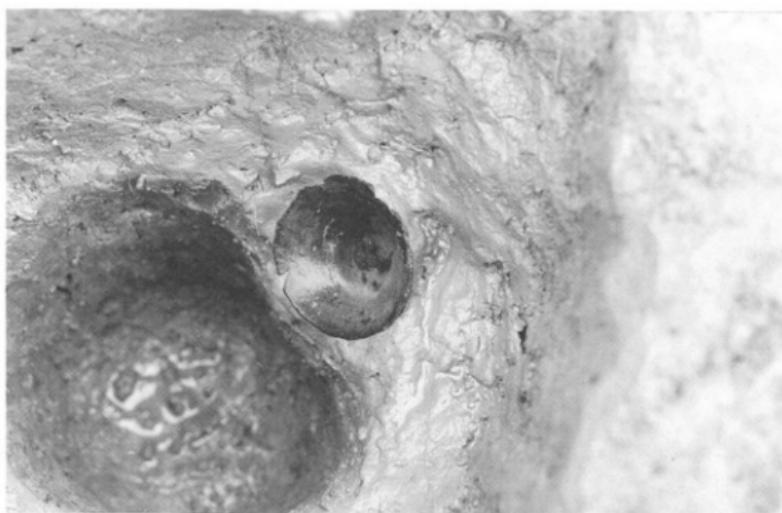
S K 13 遺 物 出 土 状 況



西区・E-33・P・2 遺物出土状況



西区・C—35・P 10遺物出土状況



西区・B—37・P 1 遺物出土状況

図版 14



S K 12 • 22 (西から)



S K 18 • S K 11 (南から)



S K 20 • 29 (東より)



S K 37 • 38 (西より)

図版 16



S K 31 (西より)

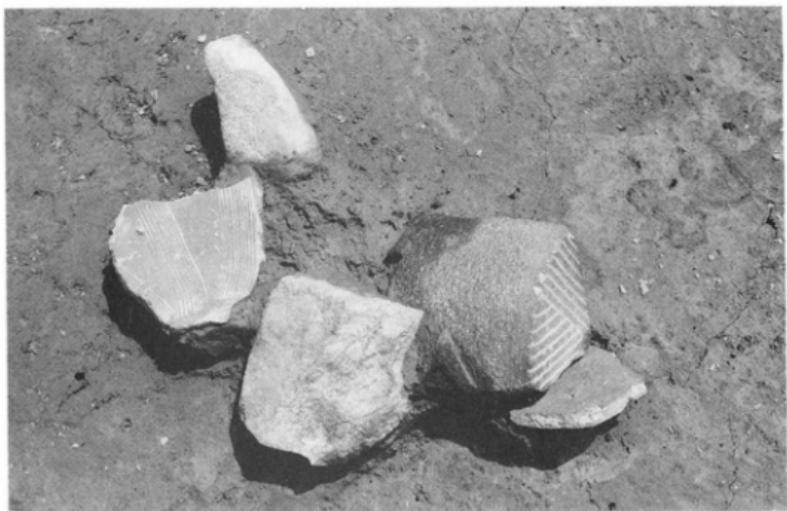


西区完掘状況（北より）

図版 17



東区遺構出土状況

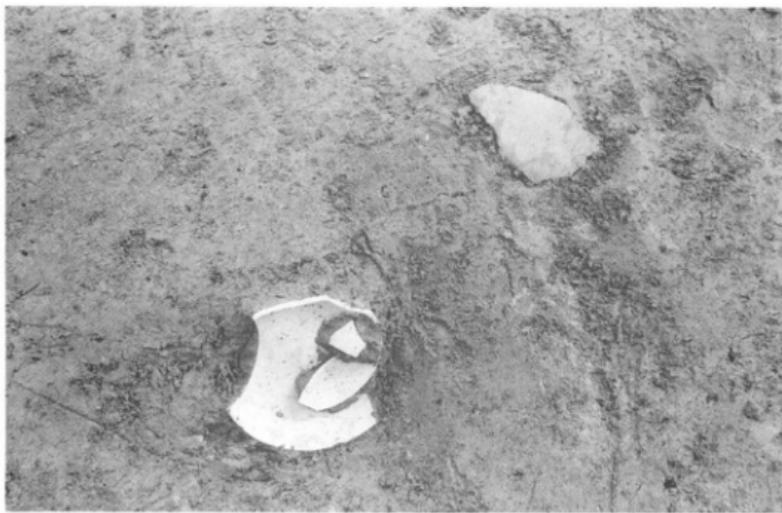


東区Ⅲ層遺物出土状況（備前・茶臼）

図版 18



東区Ⅲ層遺物出土状況（青磁）



東区Ⅲ層遺物出土状況（白磁）



東区Ⅲ層遺物出土状況（白磁）



東区Ⅲ層遺物出土状況（白磁・瓦質土器）

図版 20



東区遺物出土状況（白磁・備前）



東区Ⅲ層遺物出土状況(天目茶碗)

図版 21



東区Ⅲ層遺物出土状況（備前）



東区O-26・P38遺物出土状況

図版 22



東区配石遺構（西より）



東区配石遺構（東より）



東区配石遺構（南より）



O-24区周辺噴砂検出状況（西より）

図版 24



東区東壁セクション（西より）



東区東壁セクション（西より）



東区〇—24・噴砂北壁セクション



東区ピット群完掘状況

図版 26

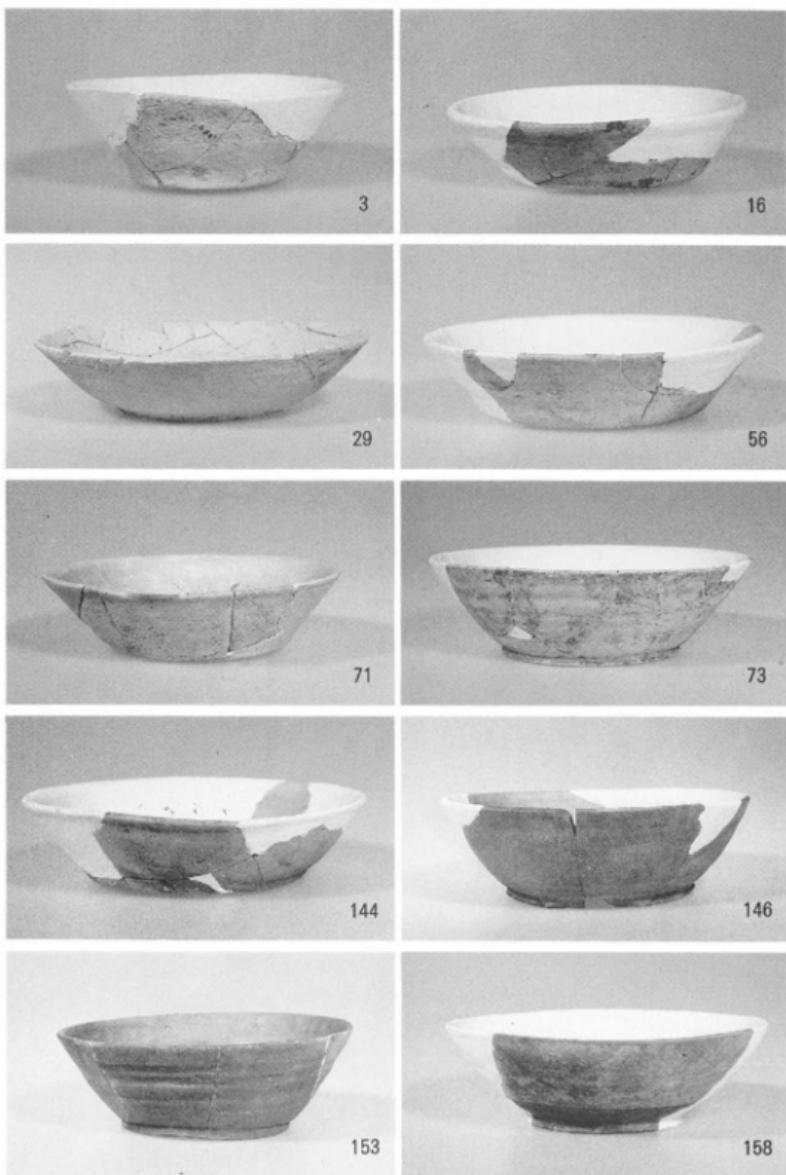


東区遺構完掘状況（西より）

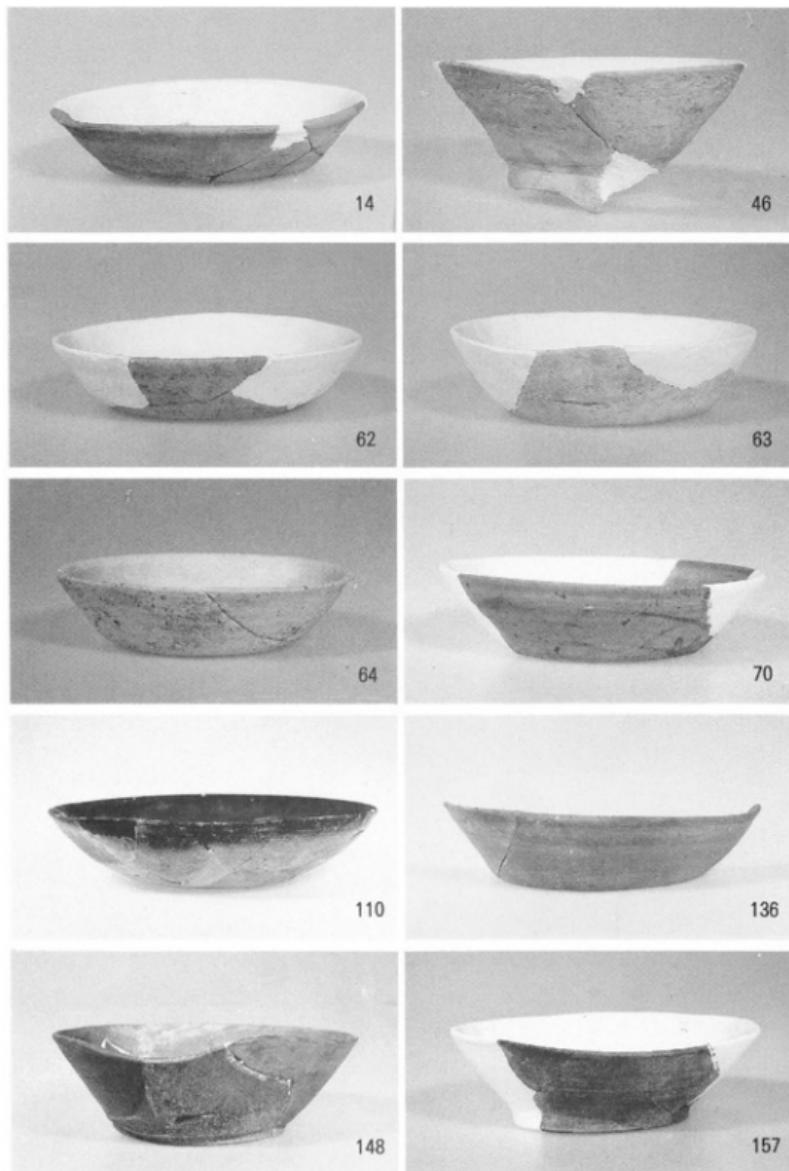
南側Ⅲ層除去

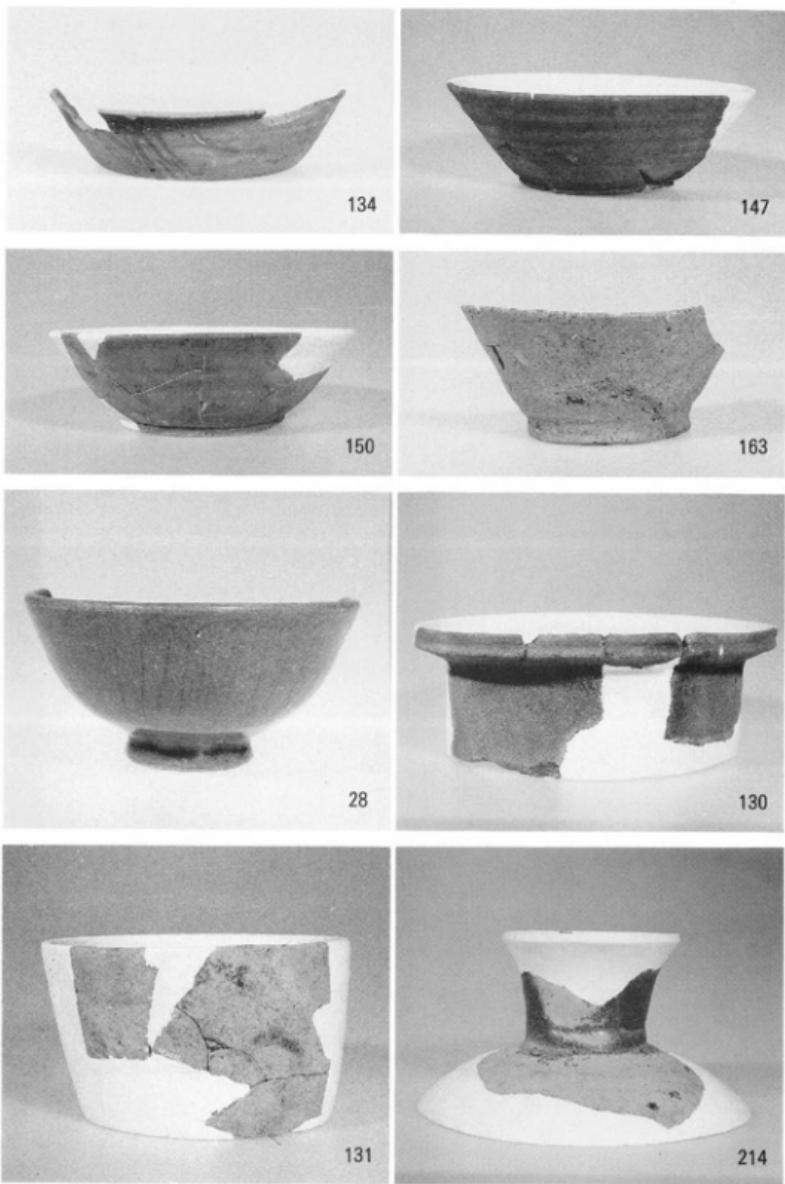


東区遺構完掘状況(西より)

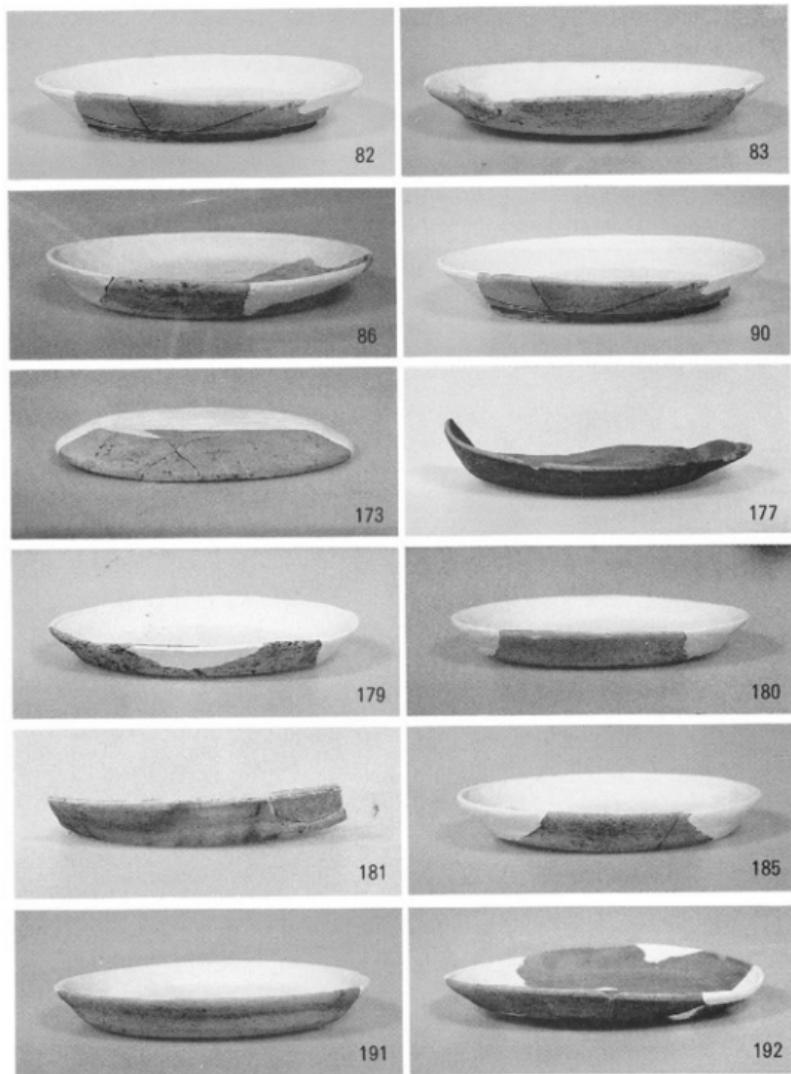


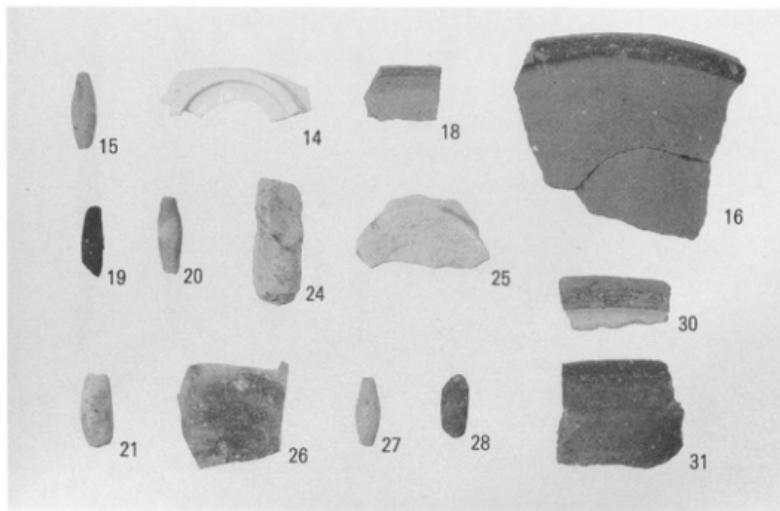
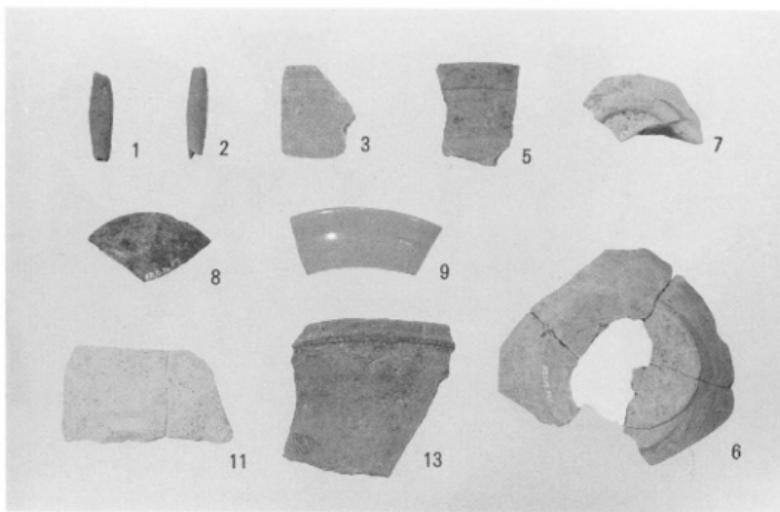
図版 28





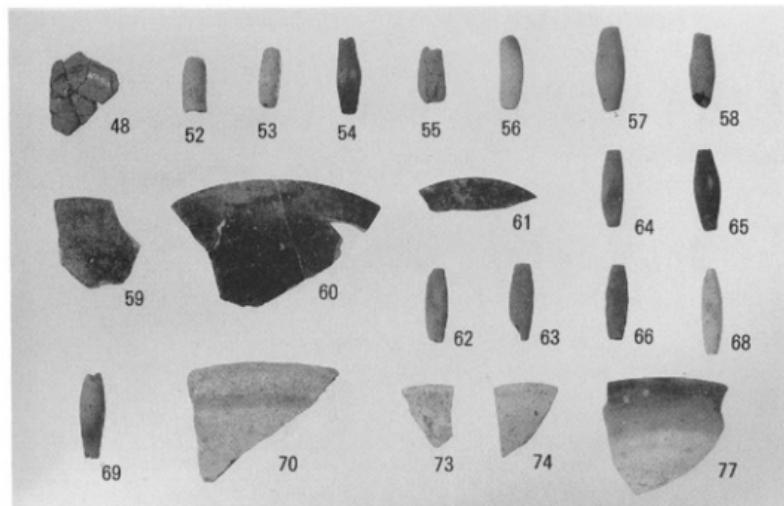
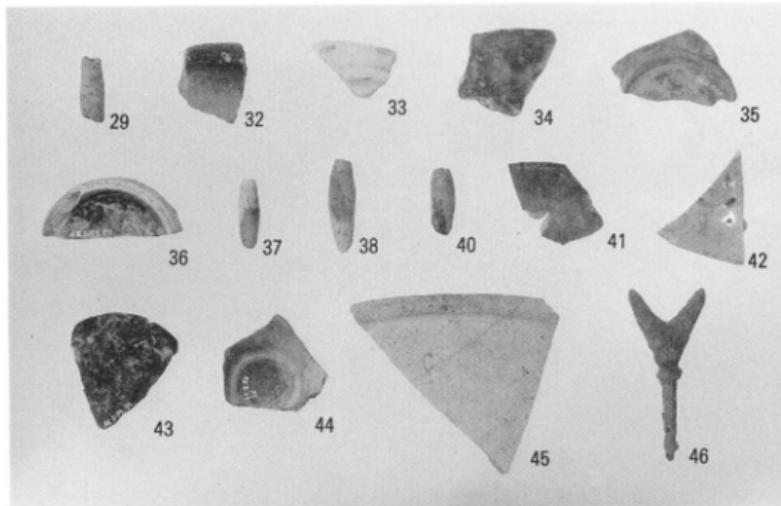
図版 30



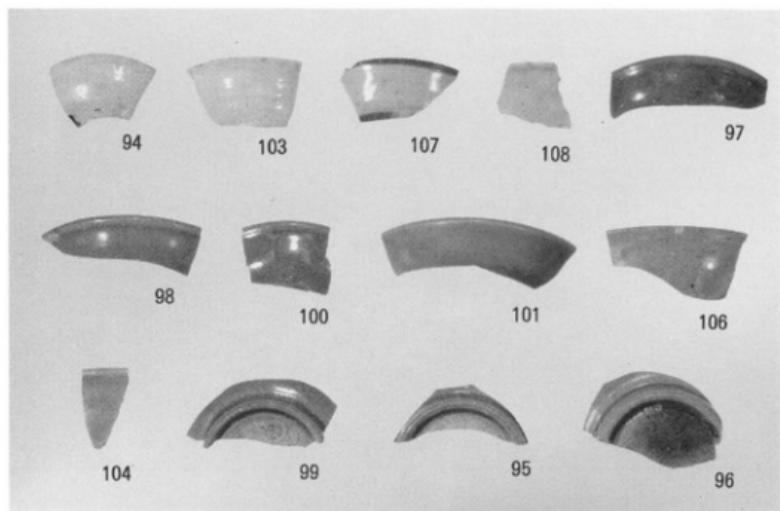
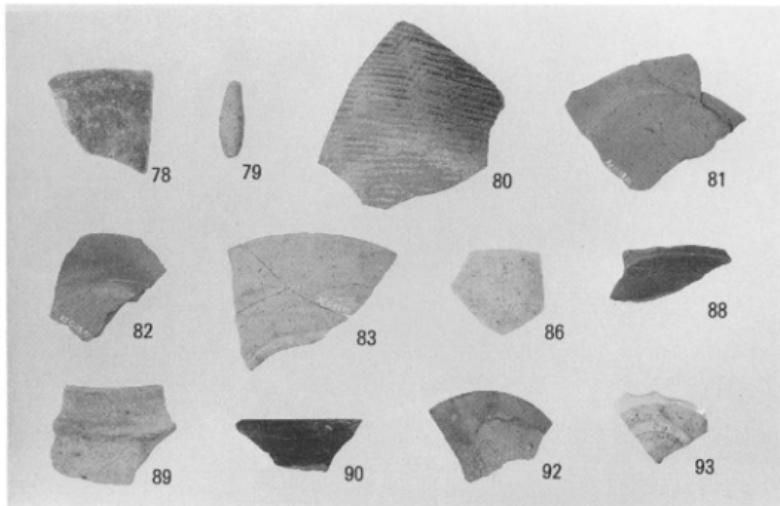


出 土 遺 物 5

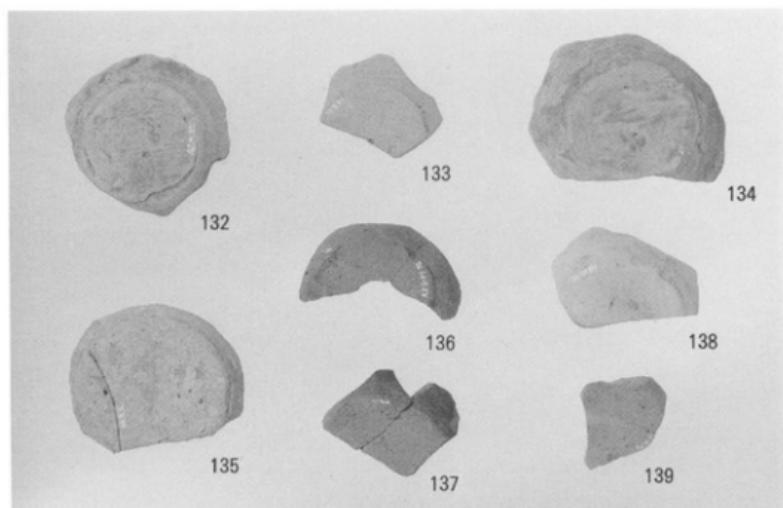
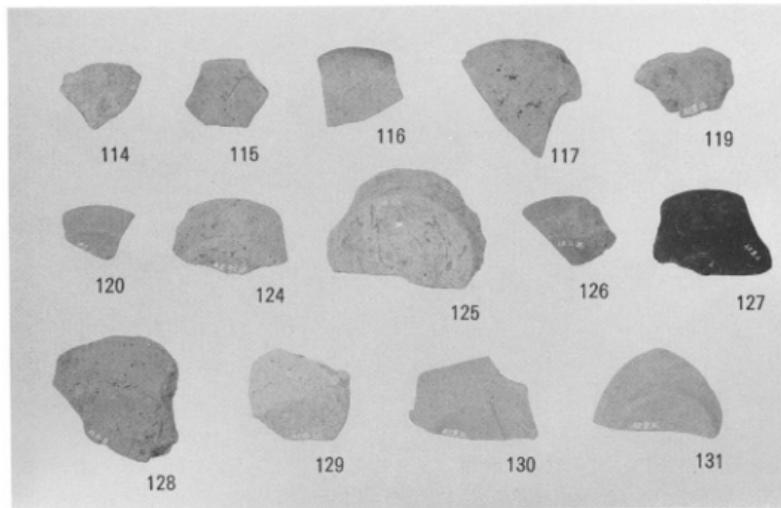
図版 32

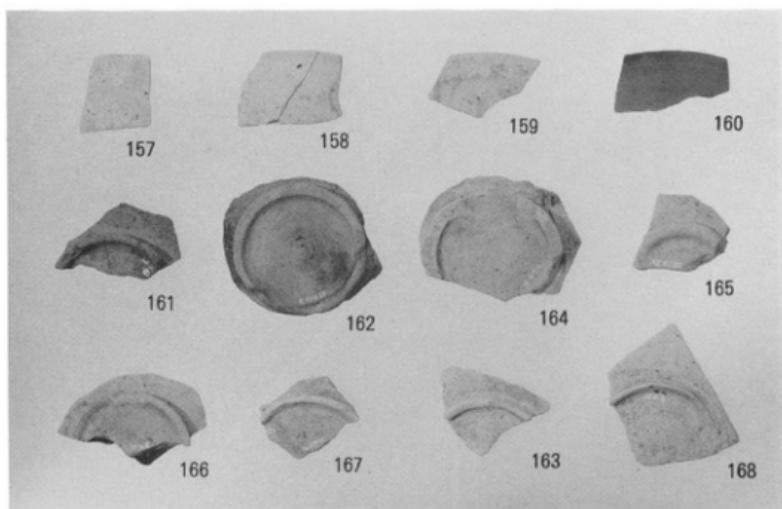
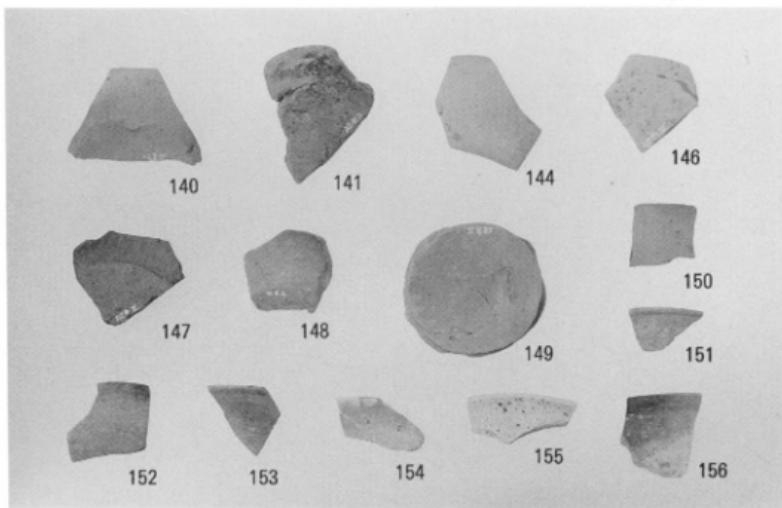


図版 33

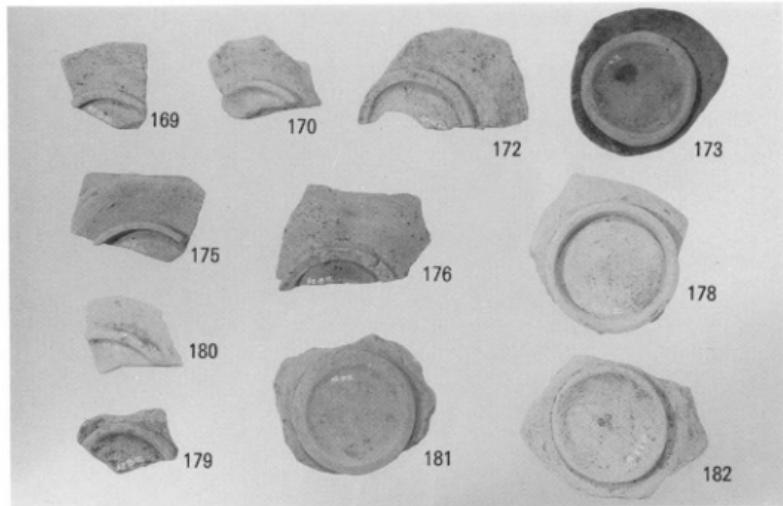


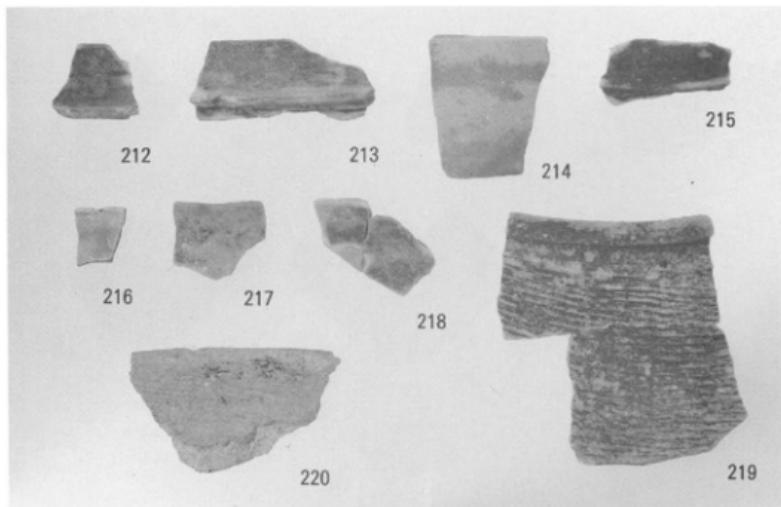
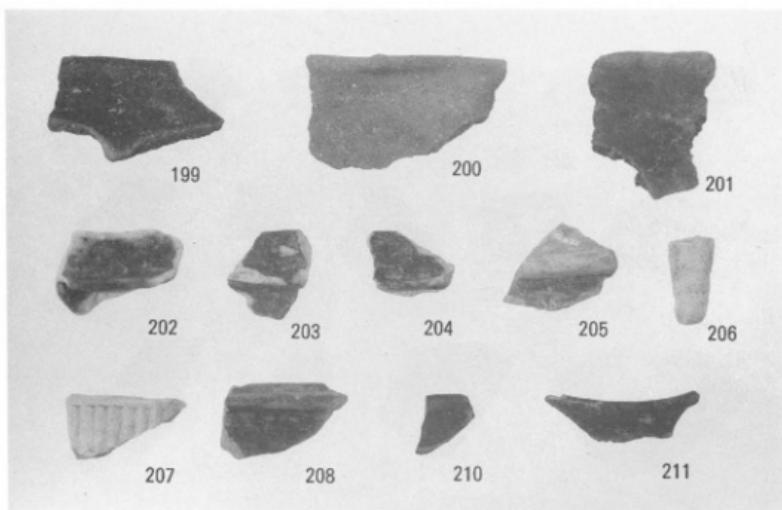
図版 34



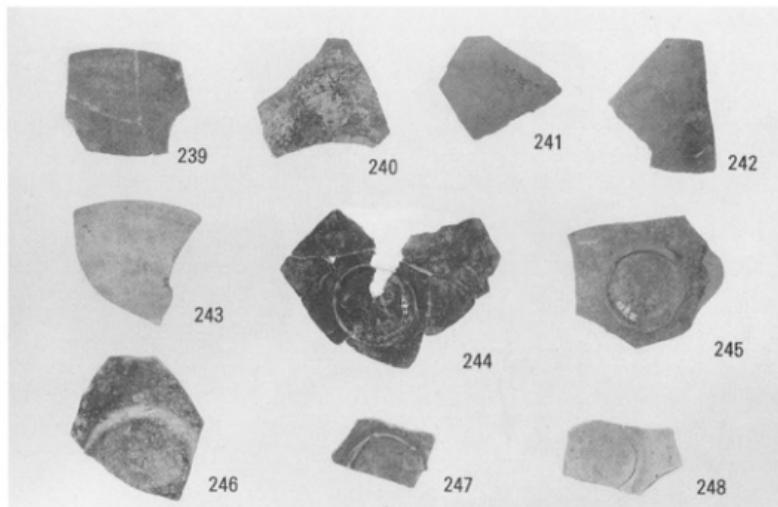
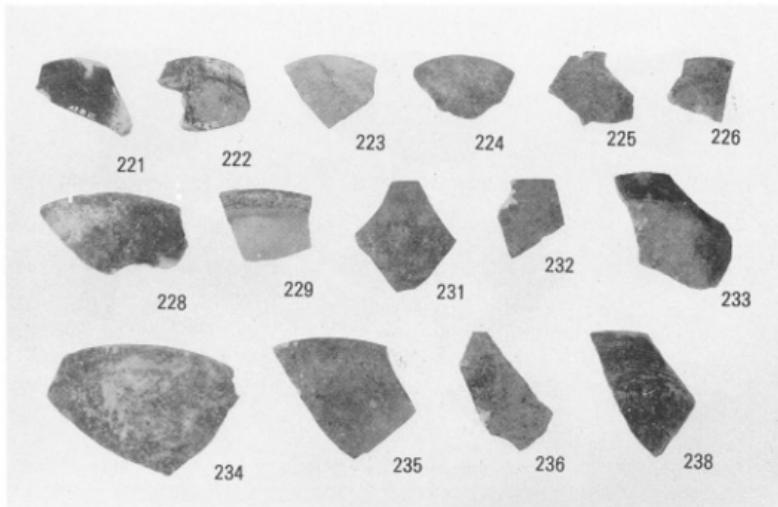


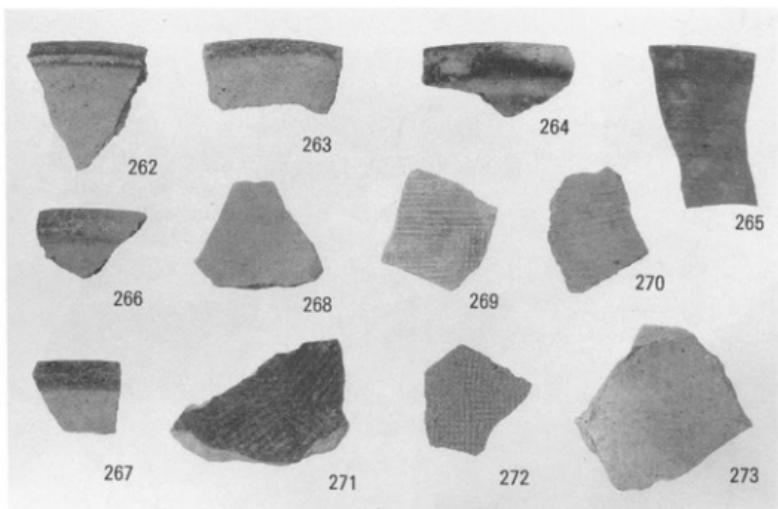
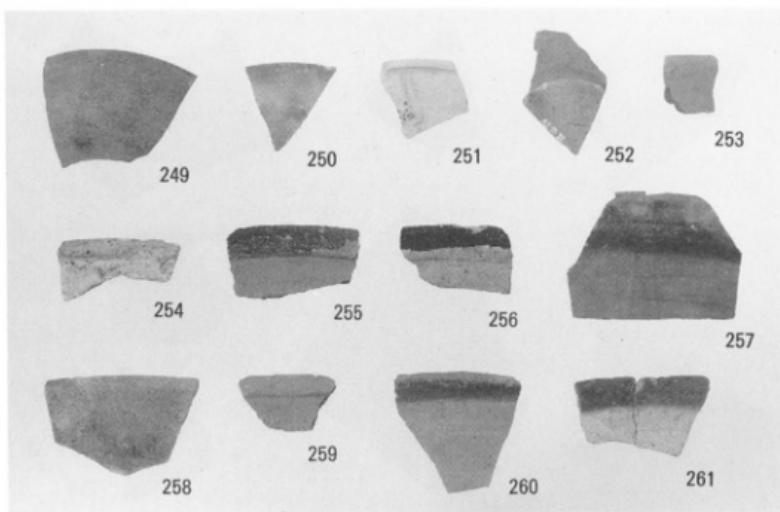
図版 36



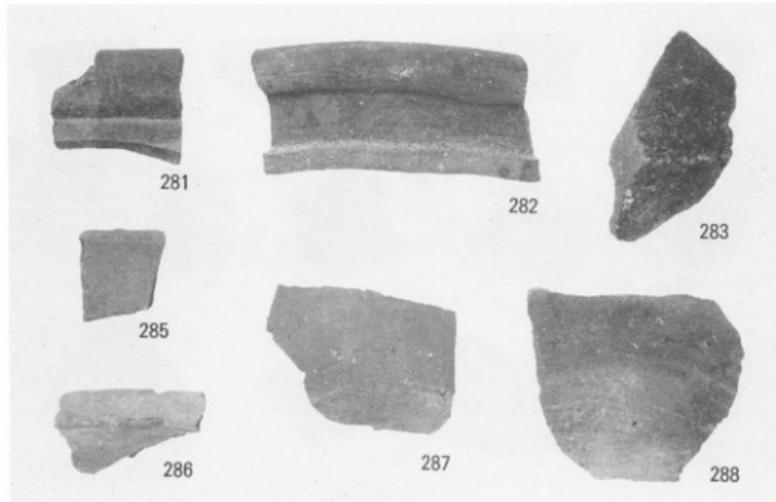
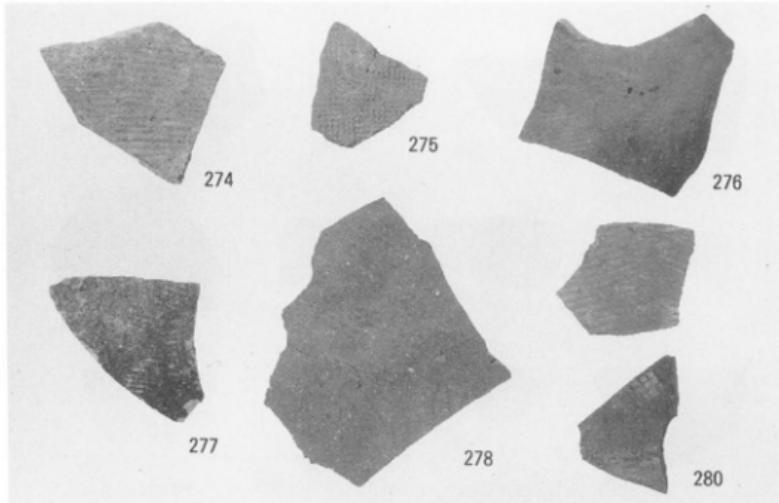


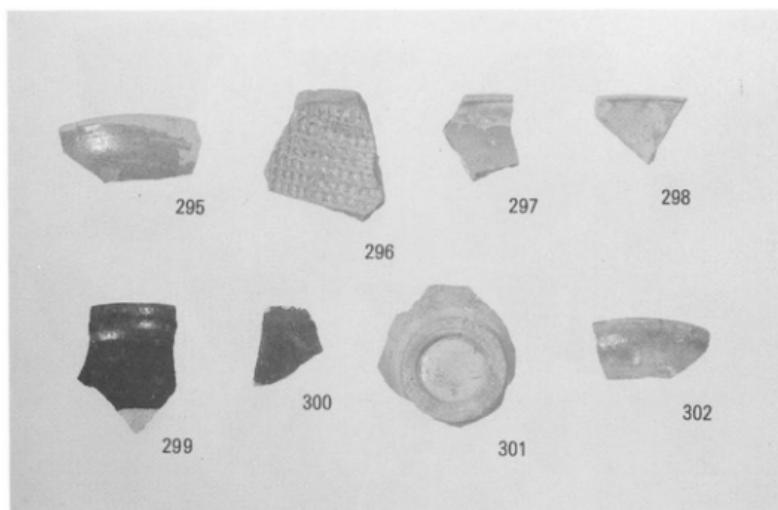
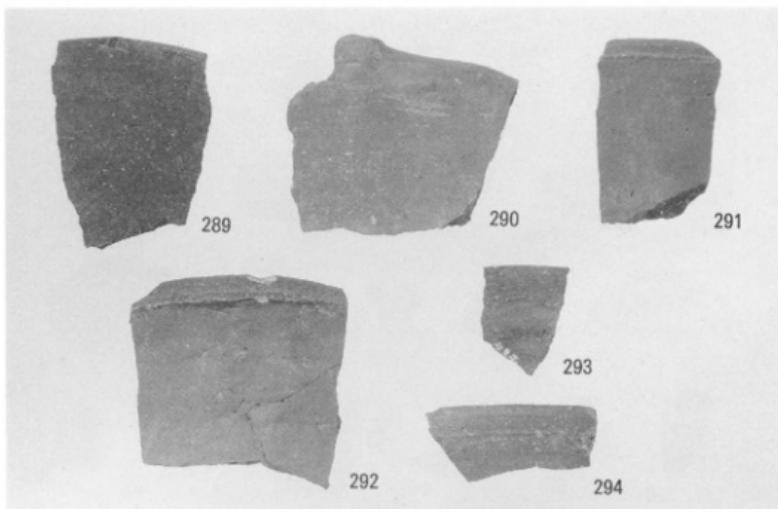
図版 38



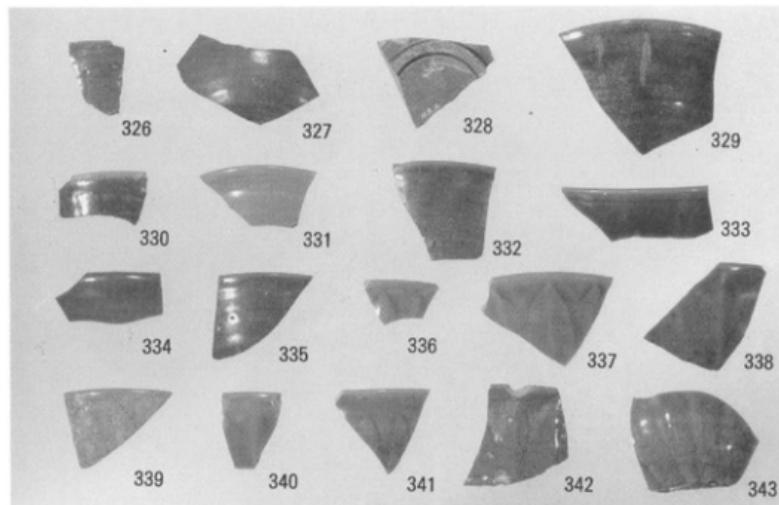
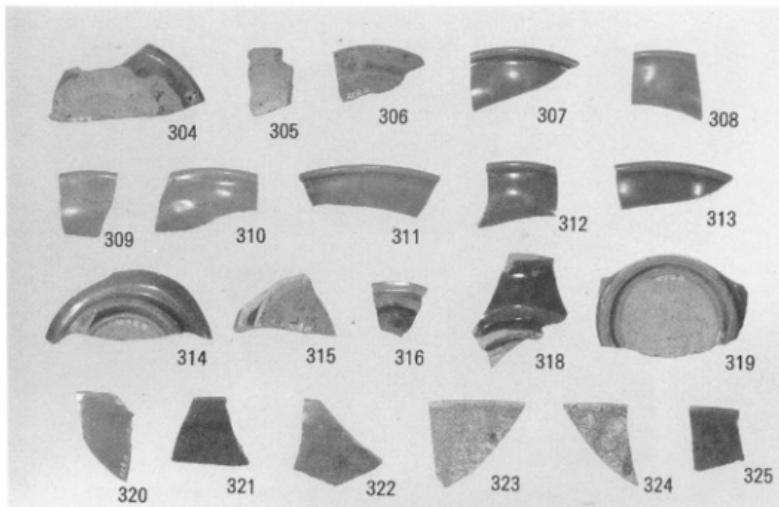


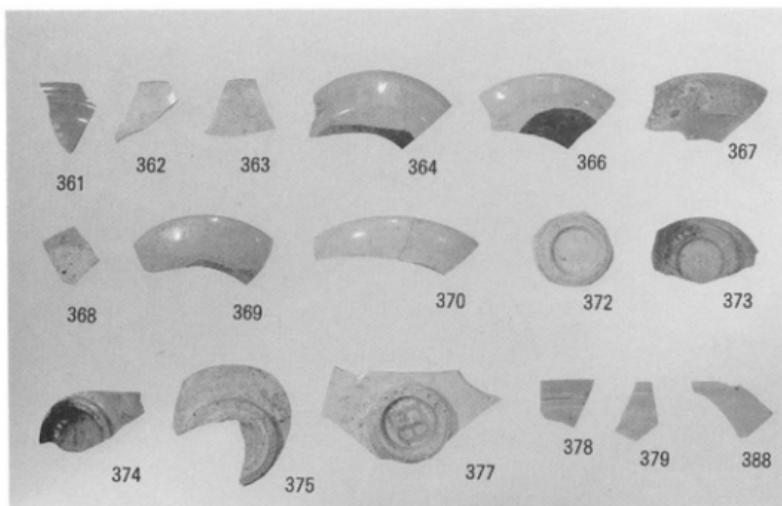
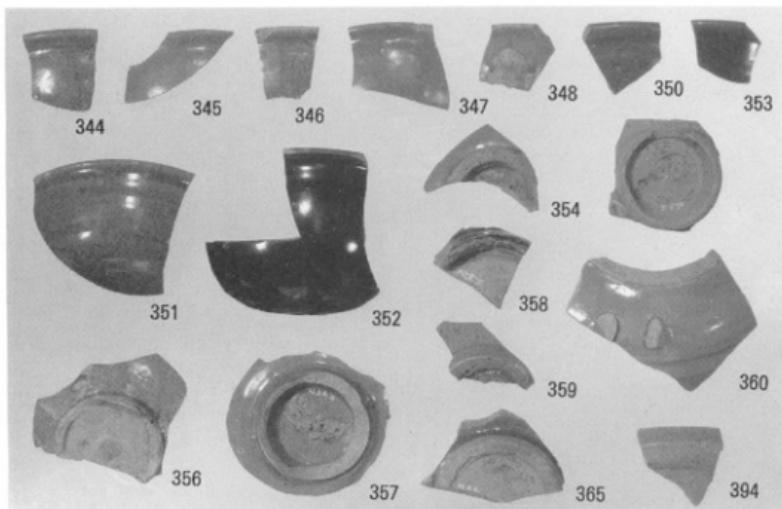
図版 40



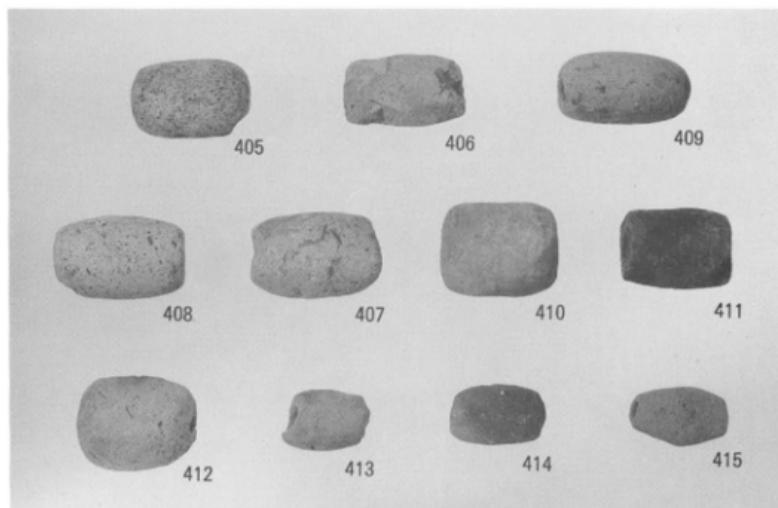
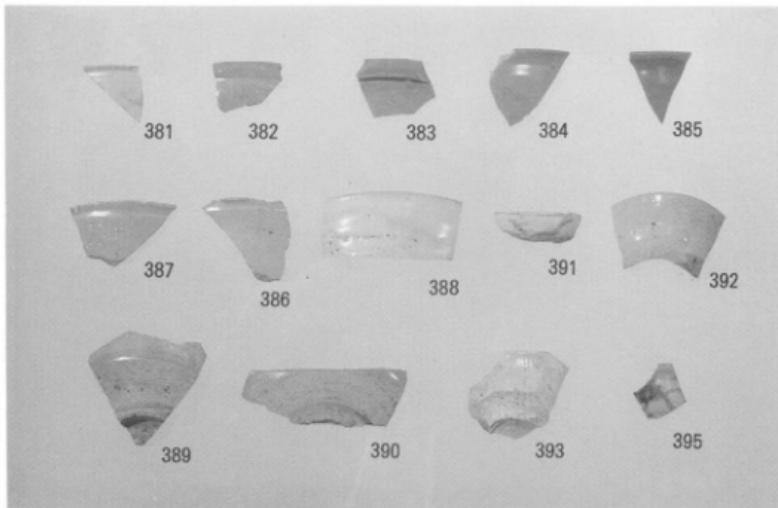


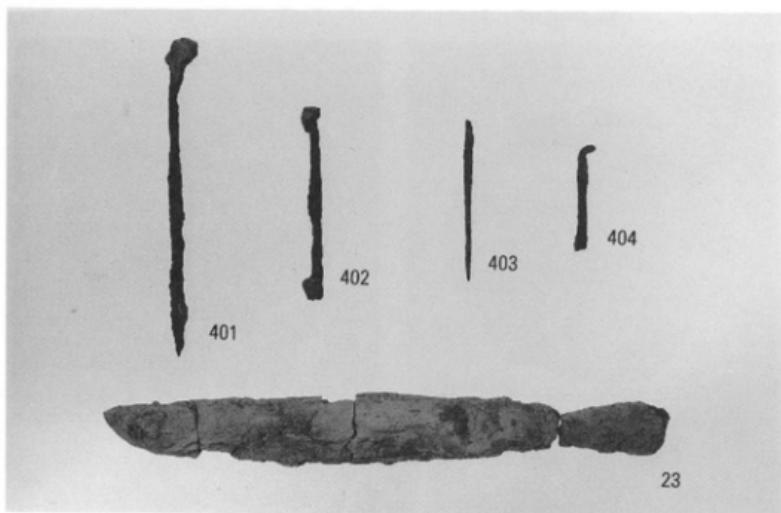
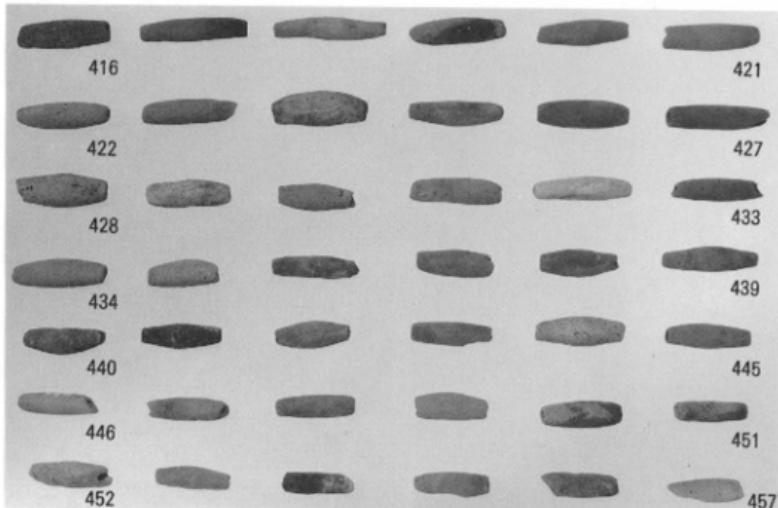
図版 42



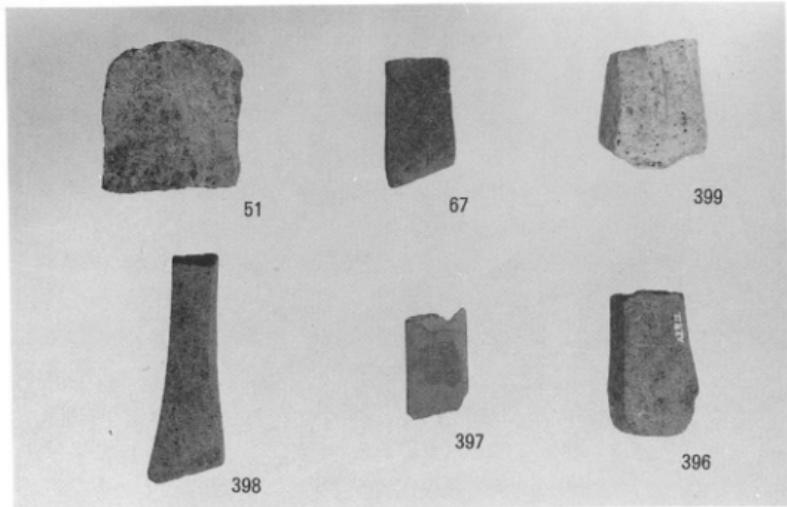


図版 44

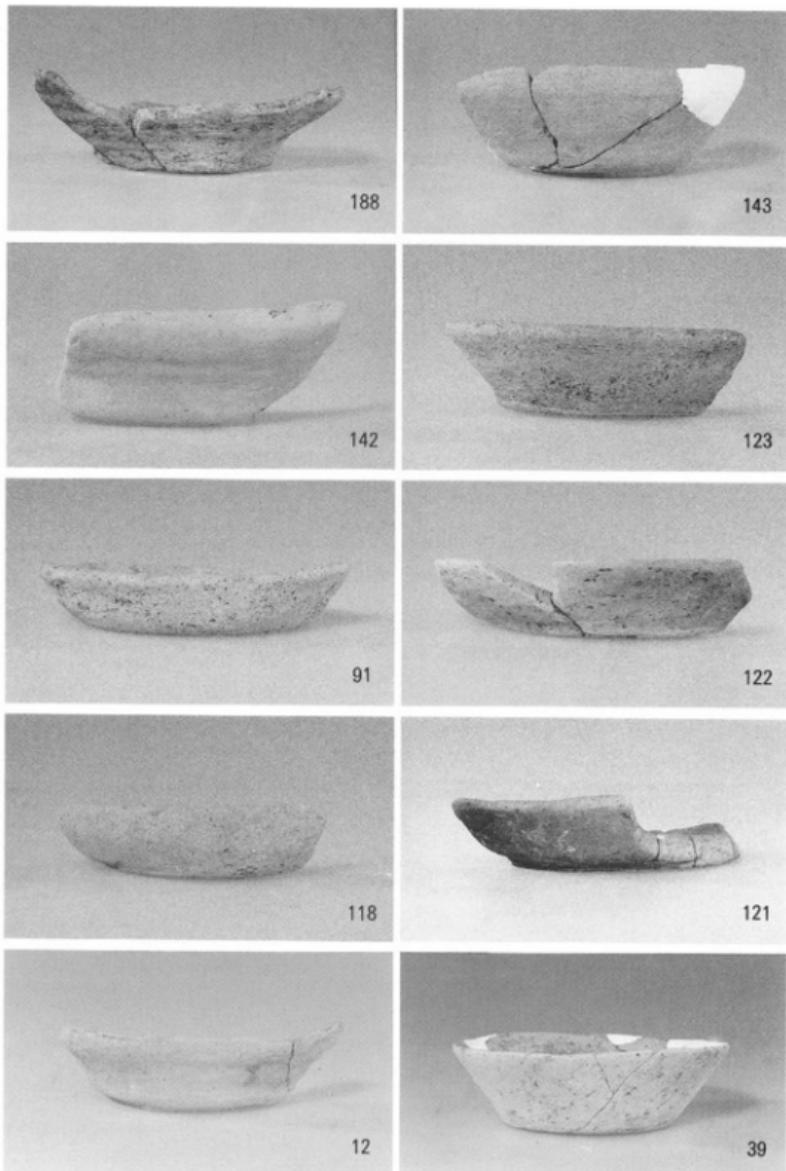




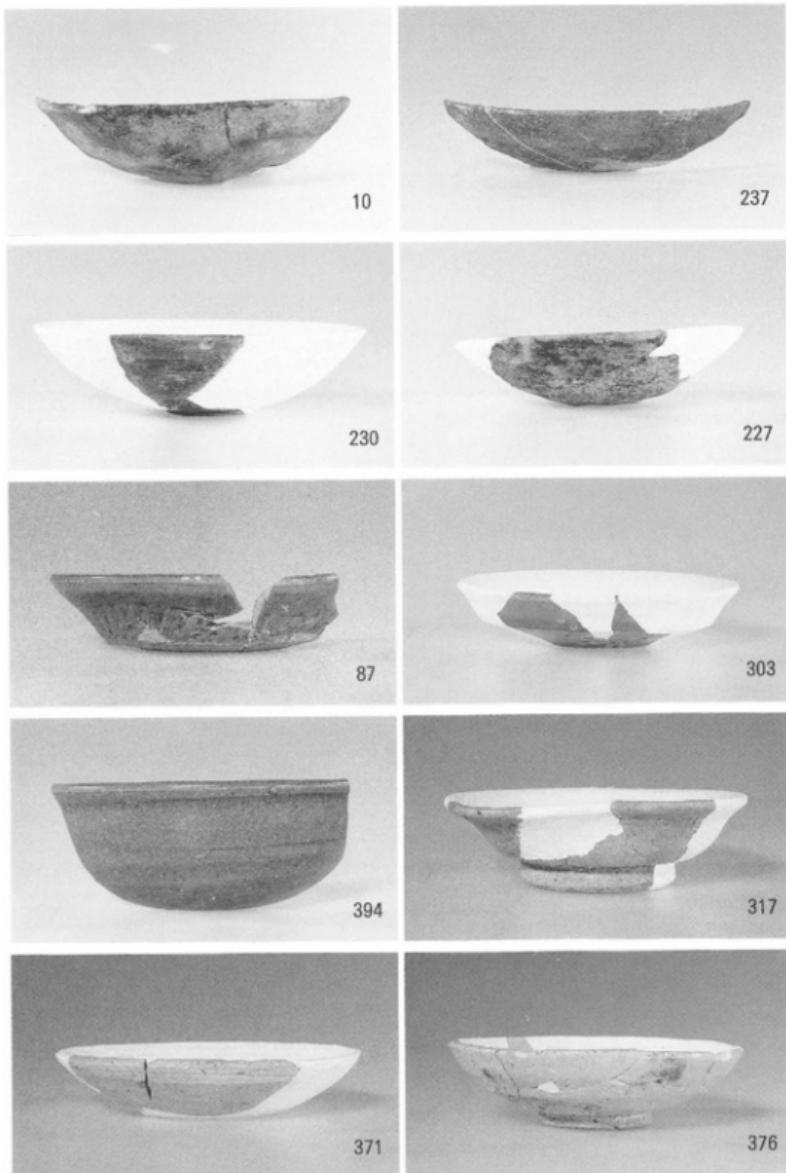
圖版 46



出 土 遺 物 20



図版 48





49



50



75



72



84



76

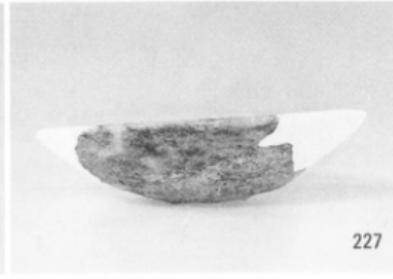
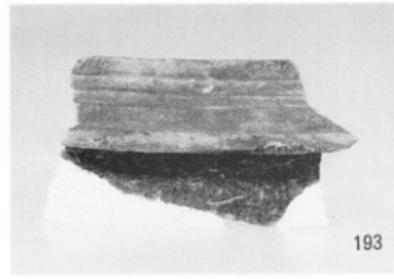
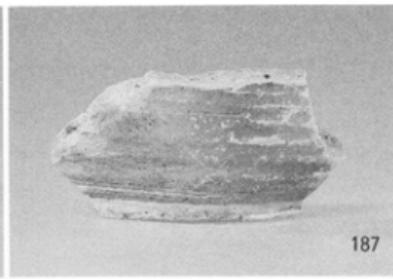
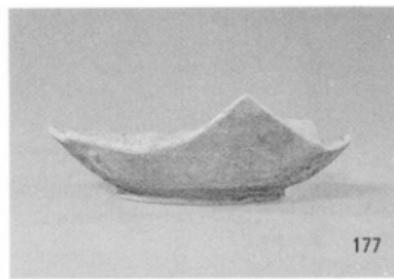
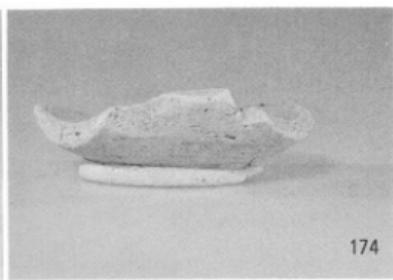
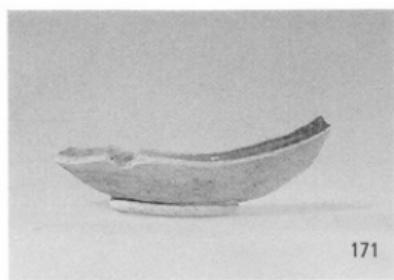
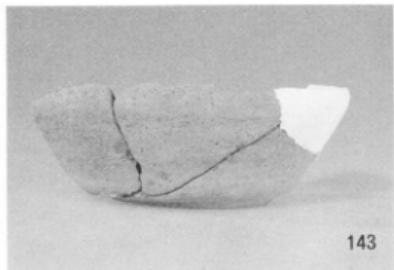


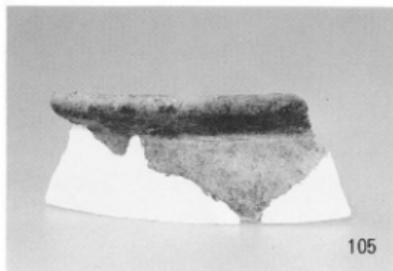
4



47

図版 50





105



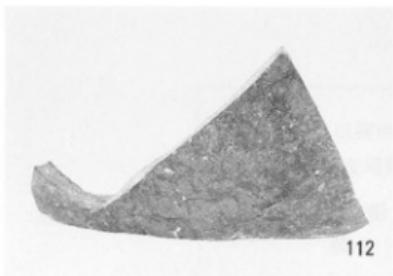
102



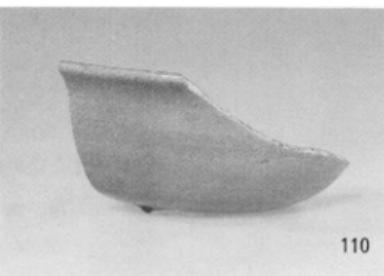
85



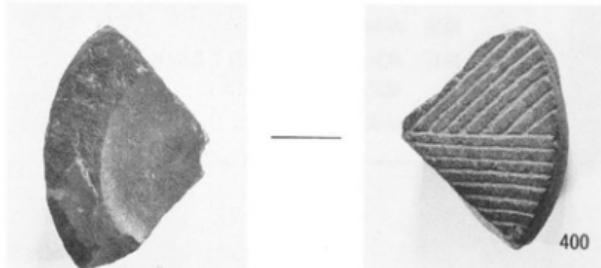
111



112



110



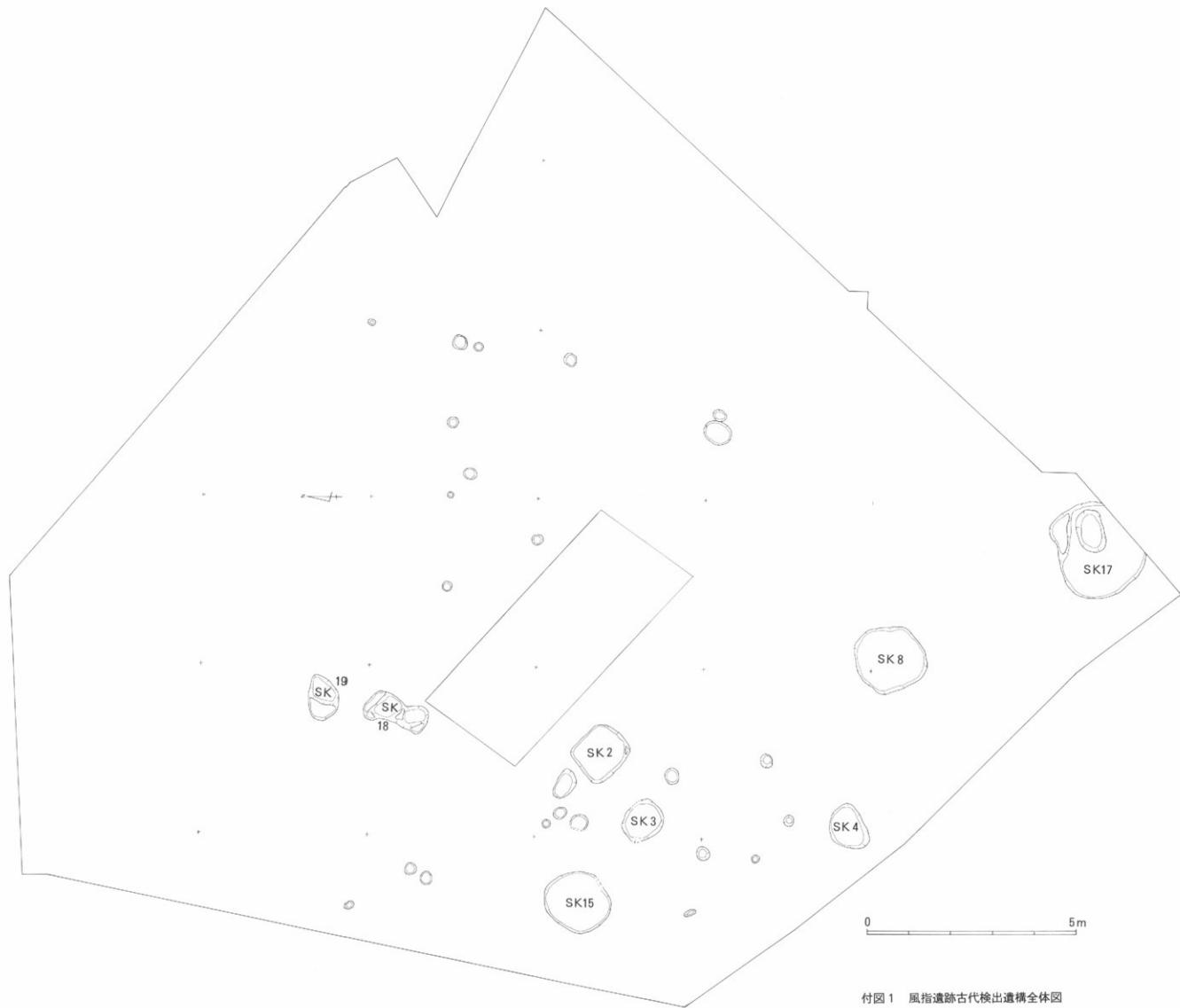
出 土 遺 物 25

後川・中筋川
埋蔵文化財発掘調査報告書II

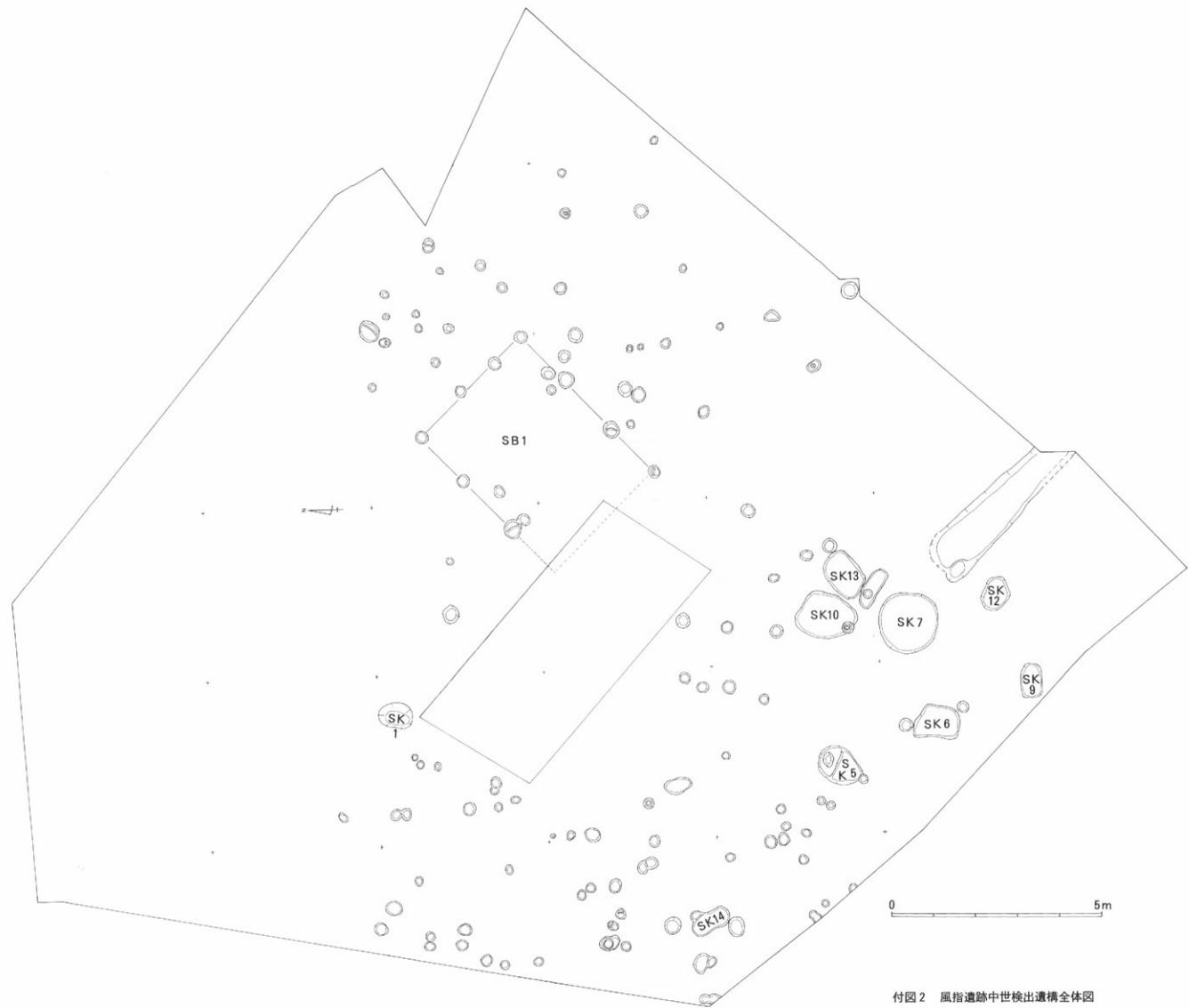
風指遺跡
アゾノ遺跡

1989年3月

編集 高知県教育委員会
発行 高知市丸の内1丁目7番52号
電話 (0888) 21-4761
印刷 弘文印刷株式会社



付図1 風指遺跡古代棟出遺構全体図



付図2 風指遺跡中世検出遺構全体図

